

の、據爲本補○
達、據平本爲本
屋本補本補

なるに翠簾、據
爲本補本補○
の爲本補本補○
當行○さ、原作
な、據爲本改
し、原作と據爲
本補本屋本改
なれば、原作
べし、據爲本改
など、原作ま、
據爲本改○右衛
門、大本爲本補
本作兵衛
と、原作も、據爲
本改
君、原作子、據爲
本改
など、據爲本補
本補○て、原作
などに、據同上
改
の君に、原作を、
據同上改

(研)にはとしの**大饗**せさせ給はんとていそがせ給。女房**達**なにわざをせんといひおもひたれど。『此たびの**研**には。ものぐるをしくさまあしき事なくて。たいうるけしう』との給はするに。ついたち二日臨時客とて。其日女房かすをつくしていろくをきたり。御几帳皆くちきがたなるに。翠簾の「いみじうあさやかにめてたきも。このはるにはむもれ木もなきにやとみゆ。はかなくついたち七日もすぎぬれば。關白どの(研)の大饗は廿日なれば。此みや(研)のは廿三日とさだめさせ給て。われも我もちとらじまけじと急ぎの、まりたり。關白殿(研)年ごる御子といふものもたせ給はぬなげきを。入道殿(研)上(研)などに覺しめしたるに。故式部卿宮(研)の御子の右衛門督(研)は關白殿のうへ(研)の御おぢにこそはおはしけめ。其君人におとなしきさまにぞ覺え給へりし。有國の宰相のむすめのはらに。女君ふたりむませ給へりしを。母もうせ給ければ。ち、君はとし比とかくまありき給て。それもうせ給にしかば。その女君達今はむげにおとなに成給て。いともしげにてありときかせ給て。關白どのの上(研)老らぬ人かはとて迎へさせ給て。との、御まかなひ御ぐし**など**まいりて。ふた所ながらさぶらはせ給程に。あね君は致仕の大納言(研)の御子の則理の君にかたらひたりけるほどに。をはりのかみになりければをはりいにけり。おと、のきみはわざとなもつけさせたまはてたすみ給まゝに。だいのきみとぞめしける。

殿、據本補
さはや、原作さ
やは、據爲本改
など、據爲本改
本補

ま、據爲本補

いて、據同上補

男、據同上補

ばえ、原作い、み、
據小本補本改
大、據本无、當行
にも、原作と、據
本改
大、據爲本補
かんぢらめ、據
爲本補本補

此君に**殿**(研)をのづからむつまじくならせ給にけり。御心ざしのあるさまにめざましき事どもありければ。うへこと人よりはさはやなどめざましげなる御けしき**など**かたはらいたくてやうくさとがちになりゆけば。さるべきにや有けん。ことごとはうへの御けしきにきたがひ聞えさせ給に。此事ばかりはそれにさはらぬさまに。ともすれば御ありきのついでにもたちよりたまふ。ひるなどもかきまざればおはします程に。たいにあらざるなり給にけるを。世の人のためてたきさいはひ人にいひ思けり。此比ぞ子うむべかりければ。關白殿(研)さるべき事など覺しをきて**いて**させ給ける程に。**男**君むまれ給ぬべしといひの、しれば。殿(研)はかたはらいたくて。御みづからはえおはしまさねど。おぼつかなさの御使まきり也けり。かゝるほどに。いとたいらかに**大**おのこ君(研)ぞ生れ給へりける。殿(研)きこしめすに。あさましきまでおぼされて。御はかしなどつかはす程ぞめてたきや。大殿(研)にもうれしきことにおぼしめして。七日だにすぎなば**大**とのうちむかへさせ給て。そこにてやしなひ奉らせたまふべくおぼしめしける。うぶやの程の事どもは。さるべき**かん**だちめ國のかみどもにおぼせられて。みなそこよりしのゝまりたり。さは世にかゝるさいはひ人もありけりとのゝゑるもげにとみえたり。入道殿(研)よりかくのたまはせたり。

としをへてまちつる松のわかばへにうれしくあへる春のみどりぞ。

御返きこえずおぼつかなし。御めのとわれもくとのぞむ人おほかりけれど。故伊賀守橋すけなりといひし人のむすめ。遠江守たけむすめ。紀伊前司なりのりがめぞたいいまはまいりたなる。殿（通）おはしまして御覽じては。限りなくおぼされけり。殿うへは（通）みやくの刀自おさめにても此御をだにうみたらば。我あるおりにとくみん』など覺しの給ければ。これはましていやしからぬ人なれば。かく覺しめすさまなりかし。かくてびは殿（通）のみやには。廿二日のよさ。廿三日のあかづきなどにぞ。さとの人々まいりこむ。廿二日に寢殿の東のたいなどの御装束。關白殿の大饗にどにかはるべきにはあらねど。御ひき出物の程かはる。又上達部のはじめは東の對につかせ給て。のちは御まへの南おもてのすのこにこそはおはすべければ。さようの事ばかりこそかはるべけれ。其日になりぬれば。日ごろいつしかとまぢおもひたりつるわなき人々こと人々の。きぬの色にほひにやをとらんまさらんのいどみ。むねさはがしかるべし。つぼねしてさぶらひつきたる人々は。つぼねながらよろづをしいそぎたるに。さとのこりの人々は。まいりて。臺盤所にてはかなく屏風木帳などをひきつぼねてひまもなくあり。またをのくといどもは。その局々にいきつゝぞむたりける。つぼねには又ものぬいさはきて『あないみじや。

おほかり、原作あり、據爲本改すけなり、據爲本改なり、原作すけ、據爲本改

く、原作う、據爲本改

ばかり、據爲本改○べけれ、據爲本改作べき、據爲本改改こと人々、據爲本改作はまた人々、據爲本改爲本補本改し、原作も、據大本改など、原作ばかり、據爲本改

ら、原作、據爲本改○は、據爲本改

その、補本无、當行思ふさまならぬ以下廿字、據小本補

かくすれども、據爲本補

やりど、據補本

又、據爲本補本補、據爲本補本

かしらをだにこそつくるはね』などいふもあり。またまはてたるは。はぐろめつけなどこゝろのどかに我身のけさうをしみがくもあり。あふぎなども給はせたらんは。そさうにぞあらんかしなど思て。さるべき人々にいひつけ。わが志しに書せなどしたる人は「その」心もとなかりせし。あるはおほんのはいかゝし給へる。まろが物の思ふさまならぬ。うちものつやさだめ。織物のもんをもてさけんに。色ゆるされなどしたる人は。したりがほに思てをしのはたるさま也。さらぬがこれをもどかしげに思ひて。心のかぎりはをとるべき事かは。唐ぎぬとすれ共かくすれどもむもんにてあるは。かたもんもなをものけざやかにうかばぬなげきをしたり。あけぬれば所々のみかうしあげ。妻戸をしあけ。半菰やりどあけひらきて。或はかみをつくろひかほをみがきなどさはぎたり。またみれば。いみじうおほきなるふくろつみなど。もてさけとりいれさまよふ。又みれば。ながもちからびつのふたに。いとあどろくしうたゝみいれてうちかさねて。ふたりなどかきてもてくるもあり。『人ひとりがいづくをきるべきにかあらん』とみる人々。あざみたり。やうく日さしいづれば。わざとならずあかしさまにて。くひものども里よりもてきてくふももり。又それにめをみやらずあふぎをつらぬき。たきものをたくもあり。つぼねのひとく『あないみじや』あけさせ給な。この日ごろ物さはがしうおぼしめして物

せ、原作さて、據
小本爲木屋本
本改、原作は、
わは、原作は、
據屋本本改○
御まへの、原作
本本改、原作
えうこつ、原作
本本改、據小本
本本改

今ぞ、據爲本補
本補

やがて、據爲本
本補

ぞ、據爲本補

もきこしめさず。けさだになを御ゆづけにてもたすこしきこしめせ。そこらの御
ぞどもはいかにもたげさせたまはんずる。御覽せずやはありし。昨日うへのかずか
ずのとりかさねて。左衛門(註)にきせさせ給て御らんせしほどに。左衛門のかみえう
ごかてすくみてたちて侍しは『なごいふも。きいれず心ひとつをさはぎたちたり。
かゝる程に日やうくたつの時はかりになれば。うへよりこの人々をそへまいり給
ふとあるおほせ哀。さぶらひの人々。あるは刀自すましなどいち／＼にいひわたす。
されどれの事ぞとてわがみえのとを返々みかきるたり。『あまり日たかうなりぬ』
と今ぞ仰事たび／＼になりぬれば参りあつまる。おほやけ人やがて几帳さし。又い
きてみちはらひなどしてまいる程。きぬのすそなどとらせ参るをみれば。あふぎも
えさしかくさず。やがてきぬのこちたくあつければたをやかなるけもなし。からぎ
ぬはやがてきつるま／＼にほころびていでぬればすべなくて。このむとなけれどむら
ごのいとまてぞかけためる。かくてまいりこみあつまる程に。御まへのかた思やら
れおくゆかしげなり。扱まいりこみぬれば。寢殿のみはしのまに御几帳うるはしく
たてさせ給て。そのにしのまより。わた殿より又にしの對東南おもてまで。ひとまに
ふたりづゝるたり。みはしの東のかたより東さまにおれて。水のうへのわたどのま
であるたり。かずはしらすをしはかるべし。みすはむらごのいとしてあみたり。へりな

いみづく、據爲
本補
たれも、原作
れ、據本改○
四、原作面、據小
本本改○つ、
せ、原作つき、據
爲本改
ま、原作に、據爲
本本改

どれいのさまならず。心ことにめとまりてせさせ給へり。かやうにてなみるたる人
の有さま。いはんかたなうおどろ／＼し。ひつじの時計に上達部参りあつまり給。大
かたの空は晴たれど。雪うちちりていみじうおかしうみえたるに。おまへのすなご
えもいはずおもしろきに。やり水などのをともおかしき程にながれたるに。とのば
らなどのまいり給。さるべき御隨身などのいみじうつぎ／＼しきさまして。中門の
ほどに弓杖つきてゐたる程など。たいゑにかきたるとみゆ。關白殿参らせ給さま。御
隨身おどろ／＼しうめでたしとみる程に。小野宮のおと(註)のまいり給ふをみれ
ば。御年の程よりはいみづくわかくみえ給て。猶いとかほこまかにあひぎやうづき
給へるさまなり。人よりはことになつかしうみえ給。大将かけ給へれば。其御隨身も
いとあざやかにまたて給へり。たれもまづ東のたいのもやに西むきにつかせたまへ
り。殿上人は南のひさしにつきたり。母屋は南をかみにし。ひさしはにしをかみにま
たり。事どもとのほりぬる程に。みなれいのさほうにて。おまへのかたに西の對ま
てみわたし給に。さらにもいはずきぬのつまかさなりてうちいだしたるは。いろい
ろのにしきをまくらざうしにつくりて打をきたらんやうなり。かさなりたる程一尺
余ばかり見えたり。あさましうおどろ／＼しう。袖ぐちはまるみいでたる程。火をけ
のさ／＼やかならんをすへたらむとみえたり。萬淺猿うもはづかしうも。こゝらの人

面、原作河、據補
本小本改

南の、據爲本補
本補

のこま以下九
補字、據爲本補本
此、爲本元、當行
このよいる以下
廿二字、據爲本
補

せ、據小本補○
づ、據同上補○
廿、爲本補本作
廿一〇ま、原作
に、據爲本補本
改、據爲本補
ども、據小本補

ども例の云々、
據爲本補○
みなまたこの

爲本補本元、應
行〇くこの、據
爲本補、恐當作リ
ぢすり、據爲本
補、據小本
ご、據小本
補

すそ、據爲本補
本補

る、原作な、據爲
本改
のほど、據爲本
補、據小本〇らん
扇にまきらはし
ても、據爲本補
本補

御、據爲本補○
ども、據爲本
補、據爲本補
れら、據爲本補
〇さ、據爲本補

いかに見るらんとすはろはしうて面て赤み給べし。拜禮はて、左大臣にてこの關白殿(通)おはしませば。それをさきとして。いとうるはしうのどかにあゆみて。寢殿の東おもてのみはしより登り給て。南の階の東面を一の座にて關白殿。つぎに小野宮の右のおと(通)つき給ぬ。つぎに中宮大夫(通)などさしつゝきなみるさせ給ぬ。皆御志とねに給て北むきにるさせ給へれば。御下がさねのしりどもは。南(通)かうらんにうちかけつゝるさせたまへり。かいねり。かさねやなぎ。さくら。さびぞめ。わかうおはする殿ばらは紅梅(通)のこまうすきあり物などにてもき給へり。色(通)に見えかがやきてりわたりたる程いみじうおかし。おはしましうて「此」みすきはをたれも御覽じわたせば。この女房のなりどもは。柳。さくら。やまぶき。こうばい。このよいろ。あるは匂ひにし。又かさりねりたるはもさぎのいつ色をとりにかはしつゝ。ひとり三いろづゝをきせさせ給へるにけり。ひとりは一色をいつづゝ。みいろきたるは十五づゝ。あるは六づゝ七づゝ。多きたるは十八廿までぞ有ける。このいろいろをきかはしつゝなみるたる也けり。あるは唐あやどもをきたるもあり。あるはおりもの(通)かたもん。うきもんなど。色々にまたがひつゝぞきためる。うはぎはいつへなどにまたり。あるは柳などのひとへはみなうちたるもあめり。から衣どもの色ども例の色ゆりたるは例のと。さらぬは「みなまたこの」おなじくこの色どもをと

もかはまづいきたり。もはみなぢすり(大)おほうみなり。御木帳ども。紅梅もえぎ櫻などのすそ(通)にて。みなゑがきたり。ひもどもあをくてかやけり。此ひとへは皆あをばなりけり。殿ばらあさましうめもあやにて。かたみに御めをみかはしてあきれたまへり。けふも四條大納言(通)うちのおと(通)まいらせ給はず。故う(通)の御忌月なりければ。内のおと(通)は「むげにまいらざらんはおぼつかなくゆかし」とて。御なをしにてうちに參らせ給て。女房の中にまじらせ給ひて。きぬのすそ(通)ぞぐちつくろはせ給。かみかきなどせさせ給を。女房中(通)いとわびしう。身よりあせあゆるとはこれをやいふらんと。わびしうおぼえておもてあかむ心ちすれども身はひえたり。おほかたのありさまは。おまへの御覽するをはづかしう。いかにく人とのかたあふるまひよりはじめ。きぬのありさまにほひのほどなどを御らんずらんと。わびしくをのくおもひつゝ。このなみるてみ給ふらん女どもは。扇にまきらはしてさはれたれともまられ奉らねば。御靈會のほそおとこのてのさひしてかほかくしたるこちするに。このうちのおと(通)のほゝゑみまされさせ給ぞ。いみじうわびしき事なりける。この殿ばらの御かほり匂ひども。さまくめてたくふきいれらるゝに。またうちには梅花をえもいはずたきいでさせ給。けふの侍従は左右大臣にもまさりぬべくなんん人々おぼされける。おまへにはひんがしのらうのまへのか

て、據小木屋本

す、據爲木屋本
此下恐脱り字
め原作あり、據爲
本小本改〇て、
據爲本小本補
また、原作さ、據
爲本改
行

所、據久木屋本
本〇の、爲
本元、當行〇、
據小木本補

な、據久本補〇、
ひけれ、原作、
今從爲本〇宮の
御せうとの、據
爲本補

補、據爲本補本

など、據爲本補
らせ、原作り、據
爲本改
か、原作ろ、據補
本改〇おしなへ
て、以下十六字、
據爲本補本補
いと、據爲本補
〇ち、原作さ、據
爲本改

な、原作ほひ、據
爲本小本改

きて、據爲本補
〇ま、據爲本補
本補

たに。やゝにしにいで、かく人ども候。おまへのひたきやのもとむめの。人志げ
きけはひの風にちりくるかほりもめてたし。れいのさほうの樂人四人づい^てき
て。萬歲樂太平樂などまふほどいみじうおもしろし。かくのをとなども。おりからに
やすぐれてめてたう聞えたり。樂人共おまへのかたのみ^すぎはをうちまほ。樂め
ぐる心ちも興ありて。物のねいとおもしろま。小野宮のおとも。關白どのにさしより
^てきこえ給て。『おもしろき事どもめでたき事。いまま年へぬる人はをのづからみ
る物也。いまだけふの女房のなりのやうなる事こそ』まだ^みはべらね。たゝかゝる
事はあさましうけしからずぞありける』など申給へば。關白殿うちほゝゑませ給ふ
ほども。みすの内には何夏ならんとすゝろはしう思へし。『一日の關白どの、大襲を
ぞ。とのゝありさまより姪め。えもいはずめでたしと思ひまに。かれはやみの夜なり
けり。けふはあきらかなるかゝみにさしむかひたる心ちしてこそはわがはづかしけ
れば。さやうにこそはおぼえ侍れ。おとこ^所の^は女房とほにていと心やすかし。
まづけふはよろづのことのあまりいたうつくろはるゝに。いとわびしや』などの給
も。いとさまゝおかし。まことやべんのめのとのめいこそは。けふやがておとなに
^なさせ給ひければ。とのばらなどまいりあつまり給ぬれば。まづ^宮の御せうとの中
^宮權大夫殿^は。大盤どころのかたよりいらせ給て。ものごしゆはせ給けり。御か

はらけ共たびくになりて。殿原の御物はぢもすこしゝのびがたげなり。日のくる
る程に。所々のはしら松どもに。またてごとにもしたるひかりどもなどのひると
みゆるに。また女官ども^{など}のしたりがほに。あやしのなりどもそばめたてゝ。物
つゝましげも思ひたらぬけしきにて。御となぶらてごとにもまいらせわたすほどなど
も。さるかたにおかしうわか所などにかゝる物いできなんやと。おしなべての殿上
人などもおかしうみゆるに。衛士のなにぞやをかりぎぬのまねにしてきて。なでう
事か侍めると思たるけしきして。いりあて^{いと}心ようたちるたる程。いみじうけだ
がうめとまりて御らんず。殿ばらいまは御あそびになりて。いみじうおかしきに夜
にいりたり。ものゝねども心ことなり。御かはらけにはなか雪かのちりいりたるに。
中宮大夫うち誦し給。『梅花帯雪飛翠上。柳色和煙入酒中。』又たれぞの御こゑに
て。御かはらけのしげれば。『一盃寒燈雲外夜。數盃温酎雪中春。』など御こゑ共お
かしうての給に。『なにか。けふは万歳千秋をぞいふべき』などの給ふもあり。さまざ
まおかしくみだれ給。やゝたへがたげに御けしきどもみゆるもおはすべければ。心
ぐるしうて御ろくどもとりいでさせたまふ。くらければみえねど。いみじうせさせ
給へりとぞきく侍し。さて^とのばらいてのゝまらせ給ふ。さて。關白どのうち^ま
いらせ給て。御まへに申させ給。『けふの事すべいととのほかにけしからずせさせ

の、據本補○
のみ、據本補
本補、原小本補
の、原小本補
く、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補

ことくしく見
え、原作おぼえ
據本補改

に、據本補
衣の、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補
本補、原小本補

給へり。このとしごろ世の中のいとかういみじうのみなりにて侍る。又一とせの御堂のゑの御かたぐの女房のなりどもなどぞ。世にめづらかなる事どもに侍りしかど。それは夏なればことかぎりありてすくなかりけり。なてう人のきぬか廿余きたるやうさぶらふ。さらにくいとけしからずおはします。小野宮のおとの中宮大夫のなどいとはづかしき上達部もすべてかゝる事をなんきみざりつるとぞ申されつる。それはさるものにて。みめのおどろくさうきらくかなる事は。またよにめづらかに候つるわざかな』と。返々おなじことをせさせ給程の御けはひ。けぢかうあひぎやうづきはづかしうおはします。けふの一のかみ共ことくしくみえさせ給はずなん。いま御堂にけふのこといもとはせたまはれ。此女房のきぬのかずにより御かんだう侍らんずらんと。思ひ給こそいとくるしうさぶらへ。宮々によき事候へば。うちまませ給ていとよしと覺しめしたり。かやうのれいならぬ事候へば。まづをひたてさせ給に。いとぎやうくにさぶらふや。大宮の中宮のに女房のなり。衣のかずむつ七にすぐさせ給はねばいとよしや。此おまのなむいとうたておはしますとこそはつねに候めれ』など。申をかせ給ひていてさせ給。女房達るすくみてたつこのちいとわびし。をのくのさるべきには陣に車のあてさへぎ。さらぬはつぼねくに皆いきて物もおぼえでよりふしぬ。かくてその夜もふけぬれば。又の日御

あ、原作な、據本改
く、原作う、據本改
本補、原小本補
り、原小本補
か、原小本補
本補、原小本補
給ひて、據本補
本補、原小本補
大宮、原在中宮
下、原在中宮
補、原在中宮
補、原在中宮

し、原作たる、據本改
おはす、原作あ、
據本改
仰、原作か、
改、原小本補
本補、原小本補
も、原小本補
は、原小本補
つ、原小本補
へ、原小本補

堂より「關白殿とく参らせ給へ」とあれば。回事にかとていそぎ参らせたまへれば。世間の御もの語なりけり。つかさめしけふあすになりぬれば。さやうの事どもあるべし。かくていかにぞや。きのふの宮の大饗いかありし』とひきこえさせ給べは。はべりしやうまかくかうくといちくに申させ給へば。いと心よううちゑませ給て。扱くととひ聞えさせ給て。女房のなりなどひかたらせ給ひて。ありし事どもを聞えさせ給へば。いみじうはらだせ給て。あさまさうめづらかなる事共のや。きぬはなつやつをだにやすからぬと思へば。大宮の中宮のなどはみな申えらせて。いみじきありふしにも。たの六ばかりとさだめ申たるをあやまたせ給はぬに。此みやこそことやぶりにおはしませ。すべてくにさらにうけ給はらじ』と。すぎにしことをののまらせ給も。さすがにおかしくおぼさる。さるにてもおとのはかうやはいませかるべき。おほやけの御うしろみはいかなる人のするわざ。なてうさることをみてたいにおはする人かある』など。いとおどろくさうむづからせ給。いとわりなき仰なりとぞ申させ給ふ。返々めづらかなりし日のありさまとぞ。東宮中宮の大夫殿のだちなどまいらせ給ても申させ給。かくてあさましき事は。この廿五日のよ。四條みやはやけぬ。さるはあま上のなどいのまはかの宮にこそはすませつれ。いみじきことなりや。大納言殿のおぼしたつことお

大、據爲本補本
補○土、原作公、
據諸本改
御、據爲本補
か、原作も、據久
本改

それも以下廿七
字、據爲本補本

は、原作も、據爲
本補本改

るに。いともしきわがかなとおぼして。またの日よりまづたい一をいそぎあはせ給ひてせさせ給。かくて關白どの、若君(彌)此月廿八日に大殿にわたらせ給。その夜のありさまおもひやるべし。いとわざとまことにことごとくしうもてなさせ給へり。
[大殿や上など土御門どのに待むかへ。いみじくうつくしみたてまつらせ給。ともかくもいふべきにあらす。只おもとのおさなかりし御ありにたがはずとぞうつくしませ給。關白殿(彌)今はいと心やすし。かく参らせつれば。まりさぶらはす』とてまかり出させ給。殿のせんじ御めのとの數にいれさせ給つ。まづまばし御ゆどのなどはせんじまて参らせ給ふ。いといみじうめでたし。かの母君は。そのまゝに又たゝならずわづらひてなんものし給とか。
[それも大殿よりぞとぶらはせ給ふ。めざましき迄めてた。なん。大殿土御門殿におはしませば。つねにむかへ奉らせ給ていだきうつしませ給。内のおほい殿(彌)は。母なき子共をあまたもてわつかふ。『親はひとりめすべかりけるなど。けふなげにこそ覺しの給はず』と。人語り待しか。そはさる夏にやとぞ。二月ついたちに成ぬれば。粟田殿(彌)の二位の宰相(彌)をば。此比左衛門督とぞ聞ゆめり。その姫君に三條院の中務宮(彌)むことり奉らせ給つ。御そまりなき御ながらひにぞ人きこゆめる。いともしきとは皇后宮(彌)こぞよりなやませ給て。ともすればかぎりくくとみえさせ給ぞいみじき。それにつけても。たゞ此姫宮(彌)の御事をおぼ

いみじく、據爲
本補

の、據爲本補
ぼ、原作は、據小
本改

しめすに。やすくも覺しめされぬなるべし。内のおと(彌)こそさやうに覺し聞えさせ給めれど。いとつしましうのみ覺されながら。殿もとしの春はすぐしてやなどおぼさるゝに。この宮のかく今やくとのみみゆる御有様なれば。いかでかはとぞ。三月十よ日に大宮の御八講あるべしとて。女房もいみじういそぎ世中にも御捧物いそぎのゝゑるめり。院(彌)は宮(彌)の御なやみをいみじう覺しなげかせ給。この院の女御殿もいといみじくくるしげにせさせ給つ。月日にそへてかげの様にのみならせ給へば。かたぐいかにとのみいみじうおぼしなげかせ給。入道殿よりもかくおはしませは。御修法御讀經なども障なくおぼしをきてさせ給。堀河のおと(彌)女御など引つれて。いとあどろくまき御けはひの[有さまにてのゝまり給へば。いとあしうかたはらいたうのみおぼしめす。かういふ程に。一二の宮もおよすげさせ給につけても。物のみ哀に思しめすべし。世中に天變などまきりにて。人の物いひもうたておそろしければ。さるべきやむ夏なきわたりの御つゝまみ共のまげきにもかんの殿(彌)のたいにもおはしませねば。いかにくといみじき事共をぞせさせ給ける。關白どの、若君(彌)はさもこそあらめ。御かたちさへかくめづらかにおはしませば。かしづき聞えさせ給かひありてなん。』

榮華物語卷第二十五

みねの月

かくて皇后宮(理)の御なやみもこそよりなればたのみすくなくならせ給へば。所をかへて心みさせ給ふべく人々申せば。さはとて大藏卿(理)の「御家へわたらせ給ぬ。扱おはしましたれど。猶同じことのみおはします。院(理)よりはじめ宮くもいみじき御祈はじめさせ給へど。おなじやうにのみおはしまして。かぎりくとのみみえさせ給に。宮(理)の給はするは。『今ははやう忘れてやみぬべかりつる物を。此姫宮(理)の御ありさまを見れてはえゆきやらぬ事』となげかせ給。御まへにさぶらふ人く宮々の御涙とよめがたきに。ひめ宮(理)のまいてせきあへさせ給はぬほど。あはれにいみじくみえさせ給。院(理)いとかなおぼしめしそ。世中に侍らんかぎりには誰をたれと思聞え侍べき身ならばこそ』などきこえさせ給て。御なをしの袖もしほどけけにおはしませば。宮の御まへ(理)さこそたのもしく思きこえさせ給。猶心ぐるしうなん。さばれ今はかくも思ひ聞えさせ給。つみいみじからんなど。いとよげなる御けしきに。萬いと哀にかなしう心ぼそく覺えさせ給べし。四宮(理)かくておはしませば。仁和寺僧正(理)。いとうしろめたく思聞えさせ給て。よるひるわかぬ御つかひあり。なに哀もすべてのこる事なけれど。つるに三月つごもり花と

も、據小本補○
なれ、據本元、恐衍
御、爲本元、恐衍
猶、據爲本補

今、は、う、據爲本補
を、據爲本補

は、聞え、據爲本補
し、ほ、ど、け、原、作、
いと、と、こ、ろ、せ、
據爲本改

に、原、作、と、據
小、本、改、つ、ご、も、
り、細、略、作、世、五、
日、〇、と、原、作、し、

據小本改

とも別させ給ぬ。いみじうかなしとはきこえさするもおろかなり。宮の内の有さまおもひやるべし。むげにおとなにおはします院(理)などだにいみじうおぼしめす。ましてひめみや(理)はおぼしめし入たることはりに見えさせ給。御年などもたゝいまはいとかくおはしますすべきにもあらざりつるに。あさましく口おしう心うくのみ。たれもおぼしめしはせ給。御めのとの式部のせんじ。八十ばかりにてよろづにあはれなる物に覺しめしはぐませ給ひつるに。おくれたてまつりたる程いへばおろかにいみじきに。なにごともなくたゞきえにきえいりて物もおぼえねば。むすこのゑもんの大ふむねたかきて。よろづになぐさめゆのませなどすれど。かへしつゝまどふ。ことはりにいみじくなん。月たゞはまつりなどいひてむづかしかるべければ。いかになどおぼしめして。ついたち三四日の程に。そらうら院のにし院といふ所におはしませ給。やがてその夜に。くはんといふ事せさせ給に。こと人まいりよるべきにあらざ。宮々入道のきみ(理)大藏卿などつかうまつり給。哀にめでたし。入道の君御身にたうとき事共かきあつめさせ給。これは院(理)も姫宮(理)も京は御車にてつかうまつらせ給。故院(理)の御時心よせつかうまつりし人く。又いまの院の殿上人などいとあまたつかうまつれり。いとあどろくまき御よそひ也。さて西院にぞおはしませせて。御車のとこかきおろしておはしませ給。四月十四日にお

むねたか、小本
作むねたか

京、諸本作けふ

にや、據小本補
院、據小本補

さめたてまつらせ給に。御ゆいごんにやよのつねのさまにておはしまさせ給まじ
きなめり。みな西院にぞ式部卿宮（院）などもおはします。ひめみや（院）もとまらせ給
べきにもあらねば。志のひてわたしたてまつらせ給ふ。院もやがてかくておはしま
す。さるは女御殿（院）の御なやみもいかゞとのみみえさせ給へど。いかでかはいで
させ給はん。この宮（院）もこそよりかくなやませ給つるが。かくおはしますにつけて
も。いといかにとおぼしみだれさせ給。西院にはその日になりぬれば。さるべ
き御有様ひ一日いそがせ給。西院のいぬるの方にい地つきこめて。ひわだぶきの
やいとおかしげにつくらせ給て。そこにおさめたてまつらせ給べきなりけり。めん
（院）などの一夜もこよひもあゆませ給ぞおろかならず見えさせ給。御念佛の僧など
數あらずおほかる中にも。四宮（院）の御方より。なら仁和寺などよりまいりこむ。哀
なる御けはひも遠からぬ程を。齋院（院）に御みゝとまりてとみに御とのごもらず。よ
ろづ覺しえらせ給。ろのわたりにおほくの人みちたり。さてそのやに御まつらひを
いみじくせさせ給て。やがて御くるまながらかきすへておはしまさせ給。御となぶ
らわかくかゝげて。きこめし物などまいりすへたり。萬かくと今は見たてまつらせ
給て。みやゝ院などよろづをの給はせつゝなかせ給ふさまなど。いといみじうい
ふにもをろかなり。さて人々『夜あけぬべし』など申せばいでさせ給て。おはします

と、據小本補
そこら、據小本
補のち、原作え
據小本改

日の、諸本无

やのつま戸うちかたむる程。さしのきたる人々のこゝちだにいとみぢうあはれ
にかなしきに。まいてことほりにいみじうみえさせ給。雲けぶりとならせたまはん
は。あさましなながらもいふかたなくてやませ給を。これけあはれにいはんかたなし。
女房だちなど『こたみばかりこそ御供にまいらめ』と。皆またひきこえさせてまいり
つれど。いとほるかにみやりまいらせて。のきてなん車どもひきたてたるに。おはし
ます程のととづるをとに。あるかぎりこゑをあはせていひえらぬおとなひ共なり。
月いとわかくて御どものほうしぞくそこらの人ばかりあれば、何事も思ひたら
でいそぎかへるありさま。祭のかへさなどの心ちして物さはがしくみゆ。やがてそ
の夜三條院に歸らせ給て。にしの廓わた殿などのいたじきおろして。院宮々おはし
ますべきかたゝわかちたちたれば。みないらせ給ぬ。ゆゝしげなる御しつらひの
ありさま。姫宮（院）はあるかなきかの御けしきにてあかさせ給。又の日の二日ばかり
ありありて。宮の内侍命ぶなど人のもとに。『いかなることちしてかへりけん』などと
ひたる返事に。

おもひやれむねやはあくるをとたかみたまのよどのとをとちしより。
とぞいひやりける。雲霞とならせ給もげにいみじき事なれど。これはさまかはりて
いみじきこととさまなり。ひめみや（院）は月日のすぐるまゝに。あるかなきかにおほ

本かしは、諸本作本うし

しめされてすぐさせ給に。人々女房のなかに。いかでかはをのづからほどふればおかしき事もあり。このすけとを本かしはの所より。中納言の君に。
けぶりせぬみやまおろしのかなしさに雲のはやしはたちやそひけん。
とあれば。

ありとてや人はとふらんおくりをきしたまのよどのにろひにしものを。

とぞありける。ことほりとぞありける。さて後々も宮く西院におはします。七日の御事どもさまぐいみじくさせ給。御念佛はてまであるべく。この西院の僧だちにおほせ事給はず。是はこのおはしますめぐりには参つつかうまつるべきなり。御ほうしの御経は院(註二)の御手づからかへせ給。御佛は式部卿みや(註三)それはをのづからおぼしをきてさせ給事もあるべし。帥中納言(註四)。左衛門督(註五)の御方にてみなはからひ給へり。かくて御法事又の月の十日にさせ給。中宮(註六)は七僧のほうふくうるはしくさせ給へり。三條宮にてさせ給。其ほどの御ありさま思やるべし。御願文大内記すがはらのたいさだぞつかうまつりたりける。このおはします御ありさまをつかうまつりたるが。いみじくおはれなりけり。只かたはしをまねびたり。『こがねのくるまならべよせて。玉のとぼそをとちてよりこのかた。くやうするやなにろの人。われつかのあかつきのかけするやたれのひとぞ。たはやしひ

参、原作入、據小本改

も、據小本補

は、原作け、據諸本改

り、原作る、據小本改

鳥のゆふべのこゑなど。いみじく哀なり。かくて御誦經などさまぐにてはてぬ。この御願文をある人きして讀ける。誰としらす。

月のかげはやしの鳥のこゑならてゆきかふ人のなきぞかなしき。

宮く御ぶくやつれもおはれにて。かゝる程に。山のるにけ。女御どの(註七)の御なやみ月日にそへていみじければにや。かげの様にならせ給にたり。院(註八)よろづにおぼしなげかせ給。この比きけば。あふさかのあなたにせきてらといふ所に。うし佛あらはれ給て。よろづの人まいりみたてまつる。年比この寺におほきなる御だうたて。彌勒をつくりすゑたてまつりける。くれえもいはぬ大木どもを。たは此うし一してはこびあぐる事をしけり。おはれなるうしとのみ御寺のひじり思ひいたりける程に。寺のあたりですむ人。かりてあすつかはんとしておきたりける夜の夢に。『我はかせう佛之。此寺の佛をつくり堂をたてさせんとて。年ごろするにこそあれ。たは人はいかでかつかふべき』とみたりければ。おきてかうく夢をみつるといひておがみさけぐ也けり。牛も「さやにて」黒くて。さやかにおかしげにぞありける。つながねどゆきさる事もなく。例の牛の心さまにもにざりけり。入道殿(註九)をはじめたてまつりて。世中におはしける人まいらぬなく参りこみ。よろづの物をぞたてまつりける。たはみかど(註一〇)春宮(註一一)宮くぞえおはしまさたりける。この牛ぼとけなにと

り、原作る、據小本改
て、小本元、當行
参り、據小本補
る、原作り、據小本改
み、據小本改

なく心ちなやましげにおはしければ。とくうせ給べきとて。かく人まいりこみて。此
ひじりは御みいざうをかむとていそぎけり。かゝる程に。にしの京に。いとたう
とくおこなふひぢりのゆめにみえけり。『かせう佛たうに。ねはんのだん。ちさだ
うとくけちえんせよ』とぞみえたりければ。いと人くまいりこむほどこに歌よむ

人もあり。いづみ。
きしよりうしにこゝろをかけながらまだこそえねあふさかのせき。

人々あまたきこゆれど。おなじ事なればかゝず。日ごろこの御かたかゝせて。六月二
日その御まなこ入むとまける程に。その日になりてこの御堂を此牛みめぐりき
てもとの所にかへりきて。やがて志にけり。これあはれにめてたきとなりかし。御か
たに眼いれけるおりぞはて給にける。ひぢりいみじくなきてやがてそこにうづみ
て。念佛して七日く経佛供養しけり。後にこのかきし御かたを。内にも宮にもあ
がませ給ける。かゝる事こそありけれ。まことのかせう佛このおなじ日ぞかくれ給
ける。いまは此寺の彌勒供養せられ給。この聖もいそぎけり。草をたれもくとりて
まいりける中に。まいらぬ人などありければ。それは罪ふかきにやなどぞさだめけ
る。さてかの院の女御みの御なやみいみじかりければ。ほうしやうじやいづこや
とありかせ給ひつ。御修法おこなはせ給。よろづに院みも入道殿みもせさせ給

御、據小本補
けり、原作たる、
據小本改○かせ
う以下廿五字、
諸本作迦葉如來
當入涅槃諸佛
字當得結緣十六
字○に、此下恐
ほに歌よむ、
據小本補此下諸
いづみ、此下諸
本有式部二字
の、據小本補

る、原作り、據小
本改

につゆそのあるしなかりければ。おぼしなげかせ給。この比入道殿みも御風などお
こらせ給て。さまぐなやましうおぼさるれば。すがくしくもえわたりあひみた
てまつり給はずなどあるに。かんの殿みのたゞにもおはしまさて。七八月にあたら
せ給て。月比土御門殿におはしませば。その御いのりもあつ心なくおぼされて。すこ
しもへだりあるさまにおぼさるゝかたの事をば。をのづからいまくと覺しめし
つゝ日も過もてゆくに。大みやみも此おなじ殿におはしませば。春宮みさまぐ
おぼつかなさをわけくれきこえさせ給へば。『殿の御まへをげにさぞおぼしめすら
ん。いと心ぐるしき御事也』とて。いかで此ごろの程に行啓あらんと覺していそがせ
給。六月廿五日よき日成ければ。その日とおぼしいそがせ給。いまはその日になりて
わたらせ給。大宮みはつちみかど殿の寢殿におはします。東の對にて東宮おはし
まさせ給へる。中門より西のらうのしごまにいきたるを。東宮の殿上にせさせ給
へり。東のついで地にそへて。あたらまゝ廊たちをつくりて。かんのとのみのさぶら
ひにせさせ給へり。わたらせ給へるさしき有さま思ひやるべし。大宮かんのとの、
女房いみじうさうぞきたり。春宮みまづ寢殿におはしまして。それよりやがてか
んのとの御かたにわたらせ給ぞいへばあろかなり。御供につかうまつれる殿上
人。こなたかなたみすぎはえもいはずはづかしうて。いとあせになりておもてあ

御まへ、原作こ、
據小本改

す東の對以下十
二字、據小本補

それより以下十
七字、據小本補

人。こなたかなたみすぎはえもいはずはづかしうて。いとあせになりておもてあ

の、恐衍

かむ心ち志けり。にはよりつかうまつりたり。かむの殿の「は七月にあたり給て。御はらいとふくらかにてくるしげにみえさせ給。ふたあゐの御ぞにすかせ給へる御むねのほど。御ちのあたりなど。わさどつくりたらんものめきて。おかしげにらうたげにおはします。御をびぎはげざやかにみえたるなど。さま／＼御めのとまりおかしくみたてまつらせ給を。いづかしげに覺しめしてうちとけぬ御けしきを。我さへいづかしく覺しめたり。かくておはします程。殿はよるひるまいりもてあそびたてまつらせ給。との御まへ(璣)もよその御ありさまにもくるしく覺しめされ。けぢかければまぎれわたりつゝみたてまつらせ給。よろづみ奉らせ給かひありてめでたし。かくて心のどかにまはしおはしますさまほしう大宮(璣)も殿の御まへ(璣)もおぼしめしたれど。秋の節分(璣)いととく入ぬべければとて。七月三日うちにかへらせ給。いとわかぬ御有様どもなり。かんの殿(璣)まめらせ給てながめがちにおはしますを。東宮(璣)いかにとみ奉らせ給。なか／＼おぼつかなかるべき事どもをおぼしきこえさせ給てかへらせたまふ程などぞ。いとわりなくみえさせ給ける。御をくり物。上達部殿上人の祿などをろかならず。内よりはうらやましくなどおぼつかなさをひにきこえさせ給へど。大みや(璣)かんのとの(璣)の御事をみたてまつらせ給はんとて。なをまはしさとにおはしますなるべし。かんの殿の御いのりさま／＼のこるなくせさせ

す、原作さる、據小本改

給。かくいふ程に。ことしはあかもがさといふ物いできて。上中下わかずやみの、志るに。はじめのたびやまぬ人の此たびやむなりけり。内(璣)東宮(璣)も中宮(璣)もかむのとの(璣)など。みなやませ給ふべき御年共にておはしますせ。いとおそろしういか／＼とおぼしめさる。七月八日。院(璣)より殿の御まへ(璣)に「今はかざりにならせ給にたり。いま一たびみ奉らんとむの給はず」とあれば。日ごろもけ／＼とおぼしめしながら。日つるでなどのあしかりつれば。すが／＼しうもおぼした、せ給はぬに。御つかひさへまきりなれば。ひつじの時ばかりにやまのゐにわたらせ給てみたてまつらせ給へば。たゞ影のやうにならせ給へる物から。御いろのまろくうるはしくひかりかにおはします。いとおそろしくそれもいかに／＼とみ奉らせ給。殿の御まへ(璣)は。『あさましくいま／＼でみたてまつらざりける事』とせきあへずなかせ給。あまうへ(璣)も院もいみじうあはれにかなしとみたてまつらせ給て。殿(璣)さてもいか／＼おぼさる。』と申させ給へば。『なに事をかともかくも思ひ侍らん。たゞつらしと思ひ聞えさすること。此院(璣)の御事をかゝらで侍らばやと思ひ侍りしことをせさせ給て。身のいたづらになり侍ぬる事なんある』との給はせてなかせたまへるさまなれど。なみだもいでさせたまはず。とのなく／＼『さやは思ひ侍し。今はかざりにこそおはしますめれ』とて。おぐしおろしてあまになしたてまつらせ給。右

うへ、原作さへ、據小本改

そり、諸本作そ

なり、據小本補

ほ、原作こな、據
小本改

馬入道なしたてまつらせ給。とのなくくかくは^{道長}おもひ奉りけんや。かぶろにおは
 しまし、おりけ。あまそりあたけにこそみたてまつりしか。あはれにかなしき事」と
 いひつゝけなかせ給へば。院のうちもどよみなきたり。御ぐしそがせ給へる。うるは
 しきかづらの様にて六尺ばかりなり。戒うけさせ給ひて。との、御まへ(璽)のけ
 さ。尼上(璽)の御ころもなど。たゞ御うへにとりおほひ奉らせ給ふ。たゞよろづゆめ
 の心ちのみせさせ給。東宮中宮の權大夫殿(璽)中納言殿(璽)などあはれにいみじう
 覺しまどひ。物にあたり。御物のけ共』といみじう志えたり』と。ほりかほのおとど
 (璽)女御(璽)もろごまに『いまぞむねあく』とさけびの、まり給ふ。かくて夜にいりぬ
 れば。との、御まへ(璽)『こよひも侍てみたてまつらまほしけれど。こゝにも例にも
 あらねば。みすてたてまつると』となくく歸らせ給。道よりも御つかひやがてつゝ
 き參る。夜の程も月はあかし。御とのごもられぬまゝに。たゞいまいかにくとある
 御つかひまきりにて。日比のおぼつかなさやくやしうおぼさるゝ。曉がたに『たゞい
 まなんはてさせ給ぬる』とある御せうそこをきこしめす御心のほど。思ひやりきこ
 えさすべし。山のゐにはさらけいとゆゝしき御こゑども。この殿ばらいひつゝけな
 かせ給。げにいといみじうみえさせ給。『さてもあさましかりける掘河のおとこの
 女御の御ありさまかな』と殿も院も覺しめせど。のちのくいといふことのやうにな

も、原作は、補小
本改
此、據小本補

ん。おりしも中將殿(璽)のうへ(璽)も御物のけにいみじくなやませ給へば。これを
 いとおそろしきとにとの、御まへ(璽)おぼさる。それもこのおなじ御もの、けのお
 もひのあまりなるべし。それもいとあそろしくおぼさるゝなり。山のゐにはあえな
 くやと覺しめせど。さるべき御なからひにて。とみにしもあるまじかりければ。こ
 の十一日にぞよき日なりければ。それにとかくまたてまつらせ給ふべし。あまうへ
 (璽)いとおぼしなげ、と。とかくあつき程にひごろにならせ給はんもうたてあべけ
 れば。かくとくとおぼすもいとあはれなりなどもをろかにて。其日になりぬれば。う
 ちにもとにも。たゞ此いそぎをせさせ給にも。御心まどひてはかく、まくも覺しを
 きてさせ給べくもみえさせ給はず。其日に成ぬれば。院(璽)の御車にさうぞくせさせ
 給。院かつはものをもの給はするものから。御こゑもあしませ給はず。これに故宮(璽)
 の御とはいみじき事とおぼしめさかど。それは大かたのくちあしそこそ侍けれ。
 これはさまゝ、よろづにかたとき覺しはなるべきこゝちせさせ給はず。空くもりな
 う風さへすゝしきに。京いでさせ給ほどは。いと志のびてたゞれいさまにぞおはし
 ます。殿などもきこしめさん。かくあまたの御中なれば。よづいとまがく、しうお
 ぼされんとはりなれば。たゞつねの御ありきのさまにせさせ給。御さきに火ともし
 ばかりにて。御車のまりに院おはしませば。此殿原などはあゆみつゝかせ給へ

此殿原以下廿三
字、據小本補

り。曉(暁)おしませば。大藏卿(大藏卿)入道侍従(入道侍従)など。源(源)しむ阿闍梨(阿闍梨)など。大原の入道君(大原の入道君)など。よろづそむかせ給(給)にしかど。まだいかでかへとつかうまつらせ給。御(御)さきに僧(僧)ばかりさきだて。あみだのひじりの南無阿彌陀佛(南無阿彌陀佛)とくもくさうけるかにこゑうちあげたれば。さばかりかなしき事(事)のよほし也。おはしましやらすなみだに御身(御身)どもすゝがせ給。さらぬありだにこのひじりの聲(聲)は。いみじう心(心)ぼさうおはれるなるに。まして思(思)ひやるはいみじう。かゝるありさまは人(人)ぢかにていみじきだに猶いとかなしきに。よろづいみじく志(志)のびたまへれば。人(人)ごゑもせずみそかにおほしすぐるほど。一條の程(程)にてぞよろづれいのさほうの事(事)どもを志(志)をかせ給へりければ。僧(僧)も俗(俗)も数(数)しらずまいりこみて。えもいはずいかめしくて。いはかげといふ所に(所)おはしまさせ給。そうりう院(院)の故宮(故宮)のおはしましやはるかにみやられ。悲(悲)しさとりかさねていみじう覺(覺)しめさる。院(院)の御心(御心)ちさらにおはしましやられず。『悲(悲)しなどいふ事はさはこれにこそありけれと。あさましくいみじきこともあり。』思(思)つるかな』と御袖(御袖)のまづくもところせきまで覺(覺)しめさる。宮(宮)の御(御)ともにつかうまつれる人(人)。このたびの御(御)ともにまいりて人(人)志(志)れず思(思)ひける。その夜(夜)は人(人)にもいはて。のちに人(人)にかたりける。その人とまらず。

夏の夜をわけしその夜もそてぬれきあきの草葉も露ぞこぼる。

け、原作そ、據
小本補

な、原作の、據大
本改

とぞ覺(覺)えける。はかなき雲(雲)けぶりとならせ給ぬ。殿(殿)の御(御)まへ(御)もこのごろ御心(御心)ちなやましくおぼしめされて。此御(御)をくりえさせたまはて。いみじうぞおぼしあかさせ給。此御(御)ともにもさま／＼よろづこまかにをしはかりきこえさせつ。院(院)の御(御)心(御心)はこ宮(宮)の御(御)ともにも此女御(女御)の御(御)をくりも。ひた／＼けてあゆませ給事(事)。またなきとになんおはしましける。それにつけてもやむごとなきことならましかば。みやの御(御)ともにもこの御(御)をりも。おぼつかなきをぞ思(思)やり聞(聞)えまし。そがうちにもこのたびは。心(心)ざしのかざりはみえたてまつりぬめりとの給(給)はすれば。此殿(殿)ばらもまたつかうまつる人も。『女のさいはひとはこれをこそはいはめ。一生(一生)いくばくもあらぬに。世中(世中)のめでたき事(事)には太上天皇(太上天皇)とこそは申(申)めるに。かくありたちであつかひ聞(聞)えさせ給にいとみじくかたじけなくめでたき御事(御事)なりや。たゞくちをしき事は。ひめみや(若宮)などの御(御)ありさまを見はてさせ給はず成(成)ぬる事(事)こそいみじき事(事)』など申(申)思(思)ふ程(程)に。よもはかなくわけ。ともはてぬればかへらせ給ぬ。この殿(殿)ばらも。院(院)の御(御)けしきのあろかならぬを。『まことに女の御事(御事)はかくぞかし』とぞおぼしのためはせける。あまうへ(瑞)も月(月)比(比)御心(御心)ほれて。はかなきくだ物(物)もきこしめさてきえいりくせさせ給へば。けつりひばかりをぞせんにおきて。たえずすゝめ参(参)らせける。ことしはこの女御(女御)どの、御事(御事)かれば。すまゐるとまりぬべしとぞあめる。院(院)つれづれに

え、原作は、據小
本改

おぼさるゝに。ひめ宮(璣)のうつくしうおはしますを御らんじて。とし比このふたと
 ころの御ことをあらましとにのみうちかたらひきこえさせ給へるも。萬に覺しいで
 てこひしくいみじく思聞えさせ給にも。泪のみこぼれさせ給へば。あはれなるや。い
 くばくもあるまじきよに。ほいをとげでややみなまし。いまはなに事もたが御ため
 とか思はん。たゞこのひめみや(璣)の御ことをこそはとおぼしめすに。さまぐあ
 はれにつきせずおぼしめさるゝ事を。宮(璣)は殿(璣)もゆくゝゑもはるかになべて
 ならぬ御心をきくも。只ひと所の御ゆかりにこそはありつれ。今はいかゞななど。よ
 るはつゆ御とのごもられぬまゝに。萬をおぼしつゝけておきあかしくらさせ給。こ
 ぞの夏はこ宮(璣)の御かたにつけつゝ。さるべき殿ばらけからひ給へり。又このごろ
 はことほりの御さまなれば。世の中の人けざやかにいみあへぬさまなめり。殿の御
 まへ(璣)『院を年比おほかたにこそ思聞えつれ。まめやかに覺しめしたるがいとあは
 れにも』と思聞えさせ給つゝ。みゆる御くだ物たびとによる夜なかわかず奉らせ給。
 御いみにこもりたる僧共に。『さるべきしやうじの物なにか』とつねにとはせ給。いひ
 もていけばいづもおなじ事なり。かゝる心におぼしあつかはせ給こそ。いみじかり
 ける御さいはひなりけれとおぼしなぐさめつゝぞすぐさせ給ける。ほり河の一宮
(璣)の御めのとさへうせにしが。いとあはれにおもひきこえさせ給ふに。二宮(璣)

へ、原作り、據小
本改

きるわれ、集作
ぬる秋

と、原作り、據久
 本改〇てど、原
 作つゝ、據小木
 改、原作り、據小
 本改〇いて、據
 小本補
 ち、原作り、據小
 本改〇つ、原
 作り、據小木改
 なり、據小木補

は法師になしきこえさせ給はんとおぼして。醍醐の座主(璣)は花山院の御子におは
 しませば。醍醐にぞ時ぐかよはし聞え給ける。よろづ心のどかにおぼし残させ給
 ことなげ也。この女御の御ふくたてまつりける口とて人のかたり侍し。まことやお
 ぼつかなし。
(玉璣)

わかれにし春のかたみのふぢごろもたちかさねきるわれぞかなしき。

御法事は七月十日にぞおぼしをきてさせ給ふ。あまうへ(璣)との(璣)『はたゝとも
 かくも院の御心にまかせきこえたまへり。たゞいまは内侍のかみの事。いかにく
 とおぼすらんと。まづ心なくおぼさるらむ。たゞこゝにをきてども事かくべきにあ
 らず。いまはほうふくなどのことをいそがせ給べき。きぬなどたゞいまいでき侍な
 んとす』など中いてさせ給。よろづよりもかんの殿(璣)此あかもがさ出させ給。い
 とくるしうおぼしめしたりとて。とのにはのゝまりたちて。いみじく覺しあはて
 させ給。ことしはかうたゞならぬ人。月たらずなどしてみなことゝもあやまつなれ
 ば。いかにくおはしまさんとおぼしなげかせ給もことなり。七月廿日、日の
 事なれば。例も此比はすまるにいとわりなきあつさなるに。ありしもかくやませ
 給。よにいみじきことにおぼされたり。東宮(璣)うちにはたゞけしきばかりにてお
 こたらせ給てけり。このかんのとの(璣)は。この月などにこそはさあはしますべき

に。いとくちあそろしき御事なりとなげかせ給に。御もがさいとおほくいでさせ給て。たいらかにおはしませど。日ごろくるしうおぼされて。いとたへがたげなる御けしきになりつれど。つごもりにはおこたらせ給ぬれば。よにうれしきことに覺しよるこひたり。されどまたほどもなければ。御ゆなどもなし。ときく御ものけのけしきぞおはしますを。いとくちあそろしき事におぼしめさる。院(院)は女御(女御)の御なやみのあり。ほり河のおと(河)の『かんのとの(院)の御うぶやにかならずまいりてみ奉らむ』とありしを。人志れず常におそろしう覺しいてさせ給。中納言殿(中納言殿)の北の方(北の方)も。月ごろはにだもおはせざりければ。ありあしきかさをいかにくち大納言殿(大納言殿)も覺しなげき。中納言(中納言)もいかにとおぼまつるに。月比いみじうほそりやせ。ありし人にもあらぬ御ありさまをぞいかにおそろしくて。さまくちの御いのりをまつくさせ給める。かむのとの(院)の御かさかれさせ給つれど。御ものけのけしきのいとあそろしくて。まだ御ゆもなし。かゝる程に月もたちぬ。この月にはかならずおはしますべければ。今やくちとまちはおぼしめさる。二日の夕つがたよりいとなやましう覺しめしたれば。御修法御讀經かたくの御いのりのそうところをおはせて。こゑもおしまするねうじ奉る程のゆすりあひかしがまし。との御ま(御)『まだしきにいといたうなのゝまりそ。まとのありにこそは』との給する

は、據小本補

やせ、據小本補

物から。我御心ちもいとあはたしげにおはします。まろき御ぐどもちかくとりよせ。女房だちまろき装束ども。さとなるはとりよせなどまて。よろづそのほどの御よしいとかざりなし。東宮(東宮)にもきこしめして御つかひ共ひまなし。されどその夜すぐさせ給つ。又の日までなやませ給ふ。御物のけどもかすまらずいてきてのゝまりさはぐ。をのくちかりうつして僧共あづかりくちに加持しのゝまれど。かしがましくのみありてつれなくおはします。東宮みやの大夫(大夫)だち。かざりなくおぼつかなくおぼせど。えまいらせたまはぬほどぞ心もとなくいみじうおぼされける。堀河のおと(堀河)女御(女御)さしつゝきてのゝまり給さま。いとうたておそろしうあやにくなり。世の人家の内(内)のこりたらんや。まじらひせざらん人こそは。女などはのことらめとみゆるまで。いとみみじう國々のかみなどまで参りあつまりたり。大宮(大宮)もこなたにわたらせ給て。おなじ御心に見奉らせ給ほどなど。えもいはずめてたき御なからひ也。年ごろの人々いづかたにもむつまじうおぼしめす。かざりちかくさぶらひあつかひ(あつかひ)きこえさす。春宮より御つかひ隙なし。月比はなやませ給つればおそろしうて。よろづの御調度どもとりいで。御誦經にはこびいでさせ給ほど。げにいみじからん御たから物何にすべきぞとことはりにみえさせ給。くらの命婦いづれの御まへだちの御ありも。まづ物の上(上)につかうまつるに。まいてこたみは『小式部

あつかひ、據小本補

は、原作を、據小本改○小、據小本補

う、據小木補

な、原作や、據小木改

の君わかき人なればうしろめたし。我こそは其かはりもとりかさねつかうまつら
め』と。萬いそぎつかうまつる。今やくと覺しいそぐに。心よりほかの事 かやう
のことにこそあめれ。返々も心もとなく覺しめす。院(外)には此事どもきこしめし
て。堀河のおとと女御などさしつゞき。いとあそろしきけはひにおはすらんを。返々
かたはらいたくくるしうおぼしやらせ給。此わたりにはさやうにおはしまさんこと
はり也。此御ありかれば。殿いかに我をも心づきなくおぼすらんとおぼしめすも。
たゝなるよりはむづかしう覺しめさるゝにもことゝならず。このひめ宮(孫)若み
や(孫)などを思にこそ。かくくるしけれなどおぼしめされける。はかなくすぐる月
日につけても。物のみ哀におぼしつゞけらる。萬よりも此御ことの心もとなきを。た
だいまは世中にゆすりたり。御はらへのをとなどのかしがましき。いみじうてつゆ
ことの聞えやらすなりあひてこそ。のゝちらせ給めりしかとぞ。

榮花物語卷第二十六

楚王の夢

かんのとの(孫)にいみじき御調度どもを御誦經にとのこりなくとりはらひいでさせ

いみじ、據小木補

給。世中の人残りあらむとみゆるまで。そこらひろき殿の内ひまもなし。あないみじ
とおぼす程に。さるの時ばかりにみこむまれさせ給へる。あなうれまいみじと覺し
て。又のちの御事をいかにとおぼせど。まづなにぞと内にもともゆかしうおぼす
程に。おとこみ(孫)ここにぞおはしましける。其程殿の御けしきよりはじめ。そこらの
うちの人思たるありさま。たゝわが身ひとつのよろこびに思ひたり。御かげにもか
くれたてまつるべきそのとのゝうちの人。ともかくもおぼし思はんことはりいみ
じ。これはなにの物のかすにもあらぬあやしめづのをさへ。悉みまけうれしげに
思ひたるさまいへばあろかじ。いまひとつの御ことにより。いまひとつよみのゝま
りたる程に。ほどもなくたいらかにさせ給へれば。かきふせたてまつる程いみじ
うめでたし。大宮の御まへ(孫)我御時内(孫)春宮(孫)の御ありは。なにともおぼされ
ざりしかど。世のひいきこそかやうにいみじかりしを。我はともかくもおぼえざり
しに。この御ことを御らんずるかありて。いとあはれにめてたうおぼされて。い
まはあなたに心やすくわたり侍なん』とて。寢殿にかへらせ給程などいみじうめで
たしや。この御なからひはいづかたもめづらしけれど。あまり心やすくやと人はを
しはかり聞えさせたれど。これしもぞいみじうはづかしう心にくゝをはさせ給。こ
れをためしにすべきなりけりとみえさせ給。さて東宮(孫)よりいつのほどかともゆ

な、原作や、據小木改

るまで。御はかしもて参りたる程はいみじういつしかとおぼしめしたり。申させ給へるにやとみえたり。御つかひ祿たまはりてまかづる程などのつねのことながら。そのおりはあなめでたとあたらまうみえたり。御ゆ殿やがてけふの内にことあるべければ。御文のはかせめし。つるうち^はに五位十人。六位十人などめして。むげによるになりて。ぎしきありさまこまかならねど。思ひやりてありぬべし。との、御まへはわか宮の御けぢかき程につましうおぼされて。すこし御屏風へだてある程にて。あべい事ども關白殿^{（璣）}をはじめ奉り。さるべきとのばらさだめさせ給。御はらへのよし^古ひらもり^平みち^近など。こゑもかれたりつる。みなろく給て世にめてたきけしきにて皆まかてぬ。さて御うぶやしなひは。三日夜は關白殿させ給べう。五日夜は入道の^{（璣）}七日夜は大宮^{（璣）}させ給。みな御さだめなり。關白殿かねての御よういありつる事なれど。又にはかなるさまにおぼしめされて。いそぎ山させ給て。いみじき事どもをきての給はす。まきまなどかねてすかせ給へれば。さやうの事は心のどかなり。こもちの御まへ^{（璣）}の物などは。皆あべいさまに志をかせ給て。たゞ物もるばかりのほどにあれども。なを心あはたしうて手をあかたせ給。女房のまろきさうぞくども。まろききぬひとかさねにをり物うす物などをうはぎにて。もからぎぬえもいはぬさま^くの物して。さき^くかゝる事どもはふりにしかども。いまみゆる

う、或當作し

ども、原作より、
據小本改

ありにはめづらしうあざやかにみゆる。れいの事ぞかし。かんのとの^{（璣）}はさらなりや。大宮^{（璣）}の御方の女房さへ。くもりなうまわたされたるぞいみじきみ物なりける。わかみや^{（璣）}の又の日の御ゆ殿の有様いみじうめてたきに。殿の御まへ^{（璣）}よをつましげに覺しめして。御屏風のかみよりさしのぞかせ給へれば。わかき人々うちまきをあやにくにすれば。御袖几帳のほどもおかしくみえさせ給に。こもちの御まへ^{（璣）}この御ゆどのゆかしう覺しめして。いはけなくたちいでさせ給て。みやりたてまつらせ給へば。との、御まへ^{（璣）}あなちそろし。たふれさせ給^{（璣）}など申させ給ものから。あはれにうつくしう見奉らせ給程も。げにぞとはりにめてたかりける。わか宮の御ゆどのほて。御まへにそく^くりふせたてまつりたるを。殿もろ心にみたてまつらせ給に。かんの殿^{（璣）}かくてはべるをば。いか^くおぼす^{（璣）}と聞えさせ給へば。殿^{（璣）}いとめでたしとこそみたてまつれ^{（璣）}と。きこえさせ給へば。『されどそれよなえたまふまじき心ちし侍る。いとわりなきぞ』ときこえさせ給へば。『あなゆし^{（璣）}かくなの給はせそ』と申させ給。口比あかがさよりして打つ^{（璣）}き。御もの^{（璣）}けのゆし^{（璣）}かりつれば。いみじうよはらせ給へるに。物もつゆきこしめさず。御物のけそのことちとなく。みな人たゆみたり。かつはちそろしとおぼしめしながら。いとかばかりの御すくせなれば。たれもたけう心やすくおぼされたり。日ごろ御ゆどのもなかりつれ

の、據久本補

ど、原作は、據小本改

ど、原作に、據小本改

ば。あすぞ御ゆ殿のあるべければ。あすにとくなれかし。湯あみてさはやかにならんとの給はず。御まへにもそこらの人いもねずかたみにをきつゝ。そのことゝなけれどよろづにつかうまつりあかす。關白殿（璽）にはあすの事をいみじくいそがせ給に。夜もあけぬれば。とのゝ御前よさりの御志つらひ立さはぎせさせ給。御讀經御修法の僧どもなど。こよひはすこしとをくのけさせまつらはせ給。日ごろうづもれたりし池やり水なども。昨日みなははれて心ゆくさまなり。よろづまつらひいそがせ給。若みやの御ゆどのも。けふはとくなどそゝのかしおほせらるゝに。たつの時ばかりにこもちの御まへ（璽）。いたううちあくばせ給て。いとくるしげなる御けしきおはしますを。御前にさぶらふ人々。いかにくゝとみたてまつりて。とのゝ御まへにかくなきこえさすれば。僧などものけたれば。御ものゝけのするなめりとて。御どきやう。又さるべき僧どもみなまかりて。もろ心にいとどろくしく。れいの物のけさまくゝの人々めしいて。あるはそばよりさけびのゝしり出て。そうだちみなあたりゝゝに加持すれば。れいのゆすりあひたるさまもどよみにたり。いたう口比よはらせたまへるに。御物のけのとりつきたてまつりにければ。すべて御けしきことのほかにて。物もはかくゝまくの給はず。ほりかけのおと（璽）女御（璽）などの御靈すべてゆゝしき事どもをぞいひつゝけのゝまり給。御帳のとに。御まくらのそば

も、原作リ、據小本改

なく、久本元、恐衍

こそ、據小木補

のかたにて。心舉僧都權僧正など加持まいらせ給ふ。御讀經にもこゑよき僧どものかぎりは。御まへちかくさぶらひてこゑもおしませ。又いづれのとにかとことほりにいみじ。御調度どものこるなう御誦經どもにはこび出させ給て。さらにいとたへがたげなる御けしきにて。ひつじの時ばかりになりぬ。あめさへいとうたてければ。萬なりあひたり。世中にはかぎりにゆゝしうさへ申なれば。宮々（璽）の御つかひまきりて。春宮（璽）よりはたひまもなければ。御かへりはかくゝしくきこえさせ給はず。殿の御前御丁の内ちごをするやうにつとそひふし給て。なくゝかゝへたてまつらせ給へり。大方たれもゝ物おぼゆる人なし。かよはせ給御こゑもやがてうせもてゆくやうなり。あないみじ心うきわざかなとおぼしながら。よろづをつくさせ給ふ程に。とりの時ばかりに。すべてたゝかのこゑばかりよはらせ給に。そこらみちたるそう俗上下。あるもあらぬも「なく」願をたてぬかをつきのゝある。えもいはぬものまでなみだをながして觀音と申さぬなく。たゝひたいにてをわてゝたちの禮拜たてまつらぬなし。いまはかぢの聲も聞えず。御讀經のこゑもきこえず。觀音とのみ申のゝある。ひとりが一聲を申だにかゝはあるしおはすなるに。ましてそこらの人のあなじ心に一心にねんじたてまつるほどは。さりとともとこそはみえさせ給へ。されどすべてかぎりになりはてさせ給ぬ。御年十九。あないみじあさまし

ぞ、原作し、據
小本改

に、據小本補○
が、原作は、今從
小本
房、諸本此下有
とも二字

も、據小本補

とおぼしめす。との御前はやがてさしのびてあさましくてふさせ給ぬ。かすへの
すけりみち。おはしますまいのうへに。御ぞをもてのぼりてよろづを中つかけま
ぬぎたてまつる。すべて限りにおはしませば。大方殿ばら『たゆむな』と。僧達を
もたのもしういひおこなはせ給へば。僧もおなじ人なれば。なくくいみじかなし
とおもふ。観音くの中ながらも。又いとなきけなう佛をもうらみ申て。むげに心ち
もたゆみたり。うへの御まへ(禪)はたこもちの御身(禪)にひとつにまろがれて
ふさせ給へり。女房・どよみなきたる聲せいすべきかたもなく。いみじくゆしと
け。是をだにいはではなにをとかはとみえたり。關白殿(内)の大殿(殿)なくく
参りよりて。よろづにかへて御ゆ参らせ給へば。かへしてきこしめさず。あさまし
き御事をばをきながら。かうおはしますことをまたさはがせ給。關白どのうぶや
しなひのものどもは。さるのときばかりもてこみて。さまく、たちさまよへど。か
ればいかにといふ人もなし。又ことのよしをだに申さぬほど。さてこれをいかに
せむくともてさぶらふ。とのうちたしきはことほりなり。物の哀をもしるま
じきものどもなみだをのどはぬなし。かくいふ程に。いぬの時ばかりになりぬれば。
殿もいきいでさせ給て。大方たゞいまは御なみだも出やらず。あるに『あらずおは
します。世のはかなさは是につけてもあはれにいみじ。あといひちとこみこまれ給

う、原作し、據小
本改
ぐは、據小本補
○なき、據小本
補

て。世のしきりめてたう。内まできこしめしてうらやましげにおぼしめされたり。け
ふかく思ひがけぬ夢を御らんとてさはぐは。こころうきわざかな。なに事もつね
[き]よはれいの事ながら。なをこの御ことはすべてあさましう。いかなる物かくた
てまつりつらんと。よろづに佛神もつらくなさけなうおぼえ給。秋の夜といへど。人
のとかくねぶることありけれ。やがてかくてあけぬ。まばし御まくらもなにも同じ
さまにおはしませつれど。よもへだてぬればいとあさましう。おぼえめしながら。
御几帳御屏風などさまことにてたてさせ給などして。との御まへにも御となぶら
とりよせて。ちかうかへげてみたてまつらせたまへば。いさゝかなき人ともおぼえ
させ給はず。まろき御ぞのうすらかなるひとかさねたてまつりて。また御おひもせ
させ給へり。御ちはいとうつくしげにおはします。いたうこはるまではらせ給へ
れば。まろうまろにおかしげにてふさせ給へるに。御ぐしのいとこちたうおほかる
を。いとゆるにひきゆはせ給て。御枕がみに打をかれたる程。いとちどろく。まろね
させ給へるやうなるを。との御まへ(禪)。うへの御まへ(禪)いまぞなかせ給。『わか
宮あながちに若ういはけなくてあさなき御身の。いつちとてふりはなれては。我ら
をすてしおはしぬるぞや。いみじき鬼がみなれど。人のゆるさぬをばるていかさん
なるものを。かへし給へ』となきまろばせ給に。御めのとこ式部のきみは。『こゝをば

若きは、據久本
補○奉り、據小
本補

て、據久本補

ど、據小木補

ぬ、據小木補

こ、據小木補

寢殿、此上恐有
誤脱

すてさせ給つるか。御ともにまいらんく』となきのゝある。としごつつかうまつり
つる女房の若きはわかきにつけて。こひかなしみ奉り申。ねびたるはそなたにつけ
ていひつゝけなきたることども。げにぐと聞えて。すべてたへがたく思てまどふ
人おほかりき。わけぬればよしひらめしにつかはしたればまいりたり。さるべき事
ども關白殿なくくとはせ給。殿の御まへおほかた物も覚えさせ給はねば。すぢな
く覚えさせ給。よしひらも涙にむせび何事もすがくしうも申さで。かくてためら
ひて申。『けふこそは先おさめたてまつらせ給べき日にさぶらふめれ。さてもか
くておはしますべきにあらねば。いづかたにかゝるて奉るべき』とへはせ給へば。『法
興院はよきかたに候めり。こよひほこ院におはしますべう申す。御さうそうは此月
十五日とさだめ申て。岩かげにせさせ給べき』など。こまかなる事ども申つるも。哀
れにかななき御事どもにも。わんごあへずうへの衣の袖もまぼるばかりなり。との
の御まへ(璣)にこの事どもくはしく申させ給へば。『さはよさりま(る)れ』とおほせ給
てまかづるほど。おとへひ御はらへの志るしあり。おとこ(み)こたいらかにむまれ給
へる。これにまさるとはなに事かけとて。祿給てまかてしよしひらともおほえず。た
だ一二日のほどにさはかくこそありけれと。なくくまかてぬ。日さしあがる程に。
よさりの事ども申させ給。わか宮はすなはちより。寢殿にとをるわたどのにおはし

こ、原作は、據小
本改

まさせて。くらの命婦どのの宣旨などそひたてまつりて。あはのせんじよりまげが
女のいまの大貳(璣)のむすめなる。それかねておほせごとありしかば則まいりにし。
御めのとにてさぶらふ。とまれかうまれ大宮(璣)こそはとりあつかひ聞え給べけれ
ど。ひついでなどえりとなりけり。よさりは殿(璣)の御車に御さうぞくせさせ給。
れいの人の御ありきにとたみはあるべけれど。又いとことのほかなり。殿はたいふ
しまろびなかせ給より外の事なし。ことほりながらいみじかりける御思ひかなと
みえさせ給。くれにけやがておさめたてまつりてこそは。御車におはしますべけれ。
うへの御まへ(璣)は御丁の内いらせ給て。なくくみたてまつらせ給。かくてうせ
させ給へれば。むづかしうおぼしめさるらんとて。小式部のめのとよみづにおりた
ちて。御ゆどのせさせたてまつる。こたみばかりの御宮仕と思つ。いひつゝいけなく
聲ぞいみじきや。うへの御前(璣)の御身をさぐらせ給に。いとひやくかにおはしま
す。これこそは例の人にかはらせ給へる事はありけれと。殿(璣)もうへ(璣)も『我をす
てはいづらぐ』となきまらばせ給事限りなし。御ぞなどきかへさせ奉らせ給へ
り。よろづいたしたて奉らせ給ほどぞげにいみじきや。日暮ぬれば。いそぎたちてい
らせ給ふべきぞしき。もてまいりたるも又どよみたり。さるべき人ぐとて入たて
まつる。殿もうへもめもくれてえみ奉らせ給はず。『いてあなあさましゆし』との

は、小本元、恐衍
か、據小本補○
こそ、原作より、
據小本改
ま、原作う、據小
本改

み同じ事をぞくり返しはれける。扱ひつぎに入たてまつりて。ふたかためなどし
たてまつる程は思ひやるべし。ほこ院にうへの御まへ(瑞)もと覺しめせど。それ「は」
はたびんな[か]るべし。御さうそうまでこそとのもかしこにおはしますすべけれ。御だ
うに歸らせ給べければとて。うへの御まへは我御堂にぞわたらせ給ふ。程も遠から
ねど。さて『火ともし時になりぬ』と申せど。いかでかすがくしからん。かくならせ
給事は萬壽二年八月三日御産ありて。五日うせさせ給て。六日夕に法興院にわたら
せ給也ける。御車かきあろしておはします。たいの南の東の方よりいでさせ給べき
なりけり。さて御くるまにかきのせたてまつる程。大方殿の御まへ(瑞)も物おぼえさ
せ給はてふしまろばせ給。關白殿(瑞)内の大い殿(瑞)などは。御わらうづといふ物は
かせ給ながらこそたちおどりなかせ給。まいる女房もとまる女房も。大かたとの
内の人もろごえにのしりたるは。いとゆしうかなし。御車は四位五位つかうま
つれる。との御まへ御車のしりにあゆませ給。いとわはれにかたじけなくみえさ
せ給。うへの御前(瑞)は『あないみじや。こらの中をひきはなれておはして。いかな
る物のさますがたをみたまはん』となきこがれさせ給。ほこ院と此殿と遠からねど。
殿の御まへおはしましやらずまどはせ給へば。かたつ方の御ては關白殿とらへたて
まつらせ給。かたつかたは三井寺の僧都(瑞)かへたてまつらせ給て。御こしをば内

はせ、據小本補
ど、原作に、據小
本改

の大い殿をじたてまつらせ給。さるべきむつまじき殿ばら。殿おはしませば。みなつ
かうまつり給へり。いみじき事は。山座主(瑞)のつえにかしりてえわゆみやらて。な
くくつかうまつり給へる程も。よろづおろかならずみえたり。道すがらわはれに
いみじくておはしましぬ。ほこ院のきたにべたう坊といふやに。御車ながらかきあ
ろしておはしませ給。その傍なるやにぞ殿はおはします。口ごろ御几帳御屏風の
へだりだになく。よろづにあつかひきこえさせ給つれど。かぎりあるわざ也けれ
ば。ことくにおはします程いみじく哀にかなし。女房おはしますやうにさぶらひ
て。萬御だいなどれのさほうにまいりすへたり。殿の御前(瑞)御とのごもらぬま
に。うちおはしましつる御くるまのまへ板といふ物にをしかりて。なに事にかあ
らんうちなきて。なくくの給はせつゝあかせ給。其後あかづきには懺法。よさ
りには御念佛と。さるべき僧どもぐしつゝ御車をまはらせ給。おもものなどきこしめ
す御まかなひは。御めいと式部の君なくくつかうまつる。あはれにかなしきこ
とおほかり。萬よりもとの御まへ(瑞)のつゆ御だいのもきこしめさずよはらせ給ふ
を。いとおそろしきことに。かつはとのばらもみやくもなげかせ給。うへ(瑞)も我
御だうにわたらせ給て。なに事をかは。たなみだにしづみてすぐさせ給けり。春宮
中宮の大夫(瑞)だちまいり給へれど。えのぼり給はず。との御ありさまをたれも

うろし、恐當作
うしろ

うろしめたくなげかせ給。山のの女御殿(嬪)は。さても月をろさばかりなやませ
給て。かぎりなくとみえさせ給つれば。ことほりにおはしますに。この御事ぞいとゆ
ゆしうおぼしもかけざりつることなるや。おもしろきさくらさきと一のほりたる
が。にはかに風へのこりなくちりぬるにぞいとよくにさせ給へる。世中にかゝるこ
とはなきにしもあらず。それは殿(嬪)の御いもうと(和)と院(嬪)の女御と申ける。正月
のかうしむに鳥なくまでおはしまして。あかづきに御けうそくにをしからせ給
て。やがてうせさせ給にけり。それはにはかにいみじきかたこそありけれ。人の心を
つくしまどはしたる方はなかりけり。これは月比いみじうかすかぎりなき御い
りいみじかりつるに。おそろしかりつる御なやみもおこたらせ給て。めでたきおと
こみこむまれ給へるほどなどは。かくあさましかるべしとはたれかはおぼしかけつ
る。なをくいとふがひなくいみじきや。若みやのいとうつくしくものきらくか
におほきやかにおはしますにつけても。大宮(嬪)はあさましう哀にかなしきかたみ
おろかならずおぼしめさる。東宮(嬪)にはおぼしなげくともよの常也。其まゝのお
ぼつかなさをだに。さはれかくおはしますべかりけるに。いとけぢかかりし御對面
の日比の程なども。昨日けふの程とおぼしいでられて。御なみだもとまらせ給は
ず。京極殿にて。いづれの日ぞや。ふたあるの御ぞにくれなるの御はかま奉りたり

におそろしかり
つる、據小本補

き、據小本補

また、原作かの、
據小本改

し。御むねのわたり御ちのほどのさま。つくりたてまつりたらんやうにうつくしか
りしに。御ちのさきはうちあかみたるに。御をひのほどいとけさやかなりしなど。よ
ろづにこひまくなたいかてかはゆめにさへさだかにみえ給は。なぐさむやうもあ
りなむかしと。こゝろうく覺しめし入たり。大宮(嬪)いとおそろしく覺しめまて。御
修法など御いのりどもことをきての給はず。まいりぞめさせ給へりしありなどは。
我がとしもわかう物けづかしうおぼしめされしを。この年比はよろづうちとけ。心
おかしうあらまほしかりつる御なからひを。候つる女房までこひ聞えさせぬなし。
かんの殿(嬪)の女房は。やがて若宮の御方にと大宮(嬪)よりおほせ事給はず。それに
つけても夢の心ちすべし。ちご共はゆやせなどいふ物して日比はやする物ぞかし。
若宮はやがてこえにこえさせ給へる。あはれに物おぼしまる程なりせば。かゝらま
しやはとみえさせ給。との御まへ(嬪)は。世中を深くうきものに覺しめして。『い
まは里すみさらにくふかう山にすまん』との給せて。まことの道心をこさせ給へ
り。御めのとの男播磨守やすみち。はかなき魚くだ物。なにものもみゆるをば。
よるよなかわかず先くとはこび参らせし事のためたれば。あはれにかなしくい
ひつゞけ戀たてまつる。殿の御まへ(嬪)のことしはつゝしませ給べき御としなれ
ば。御命のびさせ給ふべきなめり。いとかゝるとをとおぼしめすはと。世の人申おも

の、は、據小本補

し、據小本補

げに、據小本補

へり。世のかためにておはしませば。いつれの民もたゞとの御命ごひをのみ申おもへり。民部卿(璽)などまいり給て。『なをすこしおぼしなぐさまさせ給へ。この御事のみ世にはじめたる事ならず』ときこえなぐさま給へば。『さこそは思給ふれ。かたへのえさらぬ人々もおほくおはし侍れば。いのちはあしくこそ侍れど。たゞせひなうこひしきにわび侍ぞや』との給するには。げにたれもく忍びあへ給はず又なき給ぬ。かくてうせ給ぬる人は。いとむづかしうおぼさるなる物をとて。山く寺くの僧にゆあむさせ給程も。いとあどろくま。との御前(璽)おぼしめしわびては。かの世には我よりほかのちやゝあらんさてだにおもふ人をきかばや。小式部のめのと。

こゝろだにこの世にかなふものならばますらんさまもゆきてみてまし。

これのみならず又くもあるべし。哥は心をのぶといひてこそ。あかしきにも。めでたきにも。おはれなるにも。さまくの人のまづ讀給物なめればなるべし。かくて十五日になりぬれば。その又曉に檢非違使どもめして。京極よりのほらせ給て。一條よりにしさまにおはしますべく道つくりはらせすべきよし仰事の給はせて。岩かけにはよろづはこびつかうまつるべきよしのおほせ事のためはすとても。御涙をのこひわへさせ給はず。おほられなかせたまへば。おほせごとうけ給はる人々の心のう

ばなるべし以下十七字、據小本補

心の、據小本補

く、小本元、悉〇リ原作、據同上改、る、原作リ、據同上改

に、據同上補〇の、同上元、當行

ちどもし。えまのひあへぬさまくなり。との御心もこたびばかりのとにこそあれ。今はいみじう思ふともなに事をかはつかうまつらんずるとおぼしめして萬をつくさせ給。日のくるさまに。法興院の内のまりさはぎたるありさま哀にかなし。御まいりや御産屋などたびくのまりし。御いそぎのさまにひきたがへかなまきことかぎりなし。このとのばらばさら聞えさせずや。さるべき上達部みなまいりこみ給て。さすがに元座にはつき給はぬ物から。さるべき所にたちさまよひ。くれざいもくのうへなどにおはしなればせ給へり。雨ふりて日ごるむづかしげなりつるに。よるより雨こまやかにふりていて。其人々まほどけたらんはさるものにて。殿をはじめたてまつりて。いかでかあゆませ給はんずらんと。世中のみのかさなど敷をつくしきはぐに。さるの時ばかりに。あめ「の」やみ空はれて風うち吹。道などまたかかけきにかはぐにいとめてたし。これにつけてもとの御ありきは。むかしもいまもなをいとふりがたきとに申思へり。秋の日はかなくくれぬれば。みちのほどもいとほるかなり。まだえすがくまうおはしましやらじとて。よしひら時はとりの時をよき時とてそのかし申せば。せうくの事だにいかはある。ましてさばかりよそをしき御ありさま。いとところせげなり。さるべき四位五位六位などの御ともにつかうまつる。さすがにひのしやうぞくをまつるものから。う

り、原作る、據小
本改

へにうたてげなる物をきたり。御車につきたる人々。御さきに火ともしたる人など。すべて二三十人の程の人のさうぞくはみなおなじさまにまたり。との、御ま(璣)もあはれにかなしう奉りたり。御ともの女房車おほくもあらず。ふたつぞつかうまつりたる。それもからぎぬうるはしうきたるがうへに。また藤の衣をきて。それらみだにまほるばかりなり。御念佛の僧ども山がた。ならがた。さるべき所々數えらざむれまいりこむ。月もくもりなくめでたし。なにごともしみじうまとのへさせ給へり。世中の人は。一條のおほちよりかく道はらひおはしますほどなども。世中の人などいみじきみ物に思ひたり。關白殿(顯)は御いみの日にあたらせ給へればとまらせ給ぬ。内の大い殿(顯)ぞおはします。それも猶いまくしきことぞかし。されどとの、御まへのおはしますすがうしろめたさにつかうまつり給なるべし。あはれにかなしともをろか也。おはしますほどの有さまいへばをろかにかめし。西は大宮よりさしすぎ。東は京極をきはについきたちたるを。又おはしましたつる法興院までぞ名残はついきたる程ををしはかるべし。又世中を昔みたる女おきな。『まだかゝるまうなる夏みず』などぞ泣々申思へる。年比いみじき天變とての、しりつるは。げにむなしくやけありける。春は皇后宮(璣)うせさせ給ぬ。たちぬる月には院(璣)の女御(璣)うせさせ給。又かくおはしまして。かく一、天下のゆすりたる。これこそは天

は、據小木補

ぞ、據小木補

え、據小木補

けぶり、據小木補

變なりけれ。いまはなに事のあるべきぞとみえたり。おはしましたつきぬれば。とのにとしをろつか(け)せ給て。むつまじう覺しめさるまゝに。いまの信濃守やすより。大炊のかみためもと。びんごの前司きんのりなど。すべてたかやうの人をぞ萬にさしあづけさせ給へれば。げに火水に入てつかうまつれど。さすがにしもまらざりける事にて。夜ふけ鳥もなきぬ。あさましう月のあかくめでたきに。そこらの人々まゝいりこみたるに。との、(璣)御こそ哀にかなしきに(ぞ)そこらの人もえ思ひあへざりける。煙にてあがらせ給にも。やがてなびきていつれの空とも御らんじわくべくもあらぬにも。御むねふたがりてさだかにも御らんせられず。かゝる程に。船岡の南の方に火こそほのめきて。たゞならずあはれなる事ぞみゆる。人々みやりて『あはれかれみよや。はや又かくもありけるは』など。みやりさけぐに。ある物の申すは。かんの殿(璣)に小左衛門とていみじうらうたきものにとりわきおぼしたりしが。日比かれもわづらひて(え)參らざりしに。此うせさせ給日ぞまいりてみたてまつりてまかてにけるまゝに。同じ日やがてうせにけるが。おりしもこそあれ。こよひもこのわたりちかうする也けり。人々哀なりけるよしをいひおもへるに。女房車もたしかにとひきして。いみじうあはれにみやる。たかきみじかきこよなき御ありさまにこそ同じういふべからねど。ことのさま(け)けぶりにてのぼる程はみえわかぬわざにな

も、原作と、據小
本改

んありける。殿ばらなどのあはれがりの給するを。殿の御まへ(璣)にほのきこしめし
て。あはれとふべかりけることにこそ有けれ。物などをやるべかりけるものを。人よ
りもあはれとおぼしたりまかば。おなじ所にやまいらんとおぼしめすも。かなまう
てなくく御覽じけれ。火のいとほのかにて人などもおほくもみえず。ありさま
のあはれに心すぢげなる。かへすくもあはれがらせ給て。法事にだにかならず物
つかはさんとおぼしめしける。女房車返々あはれにみやる。こよひの月はめてたき
物といひをきたれど。まことにあかきはいとありがたうのみありけるに。こよひの
月ぞ誠にかぐや姫の空にのぼりけんその夜の月かくやとみえたる。風さへすしく
吹たるに。ときく此あたりちかうあか雲のたちいつるは。我君の御有様とみゆる
に。せんかたなくかなしかりける。うへの御まへ(璣)は御かうしををろさて。やがて
はしにおはしまして。『かの岩蔭はいづかたぞ』など人にとはせ給て。そなたさまに
ながめさせ給に。あかき雲のみゆれば先それならんかしと。御ぞの袖のみならず御
身さへ流れさせ給。東宮(璣)はこよひときこしめしたる事なれば。露まどろませ給
はず。かのむかしの楚王の夢をおぼしあはせられて。あさましくおぼしまどはせ
給。かやうにてやとぞ人申いはせける。
(新千載)
ほどもなく雲となりぬるきみなればむかしのゆめの心ちこそすれ。

の、據小木補

ぞ、據小木補

返々といへど。なをおぼしかけさせ給はざりつる御ありさまのみ心うくて。夜もあ
けぬれば。殿の御前にはこばた木と覺しめせど。『さまではいかでか』など人々聞え
さすれば。こばたへは別當僧都播磨守やすみちすべてさるべき人々ぞまいりける。
殿(璣)は御堂におはしまして。やがて上(璣)の御方におはします。『日比はさても此
御あつかひにてすぎつれば。なぐさむやうもありつるに。いまはかくぞかし』と覺
しめすに。むげにおぼしほれさせ給へれば。山の座主(璣)まいり給て『いみじく覺し
めしたる事なれば。きこえさするにつけても心ちさなきやうに侍れど。なをいかに
おぼしめしとらせ給へるぞ。いまとさまかうさまに覺してこそなぐさめさせ給は
め。このよに御さいはひも御心をきても。との御やうにおぼしめしをきつること
にことたがはせ給はず。あひかなはせ給人はおはしましたむや。此卅年のほどけさ
らにおぼさむすぼゆる事なくしてすぐさせ給つるに。いかでかゝる事まじらせ給け
ざらん。この娑婆世界は苦樂ともなる所とはまらせ給つらんものを。佛だに凡夫に
おはせし時。たへがたき事をたへ。まのびがたき事をよくまのび給てこそ。佛にもな
り給。衆生をも渡し給へ。いまはこの御娘ひとところ(璣)をこそ。かつはいみじかり
ける我まうじやかな。こゝらのとし月の念佛やいたづらに成ぬらんと心うくおぼし
めし。又をしかへしては是はいみじかりける善知識かな。たのしみありてくるまみは

と、原作に、據小
本改
へ、原作だ、據小
本改

又、據小本補

が、原作よ、據小本改
とく、久本元、當衍

あとのみしりたりつるを。かなしみもくるしみもともに忘れせつる。萬にかた／＼
におぼしえて。ま心に念佛せさせ給は。我御ための善知識ともなり。まうじやの御
ため菩提のたより共ならめ。年比ごむぢやとこそみ奉り侍れと。あさましうはかな
うおはしましけり』と。世間の理を申つくま給へは。『いかゞはさおもひとり侍る
や。されどそれがたいこひしきなり』との給はするまゝに。御めよりすいしやうを
つらぬきたるやうにつゞきたる御涙いみじうて。山の座主(釋)もなき給ぬ。御念佛の
ありとに。殿の御まへたびごと申させ給に。御涙やがてつゞきたちたり。『いと加
たじけなう。猶よろしき程にけうじ聞えさせ給へかし』とのみ申人々多かり。若宮
(親)の御めのとよりまげがめは。わづらひてまかてにけり。其後讃岐の守なりつね
がむすめの。宰相中將(親)の子うみたる。又大宮(親)の御かたの紫式部がむすめの越
後弁。左衛門督(親)の御子うみたる。それぞつかうまつりける。大宮(親)の御方にはな
を此ほどすぐさせ給べき也けり。あはれにうつくしうみえさせ給へれば。つといた
きあつかひ聞えさせ給。御だうの御念佛よひ曉もいみじうあはれなり。かの小左衛
門がりは。のちに物などつかはしたれば。左衛門内侍いとあはれにおもひけり。七日
は御・經佛供養せさせ給。さるべき御ぐとくどもたびごとに御誦經せさせ給ひけ
り。院(親)の女御(親)の御法事いとちかう成ぬれば。その事どもいそがせ給。院はい

に、小本元、當衍
○さ、原作ま、據
小本改
と、原作ま、據
小本改○させ、據
小本補

が、原作よ、據小本改

み、原作え、據小本改
で、據小本補

まは殿にもかくも申べきにあらず。なに事もたいこまかにせさせ給。ほうふくど
もなど日比いろがせ給てければ。みないできになり。そうせんなどもほかにむづか
しういふべきにあらず。よろづに「さしあひたるころ。ことまげきにいとむづかし
とて。たいまたしきものどもにせさせむなど。殿ばらにも聞えさせさだめさせ給け
る。式部卿宮(親)。中務宮(親)など。さるべき事ははぬ事などうらみ給めり。『それにも
聞えてん』などの給はすれば。殿原げにさる事にてさぶらふ』とて。皆各々さるべ
き事共つかうまつり給。此ついでに院(親)の給はす。『この御ことをそのありはかた
ときあんべうも覺えざりしかど。をのづからほどふれば。かくて物をもいひ。なにか
とおぼゆるわざにこそありけれと。われながらもころうしや。さてもあさましう
おくれたてまつりぬること。ひた道にかなしうおぼえしを。このごろの定にては
思ひやらば。誰かはのがるべき。さればいかにもくかくてあるありにおくれたて
まつる。中／＼いとよし。さきだち奉る世もあらましかば。いかに口おしう哀にうし
ろめたう覺え給はまし。殿の御心ざしの程もかばかり也けりとみれば。たいいかに
もく心ざ志のかぎりつかうまつりぬべかんめるなんうれしき。たいこのあさなき
人々の御ありさまどものみこそいみぢうころぐるしけれ。ことくをみんなどあ
もはこそあらめ。此御ためにおろかなる事もをのづからいてきなん。いまはたい

ほど、小木元、當行

たゞ、據小木補

など、據小木補

わたり、原作度、據小木改

う、原作く、今從小本

かくてあらんとおもへば。たえん「ほど」かぎりはぐみ奉りてなむ。このおさなき人々(群)の御とによりてこそ。ないしのかみの御事もいみじうおぼゆれ」などの給はせても。たゞ心よはげなる御けしきなり。又あはれ春宮(櫻)におぼすらん事いかにとおもひやりきこえさせ給。殿ばらもうちなかせ給て。「それさる事にさぶらぶ。世中さだめなければおくれ奉らせ給やうも候なまし。いとをしうさぶらひなまし。女の御さいはひはたゞかしくらんぞほいに侍べき。その夜の御有さまなど。世のためしにかたじけなふ侍きかし。殿もき、給ていみじうこそ申給しか」など聞え給へば。院「春宮(櫻)には一品宮(瑞)なむ参り給べかんなるなど。世にはつかさめしすなるを。いでそれさるありぬべき御事なれど。たゞいまいつかとさ一人のいひさだむるもけしからぬ事也。此わたりにもみなさまくいふなり。それにて知ぬ。まいてともかくも人の申す」などの給はすれば。殿原「いと物ぐるをしきとにこそはべれ。よろづたれく」とありとも。殿(瑞)の御心よりほかにあべい事にも侍らぬに。ただいまは萬おぼされず。ひたみちになしさをおぼしたるに。かくよに人の物いひをしかりごとの。いととのほかに心づきなうさぶらふなり」と申給へば。「さても一品宮(瑞)は見にてほのみ奉りにしが。いみじううつくしうみえさせ給しを。ましていかにいならせ給つらん。さても見奉り給や」との給はすれば。「御心とみえ

こそ、據小木補

させ給事はさらにさぶらはず。ふいにほのみたてまつるありも侍り。いとうつくしうこそおはしませ。御ぐしのかくりさまやうだい御こえけはひなどしも。よになべてにみえ聞え侍らず。あいぎやうづきあてにおかしう、つくしき御有様にこそ。御かほなどはえみ奉らねど」と申給へば。「さおはすらん。ちごながらいみじうみまほしかりし御有さまぞや。さても御たけいくらばかり」との給へば。「四尺の御几帳にいますこしをよばせ給はぬとぞみえさせ給」と申させ給へば。「おはれに故院(三)のいみじうし奉らせたまはんと覺したりし物を。おはしまさましかばさりともしよなからまし。さやうにまいり給ておもふさまにおはせば。いかにうれしからん。あさましうるんの御なごりなきいとをしきに。人のすることにもあらず。我心とかくてあるとは思ながら。いと物ぐるおしき事ぞかし」との給はすれば。「たゞいまいと萬にまだおさなくおはしますめり。げにこそ院(三)のおはしまさねば。心うくくちあしう。されど殿(瑞)いかで猶此御事をしたんと深くおぼしたり。たれも世のとまり侍なばともかくも侍なむ」と申給へば。又「内(小)の大との(通)の御くしげどの(三)なん東宮(櫻)にはといふなめる。それもさるべきとにさぶらふぞかし。あといはいかでとおもひ給らん。さりととも御心にこそ候らめ」と申たまへば。「どのはいづれともおぼしすつべき事かは。げにさるべき事に侍れど。ことについて事には。いまはた

の、據小木補
る、原作り、は、
原作を、並據小
本改

と、恐衍

宮、小本元

そ、原作さ、據小本改、小本元、當衍

は、據小本補

は、據小本補

だひめみやの御事をのみなん思とこそ侍めれ。東宮とかたまりてみなおはしましつればこそいかいとみたてまつれ。いまはりあたりたる事にてこそは』ときこえ給へば小二條『さらになに事にもつかうまつらんとおもふに。いまくしきとのみある。』と口おしきや』との給はすれば。『たゞいまの事のやうにもおほせらるゝかな』とうちほゝゑみ給ふ。とのばら』うちのおと一（二）は。此東宮のたいの宮をなんさやうにとこそは則より世には申めれ。それはいかくおほしきだめさせたまふ』と申給へど。小條『かれはこ宮のちはしまし、あり。さやうにはかのおと一も申さるゝ』とき。又みやもさるやとおぼしめしたりしに。あさましう月ごるなやみ給しかば。なにごともおぼしたゝずなりにしにやとなんみえし』とのたまへば。『それはさていかんはおぼす』ときこえ給へば。『こゝに思ふやうは。さてものせさせたまはんもあえなむ。女はいみじうおぼせど。たかきもみじかきも。あやしうのみこそは』人は申思ひたんめれ。又たゞにては齋院などにこそはる給はめ。それめてたき事なれど。つみふかしといふことをいとうきことにおぼしたりしかば。こゝろぐるしうこそはあらめ。くぬしまよりはじめ。さるべきところくおほくもたせ給へるみやなり。それをよき御うしろみなどあらば。いとめやすくこそは』あらめ。かのおと一はいみじうたはまうて。こきたのかたうせしほどにも。びんなきこと一もきこえしや』などの給すれば。

る、據小本補

殿、久本元、當衍

こそ、原作より、據小本改

『げにさる事ども侍』などきこえたまへば。院も又小一あるせちには御むすめのきみをなん。かのおと一にもとのたまふときこゆるは』との給はすれば。『東宮大夫二（三）こそさやうに申なれど。かのおと一もさしてさやうにものせらるゝ事もはべらず。又このむすめもまだいとあさなうはべれば。なにごとと思給へかけずなむ。そのうちにはのよと一もにあつしう侍めれば。それいとくおしきことに侍。をやなからん人のなに事もさやうには。またいとたえぬとおほかりぬべきわざにこそは』るめれ』など聞え給て。何事にか御堂にめしければとて。うちついきいで給ぬ。御堂には『なにかいとひささうは』とて。『かの御法事はいと近うなりぬらんを。いかいさだめられたる』とのたまはすれば。『この廿日のほどになんさぶら』と申たまへば。『日ごろへばなに事もおぼえねばなん参るべけれど。参りてもべちにゐたらんがいとぎやうくゝなればなむ。こまかなる事どもをばえきてつかうまつらざや』とて様く物の物いとおほく奉らせ給よしの御せうそく申させ給。其ついでに『せけんいと心ほそければ。かゝるさとずみせと思ひなりにてなん』との給はするまゝに。涙うかせ給に。殿原もえたえ給はず。殿の御まへ（二）『中納言殿（三）』のあかがさの後名残やみこそいとをしうきけ。いかゝある』との給はすれば。『けしう侍らざなり。かの大納言（四）』まづ心なうさはぎまどひ。しやめられたりとなんうけ給はる。昨日はかの姫君と

ら、據小本補
る、據小本補

も、原作を、據小本補

そなやましう志侍れ』と聞え給へば。『それも此あかゝさならむ』などの給はずれば。『さ侍なり』と聞え給へば。『たゞにもあらぬ人のだいににもあなるかな』とて。御とぶらひに人奉らせ給。此殿ばらまかて給ぬ。院(御)に参らせ給てとのありさまども申給。尼上(瑜)の御せうそこ聞え給。御堂には『大納言(御)かしこまりうけ給ぬ。日比此中納言のいと苦げにものし給へるにみ給あつかひつるに。おこたりてものし給へば。みだり心ちすこしのどめ思給ふる程に。昨日よりこゝに侍る人のいとあもくわづらひ侍めるも。志づ心なうみ給へあつかひ侍に。そが内にもたゞにもあらず。月比もあさましうなやましげにてのみすこし侍つるに。又かく侍れば何夏も思給へられずなん。さてもことびとはよろしうのみこそ侍なれ。こはやがてくるしげに物志給めれば。胸にふたがりてなん思給へらる』と申給へれば。『いみじういとをしき事かな』と又たちかへり御せうそこ聞えさせ給。院(御)にはやがて御法事山のゐにてせさせ給ける。をろかならぬ程をしはかりきこえさすべし。關白殿(内)大臣殿(御)より。そうせんさるべきとも聞えさせ給へり。日比院がたのかぎりとのみなに事も覺し定めさせ給に。いまになりてかゝる事どものあれば。いと僧の布施ども敷まさり事どもあるべし。僧どもいとあどろしくしうてまかて給めりき。かの大納言れいおはするところにもあらで。此比は中みかどに。いまのひごのかみむね

みつが家にこそ住たまへ。ほどなどもせばきところにて。いとさはがしげなりとぞ。

榮華物語卷第廿七

衣 珠

れ、原作を、據小本改

院(御)の女御。かんの殿(御)の御事のあさましうあはれなれば。ことしの秋はさかの花もくちあしきにはひなり。れいはみやくの前裁ほり。花みる人おほかれはこそをのづからあかしき事もあれ。あはれにて過もてゆけば。よみ人志らず。人志れずこゝろをのみぞ野べにやるはなみんひまもなきあきなれば。かへし。これもあぼつかなし。

この秋はさかのゝはなもかひぞなき君ひとりこそこゝろゆきけれ。など。たれもあらぬ事共世にはあべけれど多くはかかず。中納言殿(御)はいまは御心ちをこたらせ給へど。うへ(禰)の御ありさまのいみじきに。我たいらかにこたりにけん事もくやしうあぼさる。このあかがさはさるものにて。御物のけのいみじけれど此御心ちのなごりもあそろしければ。かぢなどもまいらぬほどに。いと御ものゝけはこはくなりまさりければ。よはりまさり給。大納言殿(御)も中納言殿(御)

あ、原作秋、據小本改○御物のけ以下廿字、據小本補

きた、原作きみ、
據諸本改

つ、原作す、據小
本改

も。よろづおぼしあはてたるに。いみじう心ぐるしう。よろづよりもおほきたのかた(釋)は。このとしごろより正月には。ちごの御きぬやなにやとあらましとを志あつめ給に。かくたゞにもおはせてや月ばかりに成たまへば。のこりの月日を心もとなくおぼす程に。かくいみじき御有様をいかにとおぼしあはつる程。とほりにいとおしげなり。御堂(釋)よりも御つかひまきりにあり。八月廿五日の程なり。なをまかせてのみあべい事ならねば。修法はじめさせ給て。あまたさせたまふ。さまぐ御讀經聲くさしあひのゝまれど。いとたへがたげなる御ありさまなれば。大納言なに事をしのかさんとおぼさず。たゞ我御身にかへんとおぼしまどへど。それによるべきことならばこそあらめ。また佛師どもを二三十人めしあつめて。きぬどもとりいださせたまひて。等身のほとけだちをかざらざらばさせたまふ。よろづの御願いのり共のれうに。たゞかの御どもをとりあかせたまふ。なにすべよものとお願ひに。御誦經につくさせたまふ程。この御どもみなさせたまふに。中納言どのの「これなん我いみじとおもへるもの」とて。御はかしくらとをとりいて。佛師に給ふ程なむ。佛師ども、哀になしく思てまどひかきたてまつる程に。廿六日のひるまにいみじうまどはせたまへば。あるしらぬおほくの僧ども。なりかゝり加持まいる程に。ちごむまれたまひぬ。あなうれしと覺して。いつしかまつみたてまつり給へば。

む、原作と、據小
本改〇六、小本
作三

子、諸本作兒

さまぐ以下六
字、據小本補

まことのほどにて生れ給へる子のやうにて。いみじうおほきにかめしき男君にて。やがてなくなりて生れたまへるを。みつけ給へる大北の方の御心ちいゝがはある。大納言殿(釋)中納言殿(釋)其御あり様いみじう覺して。御心もほれまどひて。いとどものおぼえ給はず。こもち(釋)の御心も物覺え給はねど。「ちごはいかに」との給へば。「いとつうつくしうおはす」とありがほに聞えなして。とかたにゐてたてまつりぬ。さてかきふせたてまつりて御ゆを參るに。兒を思へばなりとてつゆにてものみ入れたまふにつけても。みたてまつる人々「さまぐにいと」ところうしとおぼしまどひて。大きなのかたものさはがしけれど。やがてあまにならせ給ぬ。此うへなをさらたの、みきこゆべきやうもみえ給はず。かぎりぐとみえさせ給に。いとあはれに心うし。大納言殿(釋)中納言殿(釋)の(釋)もはいよりはいより此わか君をうちみくなき給。さてこの御こゝちいみじけれど。佛神をたのみ奉りてすぐし給程に。廿九日いとけふにこそとみえさせ給。日ごろすべものものを給はぬに。『とのうへにつかうまつらでやみぬること心うけれ。我こそおくれたてまつらましか。いかにおぼさむずらん』とばかりの給へば。「やゝいかにおぼさるゝぞ」と。大納言殿もは、北方もつとらへたてまつりて。物も覺え給はぬ程に。やがてかぎりになり給ぬ。「さは是こそかぎりの御事成けれ」といよみなきのゝまり。うちにもとにもそこらみちたる

す、原作つ、據小
本改

二、原作す、據小
本改

づつき、諸本作
松

を、據小本補

や、諸本作殿

人はいでいりもせず。大納言どのいひつゝけなき給ふ御こそに。あるかぎりの人涙
をながしてたちこみたり。中納言殿(經)めづらかになきのゝまり給。すべて心うし。
僧などのさいつ比かんのとの(瑞)の御ありにまいりたりしなどは。これをよにいみ
むきとにもひしに。いとみじうあさまし。御堂よりもたかづかさ殿よりも。中納
言どの、御ありさまのいとをしくおぼつかなきまゝに。御つかひまきりなれどき、
いるゝ人もなし。御堂にはかくときかせ給て。あはれにかなしく。我御ありさまを覺
しおはせて。大納言殿(經)いかに思給らんといみじう覺されて御とき参らせられたど。
きこしめさずうちなきておはします。大納言殿には。またふたつとりかへある御あ
りさまにもあらず。たゞこのうへひとところこそおはしましたつれ。かゝれば殿も北
方もいかいものおぼえ給はん。日もくれぬれば世のひいきもをともせず。大納言ど
のいひつゝけてなき給御こそ。きく人もつゆまどろまれず。『哀としごろわかぎみを
ふところにておぼしたてゝ。いづとてはいまなんいでゝまかるとて御ありのちり
をもうちはらひ。御ぞをひきなをし。いとてはいまなんまかりかへるとて。けふ
は世中になてう事侍つ。なにやかやときく事をばまづきかせたてまつらんと思ひ
て。ほとけなどをあがみたてまつらんやうにおもひかしづきて。ふところはなれ給
てこの五年ばかりなり。このやに奉りてのちぞかくておはしつるぞかし。子なくな

と、小本元、當衍

は、原作も、據小
本改

性、諸本作佳

お、恐當作あ

したるたぐひおほかれど。それはとりかへもあり。のこりをもみてなぐさむらん。わ
がやうにあさまじうゆゝしき事はあらじかし。いかなりけん」とさきのよに人の
たねをたち。おもふ人の中をさげけん。ちご君をだにたいらかにえさせてぞうせ給
はまし。なにゝつけてかまばしも思ひなぐさめんとすらん。こゝらあらはしたてま
つりつるほとけ。われをこよひの内にかのおはすらんかたにゐておはせ」とまどは
せ給。母きたのかたは。すべて日比いみじうなかせ給つる人の。いと物もおぼえ
てきえいりてぞおはする。中納言殿(經)長き夜一夜おぼしのこと事なく。『わがまぬ
べかりけるかはりにこそあめれ』とおぼしやらんかたなきまゝに。我身ひとつを
なしかくなしおぼしまどふ。はかなく夜もあけぬれば。さりとてのみやはとて。陰陽
師めして事どもとはせ給。とかく世のつねのさまにうらなひ奉らむ事はいとおしく
おぼされて。たゞさるべくおさま奉らむとぞおぼされける。さればそのまゝにの給
はすれば。九月十五日のよぞ法性寺にゐてたてまつりて。その月の廿七日におさめ
たてまつるべうきとゆ。これをきこしめすにも。すべてこのよの事ともおぼされず。
こゝらのひごろいもねてつかうまつりあはてつる人々の。うちやすむべきはたほけ
てのみみゆ。みなさるべき人ぐものきて。御屏風などのたてさま。れいにかはりて
あはれにおさましくかなしうゆゝし。されどおほかたはかはらぬ事どもなれば。や

な、原作も、據小
本改

やこはいかにとのみこそおぼめかせ給へ。やうく口比になるまゝに。中納言殿(經)あはれにこひしく悲しとも世のつねにおぼされて。文集の文を覺しあはせらる。季夫人のありさまもかやうにこそはとおぼされて。』ともし火をそむき。かべをへだててかたらふ事をえず。いつこそまばらきたりて。はやくあひみる事をもくせむ。こゝろをいたます事一人武皇帝のみにあらず。いにしへよりいまにいたるまで。またおほくかくのごとし』と覺しつゝけて。『侍従大納言(經)の姫君の御あり。いみじと思し加ど。それはいとわかくて。なか／＼ものおぼえて。はかなき事にやなぐさみきこゆれば。おほかたあべうもおぼされずや。よしなく文うちかき。打わたりのとののありなどはかなき事ありしを。いと心よからぬ御けしきにて。まろがまなむをばいかにうれしとおぼされんなどの給しかば。あなゆゝし。かゝることなの給そ。さらんありはまるも世にあらばこそあらめ。法師になりなむものを。すべてさらにいまよりのちかく侍らじなど聞えし物を。よにあらば人のあたりにもよりなんや。おはせぬがげにもあろかなるさまにやみえ奉らむ。なを聞えまやうにほうしにやなりなまし』など。世中を哀に心ぼそくおぼしつゝ。よるつゆ御殿をもちなげきあかしたまふ。かくて十五日になりぬれば。こたみの御ありきのれいの様にありけれど。御くるまに物まきなどして。またむづかしうてうせ給へれば御ゆどのなどして。や

ど、原作は、據小
本改

ほうさうじ、諸
本作法住寺

がてちご君もおなじ物にいれ奉り。かきそへて御ふところにいだきたる様にてふし奉るほど。おほかたたれもさかしう見たてまつるべきにあらず。またまいりよる人もすくなし。あはれにかなしくゆゝしとはなに事をいふべきにもあらず。おほ北の方(經)も此殿ばらも。又あしかへしふしまろばせ給。これをだにかなしくゆゝしきとにいへでは。又なにごとをかはとみえたり。さて御車のしりに大納言殿(經)中納言殿(經)さるべき人／＼はあゆませ給。いへばあろかにてえまねびやらす。北方の御車や女房だちの車などひきつゝけたり。御ともの人々などかすまらずおほかり。ほうさうじにはつねの御わたりにもぬ御車などのさまに。僧都のきみ(經)御めもくれてえみたてまつり給はず。さて御車かきあろして。つぎてひと／＼ありぬ。さてこの御いみのほどはたれもそこにおはしますべきなりけり。山のかたをながめやらせ給につけても。わざとならずいろ／＼にすこしうつろひたり。鹿のな／＼ねに御目もさめていますこし心ぼそさまさり給。宮／＼よりもおぼしなぐさむべき御消息たびたびあれど。たゞいまはゆめを見たらんやうにのみおぼされてすぐし給。月のいみぢうあかきにもおぼしのことさせ給事なし。うちわたりの女房も。さま／＼御消息きこゆれ共。よろきまほどは「いまみづから」とばかりかゝせ給。進の内侍と聞ゆる人きこえたり。

進、小木作侍従

ちぎりけんちよはなみだのみなそこにくらばかりやうきてみゆらん。
中納言どの(經)の御返し。

おきふしのちぎりはたえてつきせねばまくらをうくるなみだなりけり。

又東宮(後朱雀)の若宮(後崇徳)の御めのとの小弁(三益)。

かなしさをかつはおもひもなぐさめよたれもつるにはとまるべき世か。

御かへし。

なぐさむるかたしなれば世の中のつねなきこともまられざりけり。

かやうに覺しの給はせても『いでや物のおぼゆるにこそあめれ。まして月ごろとし
比にもならば。思ひわする、やうもやあるらん』と。我ながら心うくおぼさる。『何
とにもいかでかくとめやすくおはせしもの。かほかたちよりはじめ心さま。てう
ちかきゑなどの心にいり。さいつごろまで御心にいりてうつぶしく、てかき給しも
のを。このなつのゑを枇杷どの(三益)にもてまいりたりしかば。いみじうけうじめてさ
せ給ておさめ給し。よくぞもてまいりにける』など覺しのことす事なきまゝに。よろ
づにつけて戀しくのみ思ひいて聞えさせ給。年比かきつめさせ給けるゑものがたり
などみなやけにしのち。こそことしのほどにしづめさせ給へるもいみじうおほかり
し。』（後朱雀）とてなばとりいてつゝみてなぐさめん』とおぼされけり。月のいみじうあ

なつ、原作たび、
據小本改

て、原作れ、據
小本改

本補

に、諸本元
それに、據小本
補

かきにふるさとをおはし出て。

（後朱雀十五條）

もろともにながめし人もわれもなきやどには月やひとりすむらん。
かくいふ程に。やうく御ほうじのほどもちかくなりぬれば。かの御装束や僧のほ
うふくなど。さまざますべなくうちなきく、いそがせ給。御經佛などにも。たい御物
のぐどもしいてさせ給。御堂にはかんのとの(三益)の御法事。九月廿一日に阿彌陀堂に
てさせ給。きこしめしけるこきをほとけにつくりたてまつらせ給へるなりけり。
そのほどの事どもおもひやりきこえさせ給。いろくの御ごどもしかさねて御誦
經にさせ給。御たもとにもすびつけさせ給。との、御まへ(三益)。

たちかさねみすべきさまもしらせねばかねのをとにてきつとしらなん。

これをみなわ^かたす。山の座主(三益)たまはりて。

我しあらばたしかにきせんころぞし色くふかきはなのたもと。

東宮(後朱雀)殿ばらの御誦經みなあり。春宮はつきもせずおぼしめさるゝにも。けふは
いと覺しくらさせ給。御正日は廿三日にぞありける。それにも又御經ぼとけ様々
いみじき事どもあり。若宮(後崇徳)の御五十日は廿二日にぞあたらせ給ける。いとゆゑ
しき程の御事どもなれば。二十七日よき日なりければ。それ^にぞきこしめさせ給
る。大宮(三益)よろづにとりあつかひきこえさせ給へば。いみじき事どもをさせ給

て。内春宮みや／＼などにもてまいりさはがせ給。東宮よりもおぼしいたらぬこと
なく。こまかにせさせ給へるにつけても。との御まへ(璽)いとゞしのびがたくおぼ
さるべし。はなごやありびつ物など。殿上人などにの給はせられたれば。みなかきつけを
しつゝ参らせたり。『あべいまかざりはめてたきにつけてもまして』とぞ覺されける。
わかぎみ。いかうちすぎさせ給へる程。いふかたなくうつくしうおはしますに。おほ
みや(璽)もこといみもえさせ給まじけれど。よくしのびあへさせ給へり。かの法住寺
には。その北方の大だいもん門に。その日のうちについぢつき。ひはだぶきのやいとあか
しげにて。そこにぞおさめたてまつりける。萬の御しつらひ共して。御車ながらにか
きおろしておさめ奉る。其ほどこのとのばらの御心ちどもおもひやるべし。いはん
かたなくまどはせ給。あべいまかざりの事どもして。いまはとみたてまつらせ給程も
いふかたなし。『雲霧とみなしたてまつりつるはしばしこそあれ。さすがにさはやか
なるに。これはさらにわすれもこそまたてまつれ』とて。大納言殿(璽)法住寺の御あ
りきにもわすれじの御心なりけり。あさましうゆ／＼しくおさめたてまつりつ。大納
言どのかへす／＼も覺しまどはれたり。四條大納言(璽)のひめぎみひとせうしな
ひてなげき給しかど。内のおぼとの(璽)のうへへによるづ思なぐさめ給しに。又そのう
へうせ給にはいみじき事ぞかし。されどそれはかのうへへのあまたの君達御かはり

きみ、諸本此下有字

右、諸本作左

と、小本作と

殿、據小本補

におはす。又右大弁のきみ(璽)あり。又侍従大納言(璽)のむかひばらのひめ君たち。お
とこ君たちなどあまたもちあへり。きたのかたぞいみじうおぼすべけれど。少將の
君(璽)も給へり。かやうなればなぐさめこよなし。この大納言(璽)は此御なかどもに
さき／＼いとあまたうしなひ給て。たゞこのうへへところえりと。まり給ひておは
しつるを。『せう／＼にてあまたあらむはなに、かけせん』とのみ覺えつるに。あさ
ましく心うしとををろかにぞ。神な月にもなりぬれば。おぼぞらの時雨もひまなく
おぼされて。くれなるふかき御なみだもすみぞめにいろまされば。へみじうのみお
ぼさる。御ほうじはやがてこの月十八日とぞおぼしてよろづいそがせ給。中納言殿(璽)
かくてゐさせ給へれば。とをきほどなれ共世の人まいりこむ。つれ／＼もなきまで
ものさはがしうおぼさる／＼につけても。大納言どのは昔いままばしぞかし。ほかへわ
たり給ひなば。いかになぐさむかたなく。いとゞさま／＼戀しき事おほからん』と。
いまよりそれをさへぞなげかしうおぼさるべき。中納言殿(璽)。

うきよなり思ひかけきやときのまもきみにわひみですぐすべしとは。
此御事を。ある人よそのたもともかかけがたくおもひければいみじきに。すどしが
たくてかくぞきこえける。
けふまではありとも人にまられじとなみだにまづむ身をばとふらん。

御、據小本補

たゞいまの左兵衛督(正)ときこゆるは。この大納言(正)の御おとゝをやがて子にし給へるなりけり。その北のかたには。ほりかはどの(正)の大藏卿まさみつ光の君の御むすめをぞ。としごろ物し給へれど。月比ものゝけにて。ともすればたえいりつゝわづらひ給ひければ。まづ心なくてこの御方にもえさぶらひ給はずおはしなげきけり。かくて十八日にやがて此御てらにて御法事なり。大納言殿(正)のとしごろの御もの。たゞこのたびふるひ給。大納言殿おぼしいたらぬ事なく。いかめしうせさせ給て。御いみもはてぬれば。廿日京にいでさせ給。たれもいと心うく思ひて。なきみやことおぼせど。さりとしてやはとおぼして。かのゆゝしかりしところへにてはあらで。たなかの僧都といふ人の車やどりにぞおはしける。おはれわかぎみおはせましかば。この比いかにうつくしうおはせまし。春宮のわか宮の御事など。つたへきかせ給て。大納言どのつきもせずおぼさる。中納言殿(正)は宮々などにかしこまりばかりに参らせ給て。つくづくとものおぼしあかしくらす。院(正)の女御(正)などの御ことをまばしこそありしか。いまはよろづにたはれさせ給めるを。いともどかしう心うしとおもひきこえさせ給なるべし。霜月になりぬれば。世の中には五節のいそぎしのゝまる。中納言御ぶくなるうちにも。たちいでんともおぼされず。五節にもなりぬれど。れいの様に童しもづかへなどもめされず。物すさまじげなり。かゝる程

へ、原作ひ、據小本改、す、據小本補

に、小本元、當衍

る、原作ひ、據小本改

衍、小本元、當

に。この比きけば大宮(正)にさぶらひつるに。小式部の内侍といふ人。内大臣(正)の御子(正)などもたるが。此としごろまげのみの頭中將(正)のこ(正)うみてうせにけり。人のいとやんごとなからぬ方こそあれ。まにさまの御ことにたる。おほ宮(正)にもいとあはれにおぼしめして。世のはかなさいと。おぼしえらるゝにも。『いかでとくとど』おぼしいそがせ給にも。御調度どもをぞいそがせ給。小式部「卿」の母和泉式部。こどもをみて。

といめをきてたれをおはれとおもふらんこはまさりけりこはまさるらん。とよみけり。内大臣どの(正)のわかぎみ(正)をば。宮の僧都といふ人の坊におはしければ。いづみむかし戀しければ。みたてまつらん。わたし給へ』とおかしさまにありければ。僧都たゞ「此なか河におはして。みたてまつり給へ」とありければ。いづみ。こひてなくなみだにかげはみえぬるをなか河までもなにかわたらん。

とぞいひやりける。はかなくまけすにも成ぬれば。こよみの軸もとちかうなりぬるを哀にもおもふほどに。まはすの一日きけば。右殿中將顯基のきみ(正)の北の方(正)うせ給ぬとのゝまる。あなわさまし。こはいかなる事ぞときけば。いまの右衛門督(正)のなかの君之けり。それ日比なやみ給ければ。何事もまのこす事なかりつるも。あさましうなり給ぬれば。中宮權大夫殿(正)もいとくほしう萬にあつかはせ

のみ、據小本補

させ、據諸本補

給へるに、かくなり給ぬれば。關院のおほきちと、(松)をはじめたてまつり。いみじう覺しなげき給。すべてあさましういみじう覺しなげきたり。『あさましういみじうえさらぬ人々ををきて。わかれたまふ人おほかる年のありさま。いはんかたなく心うしや。たれもよそくなればこそおろかにもあれ。そのく御いゑにはこれににたる事なし』とのみ覺しまどふぞ。げにいみじうあはれにみえ給ける。返々よがりにもまつべき年のありさまにこそなすけなう心うけれ。かくて四條大納言どの(松)はうちのおほと(松)のう(松)の御事の、ちは。よろづうむじはてさせ給。つづくくと御おこなひにてすぐさせ給。ほうしとおなじさまなる御ありさまなれど。これ思へばあいなき事也。一日にても出家のくどく世にすぐれめでたからんなるものを。いままばしおらば御匣どの(松)の御事などいきてきて。いとみすてがたくりわりなき御ほだしにこそおはせめ。さらば此程こそいとよきほどなれ』とおぼしとりて。人志れずさるべきふみどもみきたり。御しやうのつかさどもめして。あるべき事どもの給はせなどして。猶としとおぼすに。女御(松)のなを人志れずあはれに心ほそく覺されて。『人の心はいみじういふがひなきものにこそありけれ。などかくおぼゆべからん。いとわれながらもくちおしうおぼさるべし。なにごとかはある』とおぼしまはしつ。人しれず御心ひとつをおぼしまどはすもいみじうあは

れなり。この御ほいありといふ事は。女御殿(松)もしらせ給へれど。いつといふとはしらせ給はず。かゝるほどに志るを人のもてまいりたれば。女御殿の御かたへ奉らせ給ける。御箱のふたをかへしたてまつらせ給とて。女御どの(松)。

ありながらわかれんよりは中くになくなりたるこの身ともがな。ときこえ給ければ。大納言どの(松)の御かへし。

ちく山の志るがもとをしたらつねこばとまるこのみを志らざらめやは。

女御どのいとあはれとおぼさる。かくて大納言殿は。さぶらふ人々などのひとへにたのみきこえたるをぞ。いとあまたみすてがたくおぼさるゝにつけても。あはれにのみおぼされて。まだきにかくいふことを志らせじとやおぼしけん。のたまふ様は。『ながたけ、堂たてんと思ふに。北にあたりたればいとあそろしければ。かのてらにとしのうちにいきて。四十五日そこにてすぐして。來年の二月ばかりになん京にいづべき』などいふ事をの給はせつ。よろづにあべいことをおぼしをきてければ。弁のきみ(松)よりはじめたてまつりて。たゞさのみおぼしたり。我御めのとの年いみじうおいて。さるべき人々にもおくれ。たゞひとへにとの(松)をたのみたてまつりたるぞ。あるがなかにあはれにいみじうおぼされける。それもこのごろは。はかなき事もあはれにせさせ給。尾上(松)も二條殿(松)にぞこの比はあはしましけ

る。かくてながたにの御いでたちをせさせ給ふとて。『公任かしの僧のさるべきにもうちとらせんと思ふ』とて。わざともあらぬほうしのさうぞくをぞひびろせさせ給ひける。まけすの十六日の程なりけり。けふさるべき人々にも對面し。さるべき事も聞え給はんと覺して二條殿(註)におはす。さるべきむつまじき人々二三人ばかり御ともにて參らせ給へば。御門いらせ給よりはじめて。『哀にこのたびばかりぞかし』とおぼすに。あやしう人わろき御心いできぬべきを。覺しまざらはして。西の對におはして御くしげ殿(註)をみたてまつり給へば。まだいとおさなきほどなれど。人のいとやんごどなくて。もてなしかしづきすへ奉り給へれば。ちいさながら家のきみにておはする御ありさま。いとおはれにうつくしうかなしうみたてまつり給。御てならひをぞせさせ給める。中のきみまだいとおさなげにて。うちふみてゐ給へり。御くしげどの、御手ならひを申てみ給へば。おはれにうつくしうかゝせ給へり。ただむかしこひしきふる哥どもを返々かゝせ給へるにも。なみだといめがたくて。それにもかなしとおぼしたれど。それはものはづかしうて。おもてをおかめてゐ給へり。おはれにいみじうおぼされて。『公任こたみばかりぞかし。又はいつかみたてまつらん』と覺しめすぞいみじうたへがたきや。さてなにやかやとおぼしまざる程に。殿(註)參

ぞ、原作と、據諸本改

こ、原作に、據諸本改

を、據小本補

も、原作は、據小本改
て、據小本補

か、原作は、據小本改

らせたまへば。物まめやかなるよの御物がたり。らいねんのぢもくのことや。またおほ宮(註)のあまなりの事やなど。たゞ御調度どものいでくるをまたせ給なりと聞えさせ給ほどに。二郎君(註)三郎(註)どめきておはして。『やゝおぼてゝがおはしたりけるを知らず。いましてござりけるは忘れたりけるわざかな。おはれわれはくびにかゝらん。われはひざにこそめ』など。きをひあらそひさはぎあはせ給へば。『いであなものをぐるおし。かうなつかうまつりそ〜』とせいしきこえ給に。いづくかはあやにくにむつびきこえたまへば。えまのびあへ給はず。御おもてに御ぞの袖(註)をしめてなかせ給へば。内のおほとのも。むかしを覺しいづるとみえさせ給に。たへがたくてやがてさしむかひなかせ給に。御まへにさぶらふ人々もみななきにたり。なをいとわりなくおぼさるれど。かしくうためらはせ給て。よろづに御物がたりありて。かへらせ給とて。尼う(註)の御かたにさしのぞかせ給へば。れいのみじかき御几帳ひきよせてゐさせ給へり。『ふりがたの御ものはぢや』と哀にみたてまつらせ給て。此君達のめづらしがりてれうし給へるこそいみじうおはれにとて。又うちなかせ給へば。あまうへもやがてといめさせ給はぬ程もいみじうおはれ。やゝ御もの語ありて出させ給ぬ。四條の宮にかへらせ給へれば。やがて女御殿(註)の御方にさしり給へれば。御おこなひのちり也けり。なに事もおはれに聞えさせ給。『公任この

侍の、據小本補

古今雜言云、世の中にうきもつらきも告げなくにまづしるものはなみたなりけり御、據小本補
たじき、原作き、據小本改

も、原作に、據小本改、據小本補

やにとしひはだをふかざなり侍ぬることの口おしき。いたやは雨のをとのかしがましきこそぞちなく侍けれなどきこえ給て。御しやうのきぬなどをすがやかに奉りはてぬ事のあやしさに。年かへりてぞ御つかひつかはすべかめるなど聞え給。哀にたのもしうおはせぬよにもあらばいか心ぼそからんと。『まづ志る物』におぼされけり。扱かへらせ給ては。我御めのとのあまぎみのがりさしのぞかせたまへれば。『や』とかしこまるけはひもいと哀なれば。『なに、たいてを』との給はす。『いかにぞさむくやものし給』との給はすれば。『さむきよやあらん。時々みだりごこちのあやまり侍』と聞ゆれば。御ぞをぬぎ給て。『これをき給へ。是ぞわたあつききぬ』との給はすれば。『かしこまりて』ときこゆるけはひいとあはれにこたひえ。わがとをいかに思はんとあはれに覺して歸り給ぬ。さてつくくと覺しつゝくるに。『あさましう心うき物は人の心にこそありけれ。よにある人のあるはかなしき子にをくれ。あるは女男の哀に思はをくれ。あるはちがましき事いでき。あるはさひはひなくなどして。もとも出家せんにあへぬべき人の思たぬは。たかくにこそありけれ。おぼろげに心よからむ人のあべいにもあらざりけり。か、れば浄土にもむまれ。佛にもなる人はすくなかりけり』と覺しあらせ給。さてあけぬれば。つどもりの程の事どもなど。家司にめしおほせられなどするに。左大弁參り給へ

こひ、諸本作魚

の、據諸本補○は、據小本補

弁、諸本此下有の字、據小本補

拾遺集春歌云、鶯の聲なかりせば雪きえぬ山里いりて春をしらまし

見え、據小本補
ま、原作かた、據小本改

ば。さるべき事などきこえつけ給に。弁のきみかしこにいみじきこひのさぶらひつる。きこしめさせばや』と申給へば。『精進近くなるると。人の魚くふいとほいなき事』との給はすれば。いとくちおしくてやみ給ひぬ。かくて女房などもに。『らいねん二月十日の程には出ぬべし。そのほど心ぼそしと思は』であるばかりぞ』などの給はせて。つどもりの程の事どもなどおぼしをきて。あはすの十九日にぞながたにへいらせ給へば。女房など『つれづれにあるべき正月なめりかし。とく月日もすきて歸らせ給べき程になむ』など申思へり。弁・君などみな御をくりつかうまつり給て。あるべき事共聞えかけしてまかて給ぬ。そのうちたびく參り給。かくてちくやまの御すまいもほいあり。心のどかにおぼされて。としもくれぬれば。一夜が程にかはりぬるみねのかすみもあはれに御覽せられて。『山里いかで春をまらまし』などうちながめさせ給に。ついたちの日もくれて。二日辰のときばかり。弁のきみ参り給へ。『思ひがけぬほどの事かな』と覺さるゝに。御装束もたせ給へりける。かくれのかたよりうるはしうして御まへにいて、はいたてまつり給なりけり。人なかのちりの御すまるだに。なをわが御心にはすぐれて見えおぼさるゝ御有さまの。まいてさるやまのながたにのほとりにては。ひかるやうにみえ給に。『あないみじ。是を人にみせばやとみるかひあり。めでたのたのいまのありさまやと人のこにてみんに。うら

も、小本元、當行寺、據小本補

やましく「も」もたまほしかるべきこなりや。みめかたち心ばせ身のぞえ。いかであ
りけん』とあはれにのみじうおぼさるゝにも。御なみだうかびぬ。さて山ざとの御あ
るじとこほにまたがひ。おかしきさまにて。御ともの人にも御みき給てかへり給。な
ごりこひしくながめやられ給。かくてついでに四日のつとめて。御堂に三井寺の別
當僧都(釋)たづねに御消息ものせさせ給へばまゐり給へり。さて心のどかに御物が
たりなどありて。御ほいのこともきこえ給へば。僧都打なきて御ぐしおろし給つ。戒
などさづけたてまつり給ぬ。かくてかへり給ぬれば。世にやがてもりきこえぬ。これ
をきこしめして。御堂(釋)より御装束ひとくだりしてまゐらせ給とて。
いにしへはちもひかけきやとちかはしかくきん物とのりのころもを。

御かへし。ながたに(釋)より。

をくれじとちざりかはせてきこえ給へば。ころもにたちをくれける。

とぞきこえさせ給ける。かくときこしめして。うちのおと(釋)いそぎあはしまし
て『教などかうあさましくたのもしげなかりける御心かな。ことひと共の御事はきこ
えじ。御くしげ殿の』とかうの御有様をおぼしすてつるなん。いみじう心うく侍』な
ど。いみじうこまやかにうらみ申させ給へど。』を思ひ給へてこそいままゝ侍つれ
ど。まいてさやうの御ちりにあつてちもひかくべきにもあらねばなん。かく思給へ

をくれし、諸本
及千載集作をな
し、
の、據小本補

ゆめさめて、集
作れざめて、
し、據小本補

なりにし』など申給へば。うちのおと(釋)ずちなくうちなきて。『いまはいとゞい
てかあるかには思きこえさせむ。よに侍らんかざりは。何事もたえんにまたがひて』
など。あはれにきこえてかへらせ給ぬ。べんの君(釋)わらはなきになき給へどかひな
し。たれもみなきつつけて。いみじうまゐりみたてまつり給。尼上(釋)女御殿(釋)い
みじう哀に覺しいりたれば。女房たちは『ちごはかるやうにこしらへをかせ給しは。
かくにこそありけれ』となきまどひあへり。御めのとのあま君あづみりてふしぬ。
の弁きみ(釋)さとよりきこえ給へり。

ふるさとのいたまのかせにゆめさめて谷のあらしをちもひこそやれ。

なかだに(釋)の御返し。

山ざとのたにのあらしのさむきにはこのもとをこそおもひやりつれ。
雪のいみじうふる日。女御殿(釋)より。

ちもひやるころはかりはちく山のふかき雪にもさはらざりけり。

かゝる程に。三井寺より入道の中將のきみ(釋)きこえ給へりける。

まだなれぬみやまがくれにすみそむる谷のあらしはいかゞふくらん。
とあれば。ながたにの御かへし。

たにかせになれずといかゞ思ふらんころははやくすみにしものを。

し、原作く、據小
本改

すこし心のどかにおぼさるゝほどに。中宮大夫(顯)おはしたり。山の嶺たにのそこと
みわけみおろし給に。おはれにすぐくめでたくおもしろし。岑は梅などいとさかり
におもしろし。『さきくは常にみしかどいとめてたくもあるかな』と見給ふ程に。
『こなたに』と聞え給て。御たいめんありてよろづに御物語聞え給て。中宮大夫まづ
いみじうまほりもあへずなき給ふに。入道(顯)も御目になみだうきぬ。大納言(顯)いか
にかくおぼしたちにしぞ。なにがしこそあさましくは思ひたゞて。こぞの八月のつ
ごもりよりむねは今にふたがりてあさましくて侍れ』ときこえ給へば。入道殿の御
いらへ公作にもかく今までとは思侍らざりしを。まばしいみじき程すぐして。念佛
どきやうをも心きよくと思ひのどめ侍りしほどなり』ときこえ給へば。大納言(顯)こ
ぞのありさま。あさましくめづらかなる事ともおほかり。京の中にもなにがしばか
りいみじき人は侍らず。かゝる人のたぐひよにあまた侍なかに。なをいと心うき身
になん侍。入道どの(顯)の院(顯)の女御(顯)。ないしのかみ(顯)と月ならびにうしな
ひたてまつり給へりしいみじけれど。宮くゝあまたおはしまし。さるべき君達など
も物したまふ。すべてその御有さまきこゆべきにあらず。右衛門督(顯)。頭中將(顯)の
北方いみじけれど。中宮權大夫(顯)北の方ものし給ふ。又頭中將(顯)いとめてたきこ
なり。侍従大納言(顯)の姫君の事こそありしかど。ことおんなどもおとこ子ももた

と、原作も、據小
本改
ど、據小本補

も、據諸本補

まへり。がうか下の御事こそ。ひめ宮の御おりにいみじかりしかど。またこう上(顯)の
御事いみじとあればをろか也。されどもそれはおぼしもなくさめぬべし。うちのお
ほと(顯)の君達七八人おはす。御くしげ殿(顯)などけふあすの女御きさきとおもひ
きこえさせたり。又左大弁(顯)いとたのもしうものし給ふといへば。よろづにおぼし
なぐさめつべうたのもしきに。おのれは又二なき人のたゝあけくれなき物とかしづ
きぐさにこれひとりと思ひて。うちみくゝよろづを思ひなぐさめておかしくらまゝ
程に。やがてひをうちけちたるやうにてうせ侍にしのち。はかなきくりとひとつをく
ふにつけても。やすくいりはべらす。むねにのみなむ侍るいかはせん。ちごをだに
といめをきてはべらましかば。いのちをかけこゝろをなぐさめても侍なまし。それ
さへあさましう侍りしかば。すべてさるべきむかしのよのくはほうにこそはと思
給へれば。いまよてよにかくて侍るいみじきことや。されどおぼさるゝやうに。まば
し心をのどめんなど思て。月日をすぐし侍る程に。せんせられ奉り侍ぬれば。いまは
二のまひにて人の御まねをするになりぬべきがいとくちおしきなり。されど中納言
(顯)の物し給へば。そのあつかひにて同じさまなる心ちしてすぐし侍れば。中納言も
さてのみあるべきことならず。入道どの(顯)も今まである事みぐるしき事なりとの
給すれば。このいみの程をだにおなじ所にあらんなどぞ侍りし。それさへ他所せら

は、小本元、當行

て、原作ま、據小
本改

れなば。まいていかにく／＼に事につけても。ものおもひなぐさめ侍らんと思ふが
かなしきこと』といひつゞけ給ふ。げにく／＼ときこえてたれもいみじうなかせ給。入
道殿(孫)げにさはべる事共なれど人の心の心うかりける。こゝら有君だちをみてな
ぐさまんことははべらず。いよく／＼おはれにこひしう。まづみるにもなみだこぼれ
むねふたがるこゝちなんま侍れば。猶ひたぶるに思ひはなれんと思はべるなり。げ
にこそ人の心いとわびしき物に侍けれは。すべておぼろげにて思たつべき事にて
なんはべらざりし』など。萬哀にうちなきく／＼きこえかたらひ給ひて。大納言殿いで
給そらもなく。『かくてやがてとまるべき心ちこそしはべれ』となき給。入道殿もい
とおはれなる御事どもいと覺しいでられて。あやにくなるまでよ／＼となき給。大
納言おはれにいひつゞけ給へる夏どもこそ。げにく／＼とき／＼つれ。哀なる世中のあ
りさまにこそあれ。ふりがたくいみじき物はありけれ。ながたにのいとさう／＼し
くて。おはれにうちおこなひてすぐしたまふらんもいみじうめでたし。この大納言
殿(孫)入道殿(孫)とは。一家にてむつまじき御中ぞかし。あめのふる比。なが谷よりう
ぐひすの雨にぬれてなくを。御くしげ殿(孫)に御らんせさせばやとて。
おもひやる人もあらじをうぐひすのなどはるさめにそぼちてはなく。
とてあまうへのかたけきこえ給へれば。あまうへ御くしげどの、御方にこれをたて

まつり給へれば。みくしげどの(孫)。

みる人もおもひすてつ／＼うぐひすのいりしやまべにかでなくらん。

大納言、小本此
上有轡字、宜從
を、恐行

かくて御調度共いできぬれば。大宮(孫)この月のうちに覺した、せ給。御屏風どもに
はきなるから綾をけらせ給へり。したゑしてさるべき心ばへ有事どもを。・大納言
(孫)さま／＼にかき給へり。へりにはからのにしきのぢあをきをせさせ給へり。おそ
ひには皆まきゑしたり。うちにはかう染のかたものをりもの。御几帳を「も
すかうぞめ也。御帳などもあをかうにてしたむぢなるにせさせ給へり。おほかたみ
す御ましのへりまでみなことさらなり。みづしどものまき給には。皆ほうもんをま
かせたまへり。いはんかたなくみどころありたうとし。御持佛のありさまなどいふ
もをろか也。その日に成て。のこる女房なくまいりこみたり。源三位(孫)伊勢の中
將(孫)。中納言のあまなどみなまいりたり。その日の女房のなりはなをおりたり。
月ごろはわれもく／＼と『おくれたてまつらじ』と申す人みのおほかりけれど。まことに
なりぬればそら哀なり。その事たがへず世をそむきおなじ道にいる人々。少將の内
侍。弁のきみ。弁の内侍。そめ殿の中將。筑前の命婦などなり。この人々／＼のなり共。た
だなるありだにあり。わかれをおしみたるえならぬめでたき事に。べんのないし思
たちぬるを。殿ばらなどもいみじうおはれがりの給。宮の御ありさまをみたてまつ

少、小本作中

を、並據小本補

みな、據小本補
〇て、小本无

官、據小本補

官、據小本補

れば。紅梅の御ぞを八ばかりたてまつりたるうへに。うきもんをたてまつりて。えもいはずうつくしげにて。御ぐしはたけに一尺よばかりあまらせ給て。御ありさまさゝやかにふくらかに。うつくしうあいぎやうづきおかしげにおはします。たいいまの國王の御あやと聞えさすべきにもあらず。おかしげに女御など聞えさせんによげなる御有様なり。ことしは萬壽三年正月十九日。御歳卅九にぞならせ給ける。いみじうわかくめてたくおはしますに。あまの御装束いみぢうせさせ給へり。御志つらひはみなけさつかうまつりたれば。かうておはしまさんもおしからずみえたり。殿の御まへ(璽)をはじめ奉り。關白殿(璽)内のおほ殿(璽)などをしこりてみたてまつり給。いとあはたしくおぼえさせ給ほどに。御となぶら参るべき事ははぐ程に。うち(璽)よりなにの弁ぞや御つかひにて。官のしづばらなど。さうげてきぬもてまいりたれば。御まへのみはしのもとに御つかひさぶらふ。御文とりいれて御覽じて。御つかひに祿たまはせ。官のしづばらにひけんたまはするほどのめてたさを。そこらまはりこみ給へる土達部。山の座主(璽)權僧正(明)めいぞむよにめてたきことに申給程に。又東宮(璽)よりおなじ様にてもてまいりたり。御つかひさきのさまにてかへさせ給。皇太后宮(璽)中宮(璽)などよりみな御装束もてまいりあつまりたれど。ものさはがしさにまぎれて。御つかひにげにけり。そのものどもあす御らんずべし。かくてい

三位、小本作三井

かたく、諸本作前

同日、原作ひる、今從小本と、大本无〇つぼれに、據小本補

まはならせ給。三位僧都(璽)は御いここに。ないげし給へれば。それ御ぐしあろし奉らんとてあるに。關白殿御はさみ奉らせ給に。御めもくまどひていみじうなかせ給に。との御まへかくならせ給を。このよの御さいはひはきはめさせ給へり。後生いかにと思きこえさせ給へりつるに。いとうれしう心やすき御事なり」とそののかしきこえさせ給へれど。さばかりのめでたき御有さまの。にはかにひきかへさせ給をば。との御まへをはじめたてまつり。殿ばらうへの御かたぐせきもあはずなかせ給へば。宮の御前いとあはたしくしげに覺しめしたり。年比の宮つかさの民部卿(璽)みすのもとにていみじうなき給。あさましくあはれなる御事どもになむ。べんの内侍同日いみじうさうぞきて。さしぐしにものいみをさへつけて。思事なげなりつるほどは。さいふともいかにとおぼしめしつるに。つぼねにゆきてうちなりておしかへしてさゝやかにおかしげなるあまぎみの。すゝひきさげていてきたるに。あさまじうあはれにて。殿原なをたままるあるものにはせんせられぬべき物かな」と。いみじうかんぞの給はす。あまへをはじめたてまつり。みな戒うけさせ給て。僧だち祿たまはりてまかてぬ。いみぢううつくしげに。あまそぞたるちごどもの様にぞおはします。御ぐしわけさせ給へりし御有さまにもよろづみえさせ給。つきもせずめでたき御さいはひありさまのきはかぎりなくおはしますを。いみじうみたてま

げ、原作き、據小
本改
やがて、原作や
く、據諸本改
の、原作は、據諸
本改

らん、諸本作ち
ん

は、原作か、い
る、原作うら
並據小本初

べき、原作なり、
據小本改

つらせ給。内より御つかひあり。おりののみかど、ひとしき御くらるにて。女院とき
こえさすべき宣旨もて参りたり。御つかひ祿給はりてまいる程。との、御まへ(正)さ
くりもよ、になかせ給。御まへのひたきやとりいで。陣屋とぼちなどすれば。衛士
も火をたきさして心おはた。まげに思たり。陣のきちじやうなみだをながしたり。
いみじうめてたき御ありさまなるに。やむ事なきみやづかさどもはやがて院司に成
たり。さもあらぬはなるをいみじきことと思へり。民部卿(正)はやがて院の別當
になり給ぬ。判官代はれいのみのくら人などにはおらぬ人のぞみなる事也。こ
れはこの院の藏人の中にも。やんごとなきをえりなさせ給へり。さまうめてたし。
又の日すこしのどかにおはしませば。よべの宮の御消息どもとりいで、御覽す
れば。皇太后宮(正)の御消息にらんのすゝにこがねの装束して。おろがねの御はこに
いれさせ給て。むめのつくりえだにつけさせ給へり。
かほるらんころものいろをおもひやるなみだや袖のたまとなるらん。
とぞきこえさせ給ける。中宮よりおなじさまの御事どもありけり。されどそれおほ
つかなし。日比すゞさせ給まへに。うちにも東宮にも。ゆかしき御ありさまをいつし
かとこゝろもなく聞えさせ給。齋院(正)よりかく聞えさせ給へり。
(後拾遺雜三)
君すらもまことのみちにいりぬべきひとりやながきやみにまどはん。

この御かへし。との、御前(正)聞えさせ給。

あとなたれ。ひとみちびきにあらはれてこのみやづかへまどひしもせじ。
と申させ給へり。まことびは殿(正)の御返しものさはがしくていましてとて。
(新古今集下)
まがふらんころものたまのみだれつなをまださめぬ心ちのみして。

とぞきこえさせ給ける。かやうにこの世のちのよまてめてたき御ありさまとぞ。故
女院(正)は御なやみありてこそあまにはならせ給ひしか。これはわが御心とおぼし
たぢならせ給ぞ。きこえさせんかたなくめてたき。との、御まへ返々かたじけなく
おぼしめしたり。かくてこの秋御受戒あるべしとて。無量壽院たつみの方によるを
ひるになしていそがせ給へば。せかいのあま共よろこびをなしたり。まことかの左
兵衛督(正)の北の方(正)正月廿日の程になくなり給にければ。おとこぎみは少
將實康の君まだわらははにて。さては十四ばかりの姫君のいとうつくしきぞもたまへ
りける。よろづあはれくと思つ。兵衛督あつかひ給ひけり。御いみのほどいと哀
にてすぐし給ふに。このひめ君の御ゆめに。この君をかきなでよみ給とみえたり。
おもひきや夢のなかなるゆめにてもかくよそくにならんものとは。
これをつたへきいてある人の聞えたりける。
夢といへばさだかなるだにはかなきに人づてにきくほどぞかなしき。

あとなたれ、諸
本作あとなたれ
て、〇れて、同上
作る、〇、同
の上作、集作
のみして、
こそすれ
これは、諸本无

も、諸本作は

とあれば。御かへし。
つてにきくほどだにかなしおもひやれほのかにみえし夢のなごりを。
この姫君。くろき御ぞのほころびたるをみて。

此、據小木補

かたみとてそめたるいろのころもさへおつるなみだにくちぬべきかな。

御、據諸本補

て、據小木補

三、諸本作二

く、原作え、據小
本改

て、據小木補

小二條、諸本此
下有殿字

おはれにて月々の御事ども志はて給てけり。其のち此兵衛督ものゝみ心ほそく
おぼえて。こゝちもれいならず覺え給ければ。風などいひければ。ありまへといてた
ち給へど。此ひめぎみの御うしろめたさにえおはせてぞすぐし給ける。かくてうち
のおほいどの(註)には。三條院のひめみや(註)を院(註)たゞ萬に志たてて。我御子の
やうに志たておぼしあつかひて。三月五日山のゐのむかひなる所にぞ。むこどり
たてまつり給ける。もとより宮のひとくおほくさぶらふうちに。わかき人わらは
などおほく参りそひたり。よろづいみじういまめかしうておはしましそめさせたて
まつりつ。こみや(註)の御はても二月にせさせ給てしを。猶宮(註)はうすいろくれな
ゐをぞ奉りたりける。いとかひありてめでたくてかよひきこえさせ給。四月十日程
は小二條・にわたらせ給べし。やがてそのひんがしの殿を。ひとたびにとおぼしめせ
ど。なをいとあしければ。『かゝるたびありきみぐるし』と殿の御まへ申させ給へば。
まづ小二條殿におはしますべきにけり。其のち院の御ありきにまづさそひ聞えさせ

せ、重複、當衍

と、女御、小木作も

の、據小木補○
り、原作る、據小
本改

給。よろづいとかひある御なからひ也。かくて四月に成ぬれば。かものまつりのいそ
ぎにて世にのゝしる。四月十余日のほどにぞ小二條殿にわたらせ給べくていそがせ
給。その夜になりて車十二にてぞわたらせ「せ」給。院もおはしまさまほしげにの給
はずれど。あべい事ならずとて中務宮(註)ぞおはします。院の殿上人ども御をくり
たてまつらせ給へれば。さまぐのものかづけさせ給。中務宮の御方のさぶらひ御
車ぞひまで。みなそれにものかづけこしさせ給。いとめでたくかひあるさまなり。女
御の御かたの女房だちなど。世中をおはれにおぼしたり。かくて皇太后宮(註)には。
故三條院の御ために御八講をさせ給はんとてほとけみなつくり奉らせたまへるに。
五月十九日よりといそがせ給。女房何事をせむとあさましき事おほかれど「た」さ
やうにてはあらで」との給はずれば。ともかくもえ思ひたらず。よのつねのなりをい
そぐ。御ほうもちのいそぎさせ給。所々にこれをいそぐべし。かの左兵衛督(註)の
このついたち八日より世中心ちわづらひ給志。おなじ月の十五日のあかづきがたに
うせ給にけり。おはれにいみじともおろかなり。かのありまへだにうしろめたう思
給へるひめぎみをみすてたてまつらん心ち。おもひやるまなくかなしき也けり。そ
の夜のうちに法住寺にわたしたてまつる。按察大納言(註)のこの君にさへをくれぬ
る事と。あさましう心うきとに。なくくよろづをきての給はず。『我こそこれ

は、據小本補

にかくはいはれましか。心うき事』と身を觀じおぼすもとはりにいみじ。ひめ君など返々たれもくいみじう思やりきこえさせ給ける。かくて枇杷殿の御はかうは。請僧には山座主心譽僧都。かうし十人のうちにまんよ僧都は^はいりたり。僧綱八人凡僧二人あり。聽衆十人あり。かくて廿一人の僧まいれり。宮の御まへは一品宮(璣)の御かたにおはしまして。宮のおはしましてころの母屋四間。みなみひんがしのひさしかけてまつらはせ給へりけり。との、御まへ(璣)は。東の北方によりたるつまどのもとにおはしまして。水のうへのわたどのを御やすみ所にせさせたまへり。との、うへ(璣)おはしますべかりけれど。おりしも關白殿(璣)のわかぎみ(璣)いたうなやませ給へば。いと口おしくえ渡らせ給はずなりぬ。女房はじめの日なでしこをいつゝきて。うへにおなじ色のうす物をりものをきて。さうぶのからぎぬすりもなり。寢殿のにしみなみおもてより。わた殿のにし對の東おもて南どにみなるたり。御すよりはじめ。御几帳さうぶのすそごにて。みなえどもかゝせたまへり。上達部は寢殿のみなみのひさしにおけます。殿上人は上達部殿のうしろにかうらんたるたり。僧綱はもやのひんがしによりて。南をかみにてにしむきにさぶらひ給。凡僧は又東のひさしに。おなじごと南をかみにてきたさまにならひたり。かくて五卷の日になりて。みなくねなるのうちたりをきて。うへにふたあゐのおりものうす物どもに。さうぶ

のい、小本作も

物、原作持、據小本改

い、原作み、據小本改

のも。なでしこのからぎぬ共なれば。あさひにあたりてかゝやきわたれり。所々の御ほうもちもてあつまれり。いみじういつしかとゆかしきに。殿ばらまいりこみ給て。ひつじの時ばかりにぞはじまりて。ほうもちめぐる。中務の宮(璣)参らせ給へり。はすのみをながくつらぬきたるさまにてもたせ給へり。その御つぎに關白殿(璣)かうのつぼもたせ給へり。内大臣殿(璣)老ろがねの水瓶に。くさぐのをいさゝせ給てもたせ給へり。女院(璣)より瑠璃の壺にこがね五十兩いれさせたまへり。頭中將憲綱の君もたり。あはだどの、君おなじさまなり。御ほうもち中宮亮右中弁つねよりのきみもたり。小一條院老ろがねのきんをせさせたまへり。右馬頭かねふさの君もたり。この宮のはうすにひあやのうちぎを僧のかずにせさせ給て。やむごとなき四位共もたり。一品宮(璣)の御ほうもち。わけさら。わけかいども。皆むすびぶくろにてつくり。えだにつけて藏人二人もたり。との、うへ(璣)のほうもちのふのけさ。民部大輔さねもとの君もたり。殿の御ほう物はきぬ甘疋をむらごのきぬにつませ給へり。僧のかずなり。内大臣どの(璣)宮の御ほうもちは老ろがねのふたのうへにませゆひて。なでしこをうへさせ給へり。春宮大夫どの(璣)老ろがねの法花經一部をもたせ給へり。中宮権大夫(璣)ひさげもたせ給へり。いとあひらかなり。中納言(璣)はうちわ。これよりほかは様々のものおかしければかゝず。ろの日の講師あさ座定基僧都。ゆふ座

りうせう僧都なり。さてともはてぬ。はての日はかきねの卯花を女房たち残りなく
おれり。もは薄色。うはぎはさうぶをぞきたる。それ又いとあかし。五卷の日は。なか
づかさの宮(殿)なを人よりことなりし御けはひを。東の對の女房達わびしうはづか
しげに思ひ聞えたりけり。其おりはさて後々にぞいひわはせわらひける。御八講す
ぎぬれば。みやのうちひごろこひしく人々思ひけり。女房さといいてかたへはさぶ
らひけり。かの法住寺には兵衛督(殿)の御事ども。たゞ大納言(殿)あつかひ聞え給。泣
泣おぼしいそぐもあはれなり。御法事の事なるとよろづにおぼしいそぐ。少將(殿)
はいまの別當右兵衛督(殿)の御むこなれば。そのゆかりに兵衛督をもあはれに思き
こゆべし。いみじう雨ふりつれくゝなるに。法住寺にてかのひめぎみ(公信)。

右、小本作左

おもひきやふぢのころもをほどもなくふたつかさねてなみだかけんと。

としのほどよりはあはれにおかしうの給へり。此六月廿八日法事などま給けり。七
月一日正日には法住寺にはかの中納言(殿)非違別當(殿)し給ける。人の申文うれ
へぶみなどありけるを。とり集めて紙にすかせて。法花經かゝむと覺しける紙に經
かき。又阿彌佛つくりたてまつりて。その經にぐして供養たてまつらむとおぼ
しをきてたりけるを。その日は源信阿闍梨講師にて説法せさせ給ける。あはれにい
みじうたうとかりけり。かうまもいみじうぞなきける。かくてそのうち姫君をば大

補には、し、據小本

納言どの(殿)むかへとり給てけり。わらはなる君(殿)は法師と覺しけれど。それもこ
の殿かうぶりせさせて。われまたてん』とおぼしける。いみじう哀なる事共おほか
り。『中納言殿をいまいなごて』など殿の御まへ申おぼしけれど。大納言おのが
のちをたへせ給なり。かゝるをきかせたまへば。この中納言(殿)のおはせむかたへ
いまはおのれもまからん』ときこえ給ひければ。『いまはさは其殿のの給はんばかり』
とぞ聞えさせ給ける。中納言(殿)のひめ君さへこゝにおはすれば。いみじうあはれな
る事どもおほかりける。かゝる程に。うち(殿)の御惱の事ありて。いと世中ものさは
がし。さまざまの御ものへけどもいみじうこはし。關白殿(殿)わたり式部卿の宮(殿)
さへいで給ひて。いとちそろしき事おほかる中に。春宮(殿)の御めのとなどの。貴布
ねにいのり申たるなどいふ事さへ御ものへけ申を。大宮(殿)いとときにく。かたは
らいたくおぼさるべし。いかにくゝと覺しなげきつれど。いみじき御つゝしみども
にてをこたらせ給ぬ。このはるより中宮(殿)もたゞにもおはしまさずとぞ世にはい
ふめる。とのちまへはいみぢうおぼされながら。ものおそろしう御むねつづれ。よ
もやまのほとけ神をたつねつゝ。いのりのまどもすすませ給ふ。さきくゝのよりも
このたびの御いのりよににぬまでおぼしませ給。いとことほりにみえさせ給。七月
には院(殿)に女御(殿)の御法事いそがせ給ふ。御だうには。八月十五日にはかんの

補わたり、據小本

おほし、大本作
おほく

との(璣)の御はてせさせ給。御てうどいもまろがねしてたほうの塔三尺ばかりにつくりみがきて。それをぞ申あげさせ給。おはれなる御事。はじめをはりまでおぼしたゆむことなくまはてさせ給ぬ。女院(璣)うちにおはしますありは。わか宮(璣)をば東宮(璣)おはれにうつくしうおぼしたてまつらせ給ひつゝ。いだきたてまつらせ給ありかせたまふ。う(璣)も院の御かたにわたらせ給ふありは。みたてまつらせ給べし。いとうつくしうおはしますを。女院またなきものにおもひきこえさせ給へり。ことしは内大臣どの(璣)の御くしげどの(璣)の御もぎ。内まいりなどぞ世にはきこえさすめる。人まりがたし。八月つごもりには。大納言(璣)の御もとには。ありし御事どもいみじうおはれにてすぎぬ。中納言のきみ(璣)をばさもやとけしきだちきこゆるところへおはすれど。たしいまはすべてともかくも覺しかはらで。たゞむかしのふしみのさとをのみわれまくをしげにおぼしたれば。大納言殿いとをろかならずかなしげに思ひきこえたまへり。こぞのなごりにていまにおはれなる事どもおほかる世中をぞ。いづこにもつきせずのみおぼさるべかめり。中宮(璣)はこのごろさへにいでさせ給べしとて。大殿(璣)の左衛門督(璣)の東院の御いゑにぞいでさせ給へければ。左衛門督は皇后宮の三條のみやへわたり給て。こゝをばつくりのゝまらせ給とぞ。

古今雜下歌云、
いさこゝにわが
世はへなんすが
はらやふしみの
里のあれまくも
おし 據小本補

榮華物語卷第二十八

わかみづ

かくて中宮(璣)神無月になりぬれば。左衛門督(璣)の家にださせ給ておはします。と
のゝ御まへ(璣)もひるぞ御堂へはおはします。よるは此宮におはします。うへの御ま
へ(璣)もやがておはします。さきくゝの宮々の御時の御いのりどものまゝにせさせ
給。こいたびは物のおそろしさゆゝしさそひておぼさるれば。いとことまざりよ
ろづにせさせ給ふ。さぶらふ女房だちの事にも。こなどはかくしからずまなした
る人は。たづねさらせ給て。この程は参るまじきおほせ事あり。内(璣)よりの御つか
ひよる夜なかわかぬもあろかならぬ御けしきまるげなり。かくいふほどに。しも月
になりぬれば。うちわたりのさまくゝの事ども。わかき人々は思ひやりいふめり。よ
ろづよりもおはします殿のせばければ。こゝらさぶらふ御いのりの僧なども。その
わたりの家どものほどひろきをしるさまにてこみぬたり。おほかたの御心に。
ともすればいならずくるしげにのみおはしますせば。殿ばらもまづごゝろなげにお
ぼしたり。まいてこの月になりぬれば。またせ給事そひておろしうおぼさるべし。
御めのとにおとなひ中人おほかり。この殿のうち。たしいまはこの御事より外の
事なし。女房達人あれず白きものどもいろざわへり。はかなくて月もたちぬ。十二月

ほ、原作は、據小本改

の、據小本補

一品、諸本此下有の字

と、小本元、當衍

に成ぬれば。たちぬる月にだにさおはしますべかりしに。あやしく心もとなさを覺しさはぎたり。ついたちもすぎゆけば。いとあやしくいかにとのみ覺しめす程に。十日のひるつかたよりれいならぬ御けしきなれど。わざともみえさせ給はねば。心のどかにおぼさるゝに。日くるゝまゝにぞまことにくるしげにおはします。このとらばらやほかの上達部もまいりこみ給。こゝらの僧共のこゑをおはせたるほどすべて物も聞えず。殿の御まへなやましくおぼさるれど（註）こゑもむまいらせ給。内より女院（註）よりの御つかひつゝきたちたり。近江の三位。宰相のめのとなどみなまいれり。いぬのときはかりにぞいとたいらかにせさせ給へる。いまひとつの御ことをのゝまりたり。よろづにその事どもをせさせ給。其後ありさまおとなきにてをしはかられたり。とのゝ御まへ（註）『たいらかにおはしますよりほかの御事なし。物のみおそろしかりつるに。いのちのびぬるこゝちこそすれ』とて。いとうれしげに覺しめしたり。うちにも（註）『きこしめして。』同じうは』とはいかてか覺しめさざらん。されどたいらかにおけしますを返々も聞えさせ給て。御はかしもてまいりたり。さきくは女宮には御はかしはもてまいらざりけれど。三條院御時一品宮（註）の生れさせ給へりしよりぞかゝめる。内女房などの『あなくちおし』など申をきこしめして。『こはなに事ぞ。たいらかにせさせたまへるこそかぎりなき事なれ。女といふもを』と』この事

ふ、據小本補

なき事、據小本補

み、原作う、據小本改
御いそぎ、據小本補
か、原作そ、據小本改

なりや。むかしかしこきみかどく。みな女帝立給はずばこそあらめ』とのたまはするに。かしこまりて候ふべし。つきくの御うぶやしなひなどもつゝきたちたり。關白どの女院七日の夜は十六日にぞおたらせ給へる。おほやけより昔れいのさほうに事ども参れり。まことや御めのとはおまた申す中に。まつどの、宣言のむすめ。出雲前司よりつねがめをまづめしたる。八日人く色くのそでもあらためたるうち（註）の女房達まいりたり。さまくの事ども。あらまほしく心もとなき事（註）なくせさせ給へり。女房まいりて。わかみや（註）のうつくしげにおはしますよし申せば。うへの御まへ（註）いつしかとゑみてきこしめす。みやの御まへ（註）はくちおしくもとおぼしめせど。まことにあさましきまで老ろうめてたううつくしうおはしますにぞ。げに御こゝろうつりていみじうかなしうまたてまつらせ給。御めのとわれもくと申せど。おぼしはとてめさず。日もはかなく過ぎて。十二月晦日になりぬれば。世のなかのいゑいゑたかきみじかきみなそいきみちたり。わかみやの御としのまさらせ給べき御いそぎも覺しめすに。夜のほどよろづかはりたるもおかしう。あらたまのとしよりわかみや（註）の御ありさまこそ。いみじううつくしうおはしませ。わか水していつしか御ゆどのまいる。よろづみなはるのこゝろつきて。そらのけしきもひきかへさまくにもものけさやかにめでたきに。枇杷殿（註）のみやにはけふ臨時客なれば。關

白殿(白)をはじめたてまつりて。よろづの殿ばらのこりなくまいり給に。御前には
 けぢかく。おかしき木もはなもみぢもなければ。うちつけのめなるべし。東の對の御
 志つらひわざやかにめてたきに。寢殿をみればみすいとあをやかなるに。くちきが
 たのあをむらさきにほへるより。女房のきぬのつま袖口かさなり。なをほかより
 にはほひまさりてみゆる。おほかた此宮の女房は。きぬのかずをいとおほうきさせ
 給へばなるべし。中門のわたり東の廊のつまどなどのみとをしに。さるべき隨身な
 どのみやらるゝに。この殿ばらの座につかせ給へる程など。きたなげなき四位五位
 六位などの様くとりつゝきもて参るありさま。おくつかたの御屏風などまでみる
 にも。まことに繪にかきたるありさま。いづこかたがひたるとぞみゆるに。わかぎ
 み(箱)のみすの内よりいで給をみれば。紅梅の御ぞのあまたかさなりたるに。おなじ
 いろのうきもんの御直衣き給て。御まへのかうらんにをしかりておはすれば。關
 白どのみたてまつらせ給て。『やゝこち』と申させ給へば。たゞならずさしあゆみて
 まいり給。御ぐしのいとふさやかにてかたわたりすぎておはす。ひるななどにぞに
 させ給へる。とのばらなどみあそびうつくしみたてまつらせ給。みやの御前(理)は御
 覽じやらせたまひて。『とちごどもははぢてあまへぬべき程なるを。よくも』との給
 はず。因幡のめのとのいと物はづかしう。うるゝしき心ちして。まばゆくあふぎは

ら、原作し、據小
 本改〇など、據
 小本補
 が、據諸本補

幸、諸本作啓

なたぬに。きみの御ありさまみたてまつりてぞ。さしいでざらましかばいかにくち
 おしうとみやりたるまみ。げにこつくしとみたてまつりたるもとほりにみゆ。こと
 しの宮(理)の御まかなひは。内侍のすけのつかうまつり給へば。宮の大夫(理)よりは
 じめたてまつり下部にいたるまで。いそぎに思ひてやむ事なげにたてたり。かくて
 れいは拜禮あるに。ことなしびにて殿ばらまかて給へば。院(理)のつちみかど殿にお
 はしませば。あす行幸行啓あるべければ。其ことの心あはせしなるべし。又の
 日のたつるときはかりに行幸ありとのしければ。年のはじめの事にて世の人みさ
 はぐ。とのうちのありさましつらひ。なをこはいかなりける勝地ならんとみえ
 たり。かくてやうくおはします程に。京極大炊御門といふ程に火いてきてのし
 れば。いと心あはたしうて。なにのぎしきもなくおはしましつきぬ。れいの寢殿
 のみなみのはしのまに御輿よせとありさせ給ぬ。きけば四五町やけにけり。れいの
 法興院もやけぬれば。殿の御まへ(理)いみじくおぼしめすべし。此ものみる人ぐの
 中にも。いゑやけてはしりさはぐもいとおかしげなり。院の中いみじうあはたし。
 とばかりありて東宮(理)おはします。その程の事どもあやしくものさはがしうて。
 こまかにえかきつゞけず。みかど(理)春宮(理)さしつゝかせ給へるほど。女院の御
 ありさまきこえさせんかたなし。殿の御まへ(理)のびてみたてまつらせ給て。ゆゝ

東宮殿、諸本此下有の上二字

せ、小本元、當衍

しきまでおぼさる。歸らせ給程に院がたとの家司など。皆さま／＼加階しよろこび。さま／＼めてたうてかへらせ給ぬ。かくてこの月のつごもりは。わかみや(孫)の御五十日なれば。れいのさま／＼めてたき事どもあり。うちの殿上。東宮殿。枇杷どのなどにみなもてまいりわかたせ給。めてたき事共ありけり。けふあすはつかさめしなれば。世のいそぎにて過もてゆく。二月にも成ぬれば。さま／＼神わざどもしげくて。なにもなくて過もてゆく。中宮のわかみや五十日打すぎて。いみじくうつくしうおはしますを。さぶらふ人々これをいただき奉ら「せ」ばやと思べし。しろくおはしますさまは。ゆきにひかりをそへたらんやうにぞおはします。かくて二月十九日ばかりにきけば。皇太后宮(孫)の一品宮(孫)の春宮(孫)にまいらせ給べしといふ事世にいできて。さるべきえんにつきて。人々まいらんなど申さすれば。ほかはしらす宮のうちにはたゞ今さる事なければ。ものぐるをし。いかなることにかときこしめしながら。人々はいとおほくさぶらへば。いまはおぼろげならざらんは。上臈なりともとぞおぼしめしたる人。そのほどになりぬれば御らんじて。御心ゆかぬもいとあしうてこそはとめさせ給めれ。たのめてはをかせ給へれど。きはやかにめさず。かくて御まいりはうちにや東宮にやと。よろづに申のしるめれど。宮のうちにはまたさる事もみきこえぬほどに。三月にもなりぬるにぞ。宮の内に此事ほの聞ゆるに。女

大夫、此上或脱權字

う、原作そ、據小本改

せ、小本元、當衍
かたへを以下
四百九十餘字
據小本補

房だちうちむれるてあらましごとをいひ思へり。きのふのけふ御堂(孫)より御せうそこまげかむめる。關白殿(孫)參らせ給。中宮の・大夫(孫)もこまやかに申させ給事共あべかめる。はじめもこの御事どもにやとをしはかり聞えさせて。いつしかと心もとなく思ひつる程に。三月六日けふなんよき日とて。關白どの(孫)參らせ給て。『此御事どもさだめさせ給ふべき』とて。みやづかさどもまいりあつまる程に。ひつじの時ばかりに。關白殿まいらせ給て。御視めして『けふはたゞけしきはかり』とて。事共すこしかきつけて出させ給ぬ。とりのときばかりにぞ。御堂よりけふよき日なればとて。きぬあやなどもて參り。けふのうちに宮の内の人々／＼にくばらせ給へば。『あなかして。よるをひるにいそがせたまへ。廿三日なればのこりの日も侍らぬなり。人々のからぎぬうはぎのおり物どもは。あやありめしておほせ侍ぬ。たゞこの事どもをとく／＼と申させ給へば。さるべき人々／＼にみなくばらせ給つ。うち物などをいかでしあへんとすらん。をり物も給はせむをのみきるべきにもあらず。いかにせまし。日のちかくなりぬる事』とまづ心なく各々いそぎあもふ。日ごろまいら「せ」ん／＼とあない申つる人々／＼もかたへをぞめしたる。故帥源中納言のむすめあまたあるを。一人／＼めすに。たいふの中將「さらんえきり侍らず」とけし給へば。御堂に聞しめして「さるべきさまのものをつかはせ」と申させ給へれど。猶も參るまじ

きよしをけいし給へれば。殿のきこしめして。『さてはすべて宮の内によせさせ給ふな。此わたりにもよせ侍るまじ』とて。實基の君かしこまり給ぬ。かうて御堂よりはさまくの物をとりもいれあはずはこひ参らせ給ふ。其御せうそくには「なほくたゆませ給ふな。此亂れ心ちのみぞよりはいみじう苦しうさぶらへば。参りて申さぬがいとくちをしく心もとなきと。たゞこの御事によりいまんでいきて侍るこ。がの日まで侍んの心にてなん。あかぎみあが君いそがせ給へ」とある御せうそくもきりなるを。宮の御前ゆしくおはれなる事に聞し召せど。ものゝはじめと忍ばせ給ふ。されど御目に涙うかせ給へり。うけ給はる人くも志のびあへぬけしき共也。かゝるほどに大宮の御前あやしうなやましうおほされて。ともすればうちふさせ給ふ。御おもてのわかみくるしうて。御あしたかかせておきふさせ給ふ。心えぬこちかなとのたまはせつゝおきふさせ給ひて。この御事をあつかはせ給ふ。御風にやと朴きこしめさせなどすれど。あなじ様におはしまして。かくて四五日にならせたまひぬ。關白殿まいらせ給へるに。『など御氣色のくるしげにおはしますぞ』と申させたまへば。内侍のすけ御前にて『此四五日にならせたまひぬ。御かせにやとて

朴なときこしめせど。あこたらせ給はず』と申させ給へば。『いとふびんなる御事にこそ』とて。さぶらひめして守道めしにつかはすべき由仰らる。さて参りたれば。かうかうおはします山をとほせ給へば。『御氏神のたゝりにや。つちのけ』など申せば。御まへにて御被つかうまつる。すべてものを露きこしめさぬ也。『いと折あしきわづかな』とて。御はらへ日に二三度つかうまつるべきよしの給はず。さて御堂に参らせ給て申させ給へば。『いとふびんなる哀也。なをくさるべきさまに覺しをきてよ』と申させ給ふ。日ごろ一品のみやの御かたの御修法。仁和寺の成典律師のつかうまつる。大みやの御祈御修法あべうおぼしつけをきてさせ給。宮の御まへもあり志もこそあれとおぼしめせば。志のばせたまへどいとたえがたげにおぼしめしたり。さりとして此御事のとまるべきにもあらず。御堂にもこそよりなやましげに覺しめして。この御事共をよそくきこしめすを。おぼしなげかせ給。成典律師僧都になりて。『此御いのりのちりふしきもよろこびつかうまつりたる事やまくらまるし』などよろこび申給ふ。宮のうちいと心おはたしういろぎたちたり。つねの御いそぎだにいかいある。まいてこれはちいさくおはしましより。さらばと御まへにも御めのとだちもの給はせきこえさせし事なれば。たえんにまたがはんことをたれもいひいそぐへし。されどけしからずすべきにもあらず。たゞこれのしやうぞくをめでた

くすべきなり。みくだりをみないそぎたり。おとなわらは下づかひのかずさきく
 の御まいりのごとし。日のちかうなるまゝに宮のうちなりみちたり。かゝる程に。十
 七日よき日なりければ。春宮の御使まいるべしとて。よろづの御よういことなり。御
 まへの遣水さへ心ゆくさまにすゝしげ。關白どの(璣)うちの大内殿(璣)など。みな
 まいりあつまらせ給て。待むかへさせ給。さるの時にぞ参りたる。侍従大納言(璣)の
 御子。少將行經の君ぞまいれる。東の廊より寢殿へまいる程のけしきよういことな
 り。大納言よくをしへ給へりとみえたり。御文やなぎがさねの紙にて。柳につけさせ
 給へり。みるより心ことにめでたうみゆるも。うちつけのめなるべし。うちの心まり
 がたし。南おもてのひんがしの二のまに志とねまけり。關白殿などはすこし西によ
 りて。ひんがしむきにおしします。みすぎはめといまるまでみえたり。かくて御めの
 とだちはつまどのかたに。こと女房だちはみなみおもてに給へば。れいのさほう
 の事どもにて。くらき程に御迎給て参りぬ。其後は日々に御つかひ参る。とのうへ
(璣)などはこのごろはおはしまして。おなじ御心におぼしいとなませ給。春雨さへの
 どかにふれば。なに事も心もとなし。よろづは御堂にみなをきておほせらるれば。た
 だこのみやには女房のことをのみいそがせ給に。それだにをのくいろげど。猶志
 づ心なげにおぼしめすに。御なやみさへかゝればいと志づごころなし。けふあす

は、諸本作つ

ぎ、原作さ、據
諸本改

になりぬる御いそぎにとまのび覺しめすに。なをこの御心ちのいとわりなくおほ
 しまぎれぬさまなり。御だうにはこの御いそぎも。宮の御なやみも。さまくによそ
 にうけ給事。やすき心もなく覺しめすし。殿はかねての御さだめにて。うちにはや
 がて大宮(璣)もそひたてまつらせ給べく申させ給しかど。みかどの御母后。妻后をは
 なちては。こと后のおはしますやうなかりければいとくちおしうおぼしめす。廿三
 日のつとめてに成ぬれば。さるべき人く御志はらひに皆あかれ参る。こうきてん
 に御すぐしたれば。さしのぞきみる人々もめもかみやきめてたしとおもへり。宮に
 は女房達のけさうをみがきさへく。御めのと達もこのたびの御いそぎを世のたいじ
 におもへり。ひるつかたに成て。關白殿まいらせ給て。さるべき事どもをきての給は
 す。こと殿ばらもおなじ心にたちさはぎ給ふ。御堂よりも御つかひまきりてまいり
 ちがふ。かくいみじきに。女院(璣)中宮(璣)よりの御つかひまいりたりけれど。あさ
 ましくさはがしきまぎれにまいりにけり。くちおしくおぼしめさるべし。女院より
 の御装束は。やへぐくらをえもいはずにほはせたまへり。御あふぎたき物などこま
 かなり。御ころも箱などわざと本文をかゝせ給へり。中宮(璣)よりは藤をぞむらさき
 にこくろすくちりかさねさせたまへる。小一條院。式部卿(璣)中務宮(璣)よりも。御あ
 ふぎかすもまらずめてたうせさせ給へり。關白殿より童の装束めでたくせさせたま

へり。くれなるのあこめ。もえぎのそりものあこめ。やまぶきさくらのかさみ。みつがさねのはかま。あふぎまていみじくせさせ給へり。まもつかへ四人。内大臣殿さまぎまのまぬどもに。あをいろにやなぎがさねのからぎぬものありさま。れいのむらざりよりも心ことなり。かくて日くる程に。とのばらの御いだしぐるまどもまいるつどひてのゝある。一品宮(孫)いみじううつくしげにおはします。御方違におはしますとぞまらせ給へりける。大宮の御ま(孫)のおはしまさぬを。ひとりはいかてとうごがせたまはねど。よろづきこえさせなぐさめ給。御車にはみなみおもてのみはしのまによせておはします。大みやあはれにうつくしうみたてまつらせ給。うへの御まへもあはれにみたてまつらせ給。御堂より『いかにく』と御消息しきりにあり。女房くるまなどのありさまもひやるべし。おはしましてそりさせ給ふほどのぎしき。心ことにおとろく志。御て車やなにやとあるほどに。や、夜ふくるほどにねうばうのあるほごいとよそほし。さていつしかとくのぼらせ給べきよし御つかひまきりなり。かくいふ程に。むげに夜ふけて關白どのせちはそのかしたてまつらせ給程。わが御むすめなどのやうにあはれにみえさせ給。『御堂に我をあはれともはん人々。わがかはりにこまかにつかまつり給へ』となくくきこえ給へば。いづれのとのばらもいと心につかうまつり給へり。關白殿殿御手とらへてゐてのぼ

そ、恐當作う

りたてまつらせ給へり。のぼらせたまへど。動きもせさせ給はねば。うへいでさせ給て。御帳の内にかき抱ていらせ給ぬ。いとうつくしうおかしき御けはひを。かひありておぼしめさるべし。御供の人々。やがてさるべきどもは。みなうへにさぶらひ給。のこりはありぬ。鳥まばくなけば。御むかへの人々殿ばらつききて参らせ給へど。とみにちりさせ給はず。あかうもこそなれと思ふほどにありさせ給ぬ。枇杷殿には宮(孫)の御心ちさへあしうて。さまくおぼしみだれて。御とのごもりいらざるなりぬ。うへと御物がたりしてあかさせ給へり。まいらせ給てのち。こよなうのどかになりぬ。うちには日さしいづる程に御つかひあり。権亮よしなりのきみまいれり。御几帳どもふぢのをり物みへにてたてなめたり。御丁もおなじ色成けり。なに事もさまざま同じ事めてたき御有さまなれど。なをこのたびは今すこしけだかさまさりてぞみえ給ける。さるべきにや。よろづあどろくしきありさまにぞ。弘徽殿の東おもてなれば。みすのきはの女房のうちいて共。まねびやるべきかたなし。御めのと達。上臈だちなど。そはきは皆ふたへ織物色々様々也。すべてよろづいとめてたし。御門の御むすめかゝる御ありさまは。故朱雀院の御むすめ(孫)の冷泉院に参らせ給しこそはかゝるたぐひなめれ。それはいたうあふよりたるうちに。御門もれいにおはしませすなどありしかば。いと思ふさまにもみえずぞありし。此御ありさまはいとい

めてたしや。關白どのこと殿ばらみなおはしまして。御つかひいみじくえはさせ給。此御使のきみも。もとよりさけのむ人なれば。いみじくあるさせ給程に。むげにえひたり。みちの程などめとめられたり。いたうわかみてまどけなげにみだれ参りぬ。其事ども御まつらひなどを。大宮御らんせぬことを。とのばらいみじく口おしきこととに覺し申させ給。まきりてのぼらせ給御使隙なく奉らせ給ふ。いたはりたるとのやうなれば。御心ざしふかげにみえさせ給ふ。されば御堂にも宮にも。かひありうれしとおぼしめさるべし。宮よりも御堂よりも御装束共もてまいる。かくて後四五夜ありて。のぼらせたまはんとてする程に。俄に御心ちくるしうせきせ給へば。關白殿つとおさへ奉らせ給て。いみじうおぼしたり。うへにも御せううこいかにくとしきりなり。のどまらせ給へれば。なをくとのぼらせ給ひぬれば。うへいかにくとおぼしみだれてまいらせ給へれば。宮いかにくといみじうみたてまつらせおぼしめしたるに。よろしくおはしましつれど。まだいとくるしうせさせ給へば。關白殿ゐておろし奉らせ給つ。いとくるしげにおはします事を。御堂にきこしめして御いのりさまく也。御物のけにやとぞみえさせ給。うへより御めのを達などいかにいかにとてまいりあつまる。曉がたにぞよろしくならせたまへる。枇杷どのには。わが御心ちよりもいかにくと覺しめすに。おこたらせ給へるをうちにもとにもうれし

きことにおぼし聞えさせ給。ようちかくおりのぼりせさせ給へば。いとくるしくおぼしめして。今はこの御かたにおはしまし。御殿ごもるべう承香殿をしつらふ。程もなき御心もうへの御いそぎに御堂にもびは殿にもいそがさせ給。四月二日東宮(繼末)の若宮(繼若)御はかまぎのこと。女院(繼)いそがせ給なれば。此御方よりも宮の御装束たてまつらせ給はんとて。びは殿にはいそがせ給。四月九日にぞうへの御かたへわたりはじめさせ給べかりける。御ころもがへの御几帳。みなうの花のちり物みつがさねにてせさせたまへり。女房のつぼねほそ殿や。つぼねくのありさま共もこのみことさいめきたり。女房だちなてしをぞおりかさねたる。その日ぞやがてめのとだちのをくり物どもさるべきさまにせさせたまへり。つねの御ありさまに又きぬあやなどをぞえさせたまへりける。うへの女房。女官。しもづかへなどまでの裏。さきくの御ありさまなるべし。殿ばらこの比はよるひるわかずさぶらひ給。

榮華物語卷第二十九

玉のかざり

けふはみなさべきさまの事ども。をしはかりこまかにつかうまつらせ給。さてわた

心、諸本作こ

らせ給て御覽ずれば。めでたさはめなれさせ給へる御心なれど。なにごとくまたその
 のありの事としたてたる心となるわざなれば。いとめてたく御覽せらる。一品の
 みや(彌平)はみじかき御几帳を身にそへさせ給へれば。あらはならねどまたかくれ
 なし。うつくしうさゝやかにおはしましてさしならばせ給へる。繪にかゝまほしく
 みえさせたまふ。ことしは十五にやならせ給ぬらん。東宮(雅)は十九ばかりにや
 はしますらん。いとあらまほしき程の御ありさまなり。きのふよりやがてこの御方
 に御とのごもれば。おまへの御あかづきもくるしげにおはします。女房もわりな
 りつるに。いとちもふ事なきよのありさまなり。をのく我まゝにみがきたてし。
 たつるときばかりにこそおまへにいつめれ。御堂にはたかゝる御ありさまをしらせ
 給つれば。萬こまかにあはれに心しらひ参らせ給もあはれになん。びはどの(雅)の御
 心ちいとくるしげにおはします事いと申しけれど。明尊僧都御修法三七日つかま
 つり給へれど。おこたらせたまはねば。ならへさるべき人く二たんみたんつかま
 つり給に。さばかりくるしげにおはしますに。ちからをつくしかち参るに。さらに御
 あくびをだにせさせ給はず。さるべき御まつり枝かずをつくさせ給。かゝる程に。ま
 つりなどすぎて心のどかに成ぬれば。枇杷殿にはうちの御ありさまのおぼつかなさ
 をさへくるしうおぼさる。宮の御装束女房の事などまけりおぼしあてがう。殿の御

ん、諸本作れ

まへもれいにもおはしますさぬうち。御堂の事や十齋の佛の御ことや。さまぐい
 みじうまづ心なく覺しめさるべし。宣耀殿の北をもては弘徽殿のみなみ面なれば。
 うへはつねにこの御かたを御らんじのぞかせ給べし。むかしの御もといをおぼしわ
 すれぬにやとぞ。若みやの御ゆどの事きこゆる。御聲もいとちかき程に。へだてな
 きもおかし。枇杷どのは内の女房のまげくまいるにぞ。よろづきこしめしなぐさ
 めける。殿のうへもまはしばまいらせ給て。かゝる御心ちをいかにおはしますらん
 とのみぞわりなき御心ちもすこしおぼしなぐさめさせ給。すべてこの御心ち月日の
 ゆくまゝに。いとどのどかにつれなき御有さまいとおそろし。さは又はなにごとをか
 はとて。れいの御讀經にまた上ずどもめしてはじめさせ給。壽命經。かのう經。藥師
 經などの御讀經かずをつくさせ給。東宮にはありしもあれおぼしなげかせ給て。わ
 ざとの御使つねにまいる。一品宮(雅)は覺しめしなげきたる事かぎりなし。何事も物
 のみはづかしうおぼさるゝこそえてこの御こゝちをいみじきことにおぼされたり。
 びはどのにはこのごろの三井寺のまんま僧都。めいゆう僧都しやくせうせうなど御修法
 つかうまつる。かゝれどあるしといふ事夢にみえさせ給はぬことを。うへのおまへ
(雅)こゝろほそくおぼしなげきたり。五月四日には御堂に。阿彌陀堂よりは東。大御
 堂よりはにし。さゝやかなる御堂十齋のほとけ。月ごろみがきたてゝわたし奉らせ

給。れいのさまぐの御まいあり。僧達さまぐのことし。此宮の御心ちさらにおこ
 たらせ給はず。世の中のきこえあり。あるしありといはるゝ人々も。かううちへ御
 修法つかまつりたり。御まつりはらへかすをつくせど。おこたらせ給けしきみえず。
 一品のみや(彌)この御けしきにいでんぐとの給はすれど。見たくとまばしぐと
 きこえさせ給程に。むまの入道の君(彌)は。はじめ山に無動寺におはせまかど。後
 は大原にてすむし給へるを。月比ものを露まいらざりければ。中堂に参らせ給て。二
 七日籠りて。『たぐいさまにをつけさせ給へ』と申させ給ければ。なに事ともなくた
 だ志にまうけをせよと夢にみ給ければ。無動寺におはしきまして。權僧正山の座主(彌)
 に『かうぐの夢をなんみつる。さればいまはかふなり』とのたまはすれば。僧正『な
 どてか。夢はさみゆればいのちながしと。ころ申せ』と申し給ければ。『いのちなが
 らんをうれし。ながらへんをうれしと思は。こそあらめ。たぐ佛のつげさせ給つる
 うれしき也。さてもほかにまかりなん』と聞えさせ給つれば。僧正『などてかくてこ
 ろおはしきさめ。げに昔よりこゝにさる事はべらぬ所なれど。おはしきしつきて又
 ほかへおはしますべきにあらず。たぐ御念佛をま心にせさせ給へ』とすゝめきこえ
 給。又懺法のことたえずつかまつる。御堂にはこの御事をきかせたまへど。宮の御心
 ちにだにえ参らせ給はねば。まいて山までの御ありきおぼしわかぬに。さまぐに

うれ、諸本作よ

き、諸本作、

中宮、諸本此上
有眷宮二字

いひで、諸本此
下有ッ字

れ、按諸本補

覺しなげかるべし。かくおぼつかなさを感じつるほどに。五月十四日にうせ給ぬ。い
 と哀にいみじき御事也。たかまつ殿(彌)にはきこしめしてたぐ思ひやるべし。『御
 法師なりのときだにいみじかりしに。あさましうかなしともよののねなり。院(彌)
 の女御の御事をだに。ひまなく覺しいづるに。又こはいかに世かうなりぬるにこそ
 とゆゝしうおぼさる。御堂におはれにみずなりぬる事。すけのありつらし心うし口
 を志と思ひしあしう思けり。かくひさしうあるまじかりける物を』と。きしかた行す
 ゑおぼしつゝけらるゝ事もゆゝしければ。たぐ御むねのみふたがりておぼさる。こ
 れにつけても宮の御事いとちそろしうて。いまやぐとのみ御心にかゝりてたへが
 たくおぼさる。殿ばらなどもいみじうあはれにおぼしなげかる。中宮の大夫(彌)。大
 納言(彌)など御とぶらひにみな山へのぼらせ給ぬ。よろづあはれなるよなり。女院
 (彌)などもいみじうおぼしめしなげく。枇杷殿には『あなかしこ御まへに此事聞え
 せてまつるな』とあれど。けしきを御覽じて。いとあはれに心ほそげにおぼさるべ
 し。たぐつねの御事にはいかで。あらんとすらんとの給はせけるは。御めのとのない
 しのすけの事なりけり。それをうけ給てないしのすけは。ものおぼえずあるべきさ
 まにもあらぬさま也。びは殿には御ものけを人のがりうつせど。其程御心ちよろ
 しうもならせ給はず。唯同じ事つれなくおはしますに。いとあやしき事也。御物の

さし、賭本此下有つゞき三字、恐是にさたる、賭本作はさなる

けはほり河のおと(堀)の御けはひに。女御(理)さしつゝいきいで給て。いひつゞけ給事どもいとあそろし。又かんの殿(理)の御けはひにやとみゆるもさし・申させ給へれば。うへの御まへ(理)あはれにいみぢうなかせたまふ。それはとかく思聞えさせ給にあらねど。道ことにならせ給ぬる人はかくのみあるにさたるぞあはれに心うきや。かくいふ程に。一品宮(理)おぼつかなきをおぼしなげかせ給。内にもむまの入道の御ぶくさへおはしますすべければ。六月二日にてさせ給へければ。女房のなりあざやかに。びはとの御まへ(理)御まへつらひなです。もとすませ給し西の御方はさま／＼方々の御讀經所なれば。このたびは東のひさしにもやの大床子たてたるをぞかへまつらはせ給へり。さて宮(理)いでさせ給て。いつしかとみたてまつらせ給に。かなしくてなかせ給ふ。たにごともおぼいたれどえきこえさせ給はず。との御まへもいかにいかにと日々にてさせ給へどを參らせたまはず。禪林僧正(理)まいらせ給へりしかど。其志るしとみゆる事なきぞ。かつはいとあさましき御心ちなるや。宮のうちのこととはさる物にて。よもの山／＼寺／＼かすをつくす御いのり。志るしみえぬいとこころうし。六月十六日の程の月あかきにぞ。殿の御まへまいらせ給へる。御物のけよりうつしてのしれば。『なごてか。こらの年比たのみ申たる佛經さりと』などたのもしげにの給はせて。かぢまいらせ給。哀にかなしき事かたみにおぼすべかむ

よ、賭本作が

との御まへ、或衍

めれど。宮いとくるしうおはしますと。いとなやましき御心ちにて。はかく／＼志うきこえかけさせ給事なくて。こよひはとく／＼まかて。今又まいらんとていでさせ給ぬ。此ごろきけば民部卿(理)ひ比いみじうわづらひ。出家し給ぬと聞ゆるも。殿の御まへはいとあはれにきこしめして。との御まへいみじうおぼしめすべし。月比百鉢の釋迦つくり奉らせ給へるいでき給へりとて。此廿一日にぞわたしたてまつらせ給。藥師堂よりはとのはし。大御堂より東にひわだぶきの御堂つくりさせ給へり。なか三間はたかくあげ。南東三間は廊づくりにぞつくらせ給へる。その日のつとめてに成て。あめふりかみなりて。空のけしきむづかしげなり。たつるときばかりになりぬれば。空はれていとうら／＼かすぎて。あつくわびし。世の人れいのこみの志りたり。中尊はみな金色にて。丈六にておはします。いま九十九鉢は。等身の佛にて皆金色にぞおはします。されば人のまいるほどおはしませど。ひろき御堂の程はいつづむつばかりのちごのゐたるたけ計にぞみえさせ給。丈六ちからぐるまと云に。さるべきかまへをしておはします。請僧みな威儀いつくまうしてまいりたり。九十九鉢はたごしといふ物にのせたてまつりて。あをく裏やうしたるきぬはかまきて。四人づ／＼持たてまつりたり。御堂の池のうへに。佛のかげどもうつりて。またあらはれ給へる佛とみえ給へり。かぎりなくたうとし。殿のきたのかたは。五大だうのたつみ

のすみのかたにみすかけておはします。女院とのうへは。薬師の北の庇ににしかけておはします。關白どのをはじめこのとのばらは。やくしだうの東の高らんの志ものつちに。わらうだまきてまだいなみるさせ給へり。みなうすにびの御なをしさしぬぎにておはします。馬入道の御ぶくとみえたり。ほとけおはします程に。このおまへ(璽)ありさせ給て。をがみ奉らせ給へば。殿ばらおなじことまよりよりてをがみ奉らせ給。かくて佛中のまのたかきに中尊おはします。其御そばに十弟子などり。にわうなど立給へり。そばのみじかき廊どもには。十九躰皆かさなりならばせ給へり。皆百たいの御まへ(璽)にぶぐすへて花たてまつり。十弟子のさまさまの心ちども。そのあり思ひやられてゑましくもたうとくもあり。迦葉のくちのうちにはゑみをふくめる程こそをかしけれ。舍利弗はなをなにながはずやせたまへり。ふるなこそわがさまよげにみえ給めれ。堂莊嚴れのいとめてたし。かくて供養はのちの日とおぼしをきてたり。さて後にぞ枇杷殿に心のどかにいていらせ給。このおはしますおりに。御こゝちよろしくおはしますせば。それをうれしき事にておはします。いとたのもしくつねに護身參らせ給。御修法このごろは三四壇つかうまつり。あめの僧都などもまいれり。れせう阿闍梨などもまいるに。御物のけたいらぎたるさまなれば。つねにめしきはぐまてさくせうといふ人御ものけなどあらはしたりとて。

十九、諸本此上有九字

し、諸本作ま

院、諸本此下有に字

殿のおまへ(璽)「是はをこなひいみじうすときし物なれば。かならずみるしあらんとてわざりになさせ給。」この御心ざしはさくせうのさいはひ也けり」と世の人申める。わかぎみのみやかくておはしますせば。世の中いとたよりなげに覺したるも。いと心ぐるしくおぼされて。つねによびたてまつらせ給て。御くだ物まいりかきなでさせ給て。哀とうちの給はするは。えみやはてざらんとおぼしめすなるべし。わかぎみもいみじうまめり給へれば。いと心ぐるしうて。御めのと殿に(乳母)「この比ばかりむかへたてまつらせたまへ。御ものけのちりたるもあそろし」と聞えさせられたれば。げにさもとおぼして。七月十余日に三條院・むかへ奉り給。「おこたらせ給はら參らせん」と申させ給へば。御まへうちうなづかせ給。いなばのめのと人わらはれにやと人志れぬ心のうちには願たつ。いづれの君も。御めのと共のこれをつくとももひ申たりしに。このきみのわたり給へりしかば。やすからぬことはいひ思たりしものをとおもふにわりなかるべし。くるしうおはしますと。御ぞなどのことおほせられてきせたまつらせ給ふ。うへの御まへ(璽)も宮にのみおはします。たゞ御むねのみふたがりて。よろづゆしうのみ覺しつゞけさせたまへば。いかでかうおもはじとおぼしなをせど。猶いとわりなくのみおぼさる。八月にもなりぬ。つき日のゆくもまらせたまはぬ御有さまなれど。あはれに過もてゆく。かくてのみやはとて。御堂の五・堂

五、諸本此下有大字、恐是

にこもらせ給て。御修法せさせたまはんとおぼしの給はず。その御堂のきたちもてに。ひさしきとせ給べきさまによろづつくりのゝまらせ給につけても。いとあはれなり。東宮よりは。日々に御つかひまいる。中宮(璣)女院(璣)いみじうおぼしなげかせ給。この御心ちは三月ばかりよりなれば。此月はむ月にならせ給にたり。露ものをきこしめさねば。今はたゞかげのやうにおはします。御心もちすこしさはやかせ給へば。御ゆ殿とあるをりは。かなへ殿いみじうよろこびをなしてつかうまつるも哀也。女房たち侍ども、やすきいもねず。我もくときほひつかまつりて。かくありありていかに人志れずうちかたらひ。なみだをのごひつゝありきあへり。よるもみかうしもまいらねば。やがてすのこになみみて。かうらんにせなかをあてし。それをやすまりにねぶりあつまり給程。まことにこゝろぐるしうたへがたげなり。内のおほと(璣)はとし比つくらせ給へるあたらし殿にわたらせ給て。るごもり給へりときこゆ。八月十三日。御堂にこもらせたまはんとて。女房のなりつくろはせ給。この御なやみをこたらせ給は。十月ばかりに御まいりあるべしとぞある。その日になりぬれば。さるべき御調度共もてはこびまつらふ。よさらに成ぬれば。女房あざやかにまたてゝまいりあつまり。一品宮さまんいろにくちばの御ぞなどたてまつれり。御まへにはまろき御ぞふたつみつ奉りたるに。御いろもおなじやうにて。たゞひ

ゆひ、諸本此上有御宇

た道にまろうちはしまして。御ぐしはをしくだしてゆはせ給へるまゝに。ゆひめ程はみだれて。それより若もはつゆみだれさせ給はず。こよなくながくみえさせ給は。『かくくるしながらもをひさせ給はんめり』と有がたくみえさせ給。さて渡らせ給て。五大だうのひんがしのひさし。北あもてかけておはします。殿のおまへ(璣)はこの同じみだうのいぬるのかたの間におはします。みやのさぶらひには。おほ御堂の北のひさしにへいまんひきてぞまたる。御修法五だんはじめさせ給へり。關白どの(璣)内の大殿(璣)の御前。うへの御まへ。宮の大夫(璣)とせさせ給なりけり。かくておはしませど。二三日に成ぬるに。御物のけ露きこえず。これをいとあさましきことにとのゝ御まへも僧たちもの給はする。ともすればきえいらせ給へば。僧達もあつまりて加持まいれど。あくびをだにせさせ給はず。御物のけのみなさらにたるかと思へけれど。御心ちはおなじ様也。權僧正(璣)などは。水をむすびて石をうつらんやうに。人のみぐるまうとておなじうおはしますに。いと心うき事をのゝなげき申きこえ給けり。さるはこの廿三日のわたり給へる百鉢の釋迦の供養せむとて。おほくの法服をまうけさせ給ふ。やがて御八講と覺しをきてさせ給て。法服をまへまうけさせ給へれど。この御なやみにさはらせ給ふべきことを殿のなげかせ給へば。宮の御まへ』などでかといめさせ給はん。心ちはれいのこと成て侍れば。それまでねん

の給はする、原作給よる、據諸本改

か、原作、據諸本改

じてこそはすこし侍らめ』と申させ給へは。殿『おはれにうれしうもおぼせらるゝかな。かくの給はするに。佛此御心ちけふあすのうちにあこたらせたまつり給へ』と。御ずいをおしもませ給てねんじ申させ給。さて此ことを覺し急がせ給。『所々の御ほうもちも。れいのことくゝ志からずうるはしきさまに』とおぼしの給はず。其あかきづに女院わたらせ給て。薬師堂の北のひさしにぞおはします。一品宮(璣)うへのあまへ(璣)たつみの方へおはします。みや(璣)のおはしますほど五六間わたるを。宮の御まへよくるさざりいでさせ給へれば。あさましうおはれにうれしうみ奉らせ給。ほとけの御志るしとみたてまつらせ給。さてこと始りぬ。御佛供養やがて御八講なれど。講師だちことくゝなし。たゞこの宮の御なやみのよしを。返々もこゝろをとなへいのり申給。れいのみな百僧なり。法服せさせ給。百躰の釋迦の一ねんのゆへに御いのちをのべさせ給とも。百年はのびませ給べしなど。おはれにたうとくかなし。柱どもには。法花經の心をみなゑにかゝせ給へれど。おほかたのそうだちも。たゞいまはこの御事のみ心にかゝりてまつこゝろなげなり。はかなう日ごろもすぎで。僧どもの布施いといかめしうせさせ給へる。女院は宮のちかうおはしますをみたてまつらせたまはぬ事をおぼしめせど。事かたりありて。やんごとなき御なかはすぢなし。かくて此月もすぎぬ。九月になりぬれば。夜なかになりまさりてなやましき御心

かたり、恐當作
さざり

ちいとまさりて。まどろませ給事かたし。かゝりつかうまつりたる人々もたけくおもへど。あまりになりてねぶりがち也。ないしのすけはむげにばけて。ひるさへねぶりがぶらひ給。とのゝ御まへはいまは何事をかはすべからんとおぼしめして。むかしのかまたりのおとゝのいみじうわづらひて。よろづ志給けれどやまざりけるに。震旦よりわたれるあまの維摩經供養したてまつりたるにこそおこたり給れとて。ならのそうどもりうせいはじめとして。いせきけいにうや。さるべき人々めして。維摩經供養せさせ給へどおこたらせたまはずなりぬ。なをいまはさるべき月日をまたせ給なむめりと。覺しみたてまつらせ給につけても。なみだといめがたく。我御命もまゝまるやうにおぼさる。すべて今はなに事もあつるしもなし。『いかてひは殿にていく共志ぬとも』との給へど。いかてか御やまひのおこりしところへはおはします。御ものけのおもはせたまつるなめりとて。九月七日のあかづきにぞ。今南どのにわたらせ給。御堂にてはざりともとおぼしめしつるに。あこたらせ給はずなりぬるを。とのゝ御まへも心うきことにおぼしむるたり。寢殿の東おもてに御まつらひしておはします。『此日ごろいなきこしめさて』とてあれど。けふはあしき日。あす八日なれば。九日のつとめて關白殿よりさまぐのいを共もてまいりたれど。すべて「御」御ぞをひきかつぎて。きこしめすべき御けしきなし。とかくよろづ

御、當行

上、當作よ

に心みさせ給へど。いまはかぎりとのみみえさせ給もいみじうかなし。かゝるほどに九月十余日に成ぬ。こゝにも御修法あめの僧都志ん上僧都つかまつり給ふ。ひ比御堂にてくるしうつかうまつりつる女房。さとにまかて、あすの夜ばかり参らんとて出もおほかり。よろづの陰陽師ども。十四日にをこたらせ給べき日に申たりける。その夜御前に入くさぶらぶを。ともすればおこたらせ給て。ものなどおほせられなどせさせ給と思ふに。十四日のつとめて。『いかでゆ少しあみん』とおほせられるば。さぶらひめしておほせ事たぶに。かなへ殿よろこびをなしていそぎつかうまつれど。『すこしなりとも只とくく』との給はすれば。進物所にかねやすに『たゞとくとくわかせて参らせよ』と女房いひたれば。いそぎたちて参らせたれば。あざりありさせ給て。日比の御まし御ぞ皆とりやらせ給て。あざやかなる御ぞをましなどにふさせ給て。『殿おはせよ』とあれば。かくと人まゝいりて申せば。『ゆにまかりをりたり。ただいままゝいる』と申させ給へるに。かぎりともみたるにぞ急ぎのほらせ給て。御ゆかたひらながらおはしましたるに。御けしきのれいならすおはしませば。『やまゝいりはべる』と申させたまへば。御ぐしそぐまねをせさせたまへば。『尼にならせ給はん』とや』と申させ給へば。うなづかせ給を。なくくなし奉らせ給。御戒うけさせ給に。たもつとの給する程。いとさはやかなり。うへの御ま(瑞)もいまぞわたらせ給へれ

ど。御めもくれまどひてなに事も御覽じわかず。まむしやう僧都。けうえん已講など。さるべき程ども集まりて加持まゝいるに。御けしきの只かはりにかはらせたまへば。中納言殿(銀)大納言殿(銀)つと候はせ給へば。『あ彌陀佛と申させ給へ』と申させ給に。いとよく申させ給へば。この程違心おはたしうかぢ参りてうけ給もいみじうかなし。内にもとにもゆすりあひたる程に。殿ばらをはじめ。世の人々まゝいりこみゆすりみちたり。うせもておはするまゝに。との御まへ『あな悲しや。老たるち、はしををきていつちとておはしますぞや。御ともにもおはしませ』と。こゑをたててなかせ給にこのさとにまかでたりし人々も。いつのまにかまゝいりあつたりたりけん。いとみじうゆすりみちたり。三月八日よりなやませ給て。万壽四年九月四日のさるの時にうせ給ぬ。御ぞのいとあざやかなるうへに。との御ころもけさをうへ(瑞)とりおほはせ給て。あざやかなる御ぞひきかつぎてふさせ給へり。御ぐしはるたけばかりにやそがせ給へらむとみえさせ給。ゆひぎはのかみよりそがせ給へるなりけり。きれたる御ぐしをとらせ給て。殿の御まへ三位僧都(味)に『是み給へ。かくこそはながくおほしたてまつりたりつれ』とて。ひきたてさせ給へるほど。六尺ばかりにぞみえたる。いとめもくれあはれとみたてまつりてなきまどひたるに。御戒の師もやがて此僧都ぞつかうまつり給ける。『いとよくたもつ』との給はせつる程は。かくや

はおもひまいらせつる。あさましうあへなきことをひと殿のうちゆすりみちたり。女房だちおしみつゝ。御年御年までいひつゝけなきたるこそ。いとゆゝしうまがまがしければ。とりわき心うし。殿の御まへ(璣)御ぞを引のけつゝみ奉らせ給て。『そら長とこそおほゆれ。やゝ』と申させ給。御すゝいをおしもませ給て。『佛の心うぐもおはしますかな。今までいけさせ給て。かゝるめをみせさせ給と』。いひつゝけなかせ給とも世のことはり。うへの御前(璣)きえ入てふさせ給へり。關白殿(璣)御湯などまいらせ給ひて。あつかひきこえさせ給。御となぶらまいらせ給ても。いとしいみじき御聲なり。一品宮(璣)はとのばらあなたにわたしたてまつり給へれば。ほそき御聲にてなきまどはせ給も。ことはりにかなしともよのつねなり。うへの御前(璣)を御かたてすりて關白殿て奉らせ給ぬ。とのばら『殿(璣)をも今はわたらせ給なん。いとくるしげにおはします』と申て。又あしずりをしてなかせ給。さりとてやはとてゐてたてまつらせ給。ひさしうなりぬる御心ちに。いとしくくるしげにおはします。いととおそろしうてゐてたてまつらせ給につけてもいとかなし。女房達。大納言殿(璣)中納言どの(璣)などは。なをいとちかくさぶらひ給。ないしのすけふかくなるを。つぼねにてゆなど勸むれど。みもいれずいといみじや。まんしやう僧都は。御修法はててけさう結願つかまつれど。『なをたゞにてもまばし』と殿の御まへの給はせければ。

さてさぶらひ給けるに。かくおはしますおなじことなれど。だんもこぼたすなりぬるも。なを人よりはことにみえたり。秋の夜ながしといへ共。たれかは心やすくねいり御とのごもらんずる。とのゝ御前すべほれまどひておはします。さてのみやはとて。もりみちめして事共とはせ給へば。『御なやみのはじめ御祓などつかうまつり志に。かゝらんとやはおもひかけさぶらひし。御うらなどはよろしからずさぶらひしかども。さばかりせさせ給し事共に。さりとていせさせたまはじやとこそ思ひ給へまか』とて。こゝろうき御事とぞなみだもうきてさぶらふ。『さてもかくの日あすにこそ候めれ。關白殿御忌日なれど。それはいませ給ふまじ。女院の御いみの日のみなんさらせ給べき。それにはたあたらせ給はず。さらではえとみにせさせ給はじ』と申す。『さらばさにこそはあなれ。おほろげにやはみえさせ給はざりし』とてもなかせ給。『祇園のひんがし大谷と申て廣き野侍り。そかたになんおはしますべきなり』と申せば。『さはあすまかりてぞ。さべきさまにつかうまつるべき』と。おほせと給てまかでぬ。御くらるもさらせ給にしがば。御輿あるべきにあらず。故女院(璣)四條宮(璣)などの御れいにて。糸毛の御車にてとおほしめしたり。その口になりねれば。つとめてより宮司さべき人々まいりこみて。さまゝおぼしをきておほせらる。道つくりのゝる。とのゝ御前はちからなくおぼしめされて。『えあゆむまじから

んずらん』となかせ給。日くるまゝにいそぎのゝまるにつけても。宮司ども涙にむせてつかうまつる。女房たちもつねの行啓のめでたかりつるを思おはするに。あさましう涙にちほほれまどふ。やがてそのちりぞ二火つかうまつる。女房えつかうまつらねば。大納言(纏)中納言(纏)これつね。これのりなどのつかうまつる。さるべき御ぐなどいれさせ給。關白どの御いみの日なれば。けふはみえさせたまはず。女房車よついつゝぞまいる。われもくゝとなきまどひて。こたみの御ともといひつゝくれどさのみあるべき事ならねば。さるべきかざり参るなんめり。さて御車にのせたまつりてかきいだす程。この御こゑどもをしはかるべし。一品宮(纏)ひんがしの廊のいたじきちろしておはしますべきなれば。さしあひていみじ。めのと達をまいらず。宮の御こゑ志のびあへさせ給はず。あはれにかなしとはをろかなり。ねうばうの日比きぬども。きくやもみぢやと志かさねたるうへに。ふぢのくるものかさなるほどぞまがくゝしきや。つねの行啓にあらざあしかへしたるなりありさまも哀にかなしきに。あきをかざりと思へきにや。くもりなくめでたきに。つゝきたちたる御ありさまなどもいみじうこそ。夜もすがら人々ゝところ御有さま。女房のきぬの色さへみえわかるゝ月なれば。をのづから物の心しりたる人は。あはれにたへがたく世のつねなきことをさへとりかさねおもひつゝけて。女房のくるまをみておもひけ

り。

ふぢごろもかへすくゝもかなしきはなみだのかゝるみゆきなりけり。
花もみぢありしたもともいまはとてふぢのところもをきるぞかなしき。

などぞ人志れず我心どもをやりける。とのゝ御まへおはしましもやらねば。かたにかけ奉りひするたてまつる。とのばら人々ゝくるしうおぼさるへし。かくておはしつきにたれば。いとひろき殿なりけり。ひるよりも明なる月なれば。何夏ものこりなくみわかる。ましていまの御事共すかやかならぬ事にて。夜ぶかくなる御念佛の僧共こゑふりたてゝなくゝあはれなるに。物のゆへ心もきらぬもの共も涙とゞめがたく。山の座主(纏)権僧正。導師咒願つかうまつり給て。いまは只なごりなくけぶりにてあがらせ給ほどりいみじきや。こよひの御まかなひ内侍のすけつかうまつり給ふ。さるべき女房などちりてみなとりつゝきつかうまつるもさらなり。たゞ思ひやるへし。内侍のすけむ月の御まかなひ思いでられてなきまどふさま。さてあかづきがたに出させ給ひぬる。御骨は木幡の僧都と。宮の亮よりたふと木幡にゐて奉りぬ。あさましくひと所のみ雲きりにまぎれさせ給ひぬるに。有つる人々皆かへりまられるも。かすはしらねどあはれにかなし。御いみに権僧正をはじめ。さるべき僧綱だちみなさぶらひ給。この程の御ぐはんありつれば。枇杷どのゝ西の廊にて五

り、恐當作そ

大尊法くりたて参らせ給。としごろもいと道心おはしきして。百万遍の御念佛などつねにせさせ給。よき人と申ながらも。あさましう心うるはしう。ものむつがりなどせさせ給はざりつれば。くどくの人とぞをしはかりきこえさする。一ぼんの宮(預)の御ぶくやつれいとあはれに心ぐるしう。悉にもかまはしうおはします。女房みやづかさなど皆いとくろましたり。さぶらひの人々は。さすがにこきかざりきぬばかまにて冠をぞしたる。中宮(預)も女院(預)もあぼつかなくてやませ給ぬることを。哀にかなしくおぼしめさるべし。つちみかど殿に。ひとせう(預)の御賀に。四所さしあつませ給。一品の宮。殿のうへなど。すべて六ところおはしきし程などの事。昨日かはりとあぼゆるに。かんの殿(預)のあはれにわかくておはしきしに。此御有様などのすべてなを世こそゆしけれ。一品宮の御かたには。春宮(親)より御つかひ日々にまいる。この春御しつらひ女房の袖ぐち思ひいつるも。いと黒きみす御几帳などの程。同じ御あたりの夏とみえぬにも。をとなしき君達などは涙ぐむおりおほかり。はかなく五七日にもならせ給ぬれば。日ごろつくらせ給へる五大尊。萬の不動尊。供養またてまつらせ給。その比はあしき御物のけどもにてうせさせ給ぬれば。佛道さまだけにやとて。いまにたゞ極樂へとのみ御心ざしなりけり。講師にはけうえん法橋いといみじうつかまつる。殿の上の御前(預)などいみじうなかせ給。女

かは、恐當作は

房などあなかたはらいたと思までなけば。講師はあきれつゝをやみがちなり。御法事は十月廿八日とさだめさせ給へり。それにはしろがねの御ぐどもして。阿彌陀の三尊をぞつくり奉らせ給ける。きのふの講師天竺の釋迦の涅槃の所のかなしみの泪の。今にそのあたりのすなごにしみて。くれなるの色なる心をときければ。命ぶのめのと。里より。

きみこふるなみだのいろはそのかみのわかれのにはもかくやありけん。かへし。弁のめのと。

いにしへのわかれのにはのなみだにも身にしむことはなをぞまされる。事どもあほかれどえかきつゞけず。十六日の月あかきに。ないしのすけ。

君がみし月ぞとおもへどなくさますわかれしにはをうしと思へば。弁のめのと。
(後拾遺)
なかめけん月のひかりをしるべにてやみをもてらすかげとそふらん。

少將のめのと。たちのぼる雲となりにしきみゆへに月ぞうき世のかけとのみ見る。

五節のきみ。
(後拾遺)
うけれどもみしおもかげのこひしさにこよひの月をあかず見るかな。

れけ、集作るら

（後拾遺歌）
なかきみ雲がくれけんかくばかりのどかにすめる月もあるよに。
少將。

さやかなる月とはいさやみえわかずたいかきくもるころのみして。
かくて七々口の御ありさませさせ給事どもえかきつゞけず。此たびの御佛つくらせ
給御かざりの御れうには。大和守やすまさの朝臣のがり。たまをめしにつかはした
れば。京のい系にたてまつるべきよしひあげたればまいらすとて。いつみそへた
り。

かざならぬなみだの露をうへてだに玉のかざりをまさんとぞおもふ。
おなじ御れうのたまを。權大夫ためまさかこひたりければ。赤染。

わかれにしたまはかへすにかたけれどなみだのみこそ袖にかゝれる。
との御心ちも。こそよりかくなやましうおはしませば。御堂の事よるひるいそが
せ給。この宮の御事の後いとくくるしうなりまさらせ給へれば。あはれに心ぼそく
おばさる。いとおそろしきことになげき給へれば。御ほうしの僧の法服。御誦經のれ
うの御ぞの事。染殿にもおほかたの人々もいそぎみちたり。かゝる程に。はかなく廿
七日になりぬれば。あみだだうに莊嚴御まつらひなどせさせ給。又わかづきにとの
のうへの御まへ。一品・ひとつ御車にてわたらせおはします。との宮・など女房車

一品、此下諸本
有の宮二字〇
宮、此下諸本有
の字

納言、諸本作宮

廿ばかりあり。宮の女房こたみばかりのみやづかへともおもふに。のこりなくまいり
たり。萬まだ暗き程にて。おぼつかかなげなればくはしくかきあらためず。おはしまし
つきて。この堂の北の方の廊にありさせ給。あかくなるにみれば。御まへよりはじめ
みなすみ染におはしましあふにいとかなし。よろづまたて、ひつじの時ばかりに
ぞこととはじまる。所くの御誦經ども。庭のおもてみえぬとて。いけのきはをいだし
てつみわたしたり。殿の御まへ（理）。女院（理）。中納言。關白どの（理）。またくの殿ば
ら。一品宮（理）。みやづかさどもしもべまで。かたじけなきまでつかうまつることか
たはらいたし。女房の御誦經。みなきぬをぞつゝみてつかうまつる。御誦經に御裝束
二くだりなり。れいの御裝束に又あまの御裝束。ひるのにてせさせ給へり。此御裝束
をみて。内侍のすけ。

かけてだにおもひかけきやからごろもかたみになみだかけんものとは。
返し。弁のめのと。

花にのみそめしたもとをうちかへしなみだのかゝる色ぞかなしき。
佛はこのつくらせ給へる阿彌陀の三尊。御經ほどのをしはかるへし。講師など申つ
づけ給ふありさま。中くなる物まねびなればかゝず。かくて事どもはてぬれば。か
きさましたるに。一品宮（理）は。やがてけふの御つぼねにとゞまらせ給ぬ。十二月二

日御忌日なれば。それすごして九日びはどのにわたらせ給べきなりけり。殿の御まへ(璣)よろづをまきはめさせ給て。いと心のかにわはれにかなまうおぼさる。御心ちのなやましさまさらせたまへれど。この御事をのみ心にかおぼしめしつるに。よさりつがたよりいとくるしう覺しめさるれば。たへがたくてふさせ給ぬ。

榮華物語卷第三十

つるのはやし

殿の御まへ(璣)かしくこの心ちの昨日の法事をとげさせつること、おぼしめす。御忌日はらい月五日なり。それはみな御經佛などよろづみなぐしたれば。いとやすき事とおぼせられて。いとまめやかにくるしげにおはしませば。とのばら御心ちまどはせ給へり。月比うへの御だう定き僧都の御坊におはしませば。程せばくてこのらの殿ばら人ぐまいりこみ給へるにさはがしければ。『いかでかくさはがしからてあらばや』との給はずれば。いみじう忍ばせ給。うへの御前(璣)は『なを一品宮(璣)のおはします。關白どの(璣)御いのり御修法のことなどをきてさせ給へば。さらしくをのれをわはれと思はん人は。このたびのこゝちにいのりせむは中くうらみむと

たへて、賭本元

す。をのれをば惡道におちまどはさばこそはわらめ。たゞ念佛をのみきくべき。この君だちさらしくなよりのませそ』など仰らるれば。御まものけの思はせてまつるめり』などさゝめきの給はずれば。御いのりたえたり。日ごろになるまゝにいとくるしげにおはします。十一月になれば。みや(璣)の御正日の事せさせ給つ。内(璣)。春宮(璣)にもこの御惱をいみじきことにおぼしめしなげかせ給たり。御心地俄におもきにはおはしませねど。こそよりれのやうにもおはしませず。ものきこしめさてひさしうならせ給たるに。此宮(璣)の御事をいみじう覺しめしくづをれさせ給へるつゝきなれば。かくいとよはげにおはしますなりけり。月ごろもすべて御いのりたへてせさせ給はず。たゞこの御堂のうちの御佛を見給ふ事を。よるひるいとなみ覺しめして。やすきいも御とのごもらずなどありければ。いかにとのみ殿ばら宮ばらおぼしなげかせ給へるに。かくうへおはしませばいと心うくおぼしなげかせ給。わが御心ちにも璣このたびはかぎりのたびなり。さらしくものさはがしきありさまあらでありなん』との給はず。すべて物をつゆきこしめさねばいとたのもしげなくおはします。殿のうへ(璣)女院(璣)などわたらせ給て。なくくみたてまつらせたまへば。『とくくかへらせ給ね』とのみ申させ給へば。心のどかならぬを口おしう心ぐるしうおぼしめさる。内春宮より御つかひひまなくまいる。かゝる程に霜月の

う、據諸本補
ど、諸本ば

ど、據諸本補
一品、諸本此下
有の字

させ、諸本此上
有申字

十よ日にもなりぬ。五節の事どもとの、まれど。殿ばら宮ばら御ぶくなれば。御らん
などもなくこよなくさうごうし。中宮(璣)は五節いだし給へば。中宮よりも童の装束
束えならずして奉らせ給へれど。それ覺しめす事どもあれば御心ちもそらへ。『今
はいでさせ給はん』とのみおぼつかなさなげかせ給へば。殿の御まへの『まばし
と申させ給へば。まも月の廿日のほどにも成ぬ。十九日のよさは一品・宮(璣)びは
殿にわたらせ給御をきておぼせられて。『わたらせ給はんまゝに。やがてこなたへわ
たらせ給へ』と申させ給へば。やがて殿の御前にわたらせ給ふ。ほかけに見たてまつ
らせたまへば。くろつるばみの御こうちぎにけざやかなる御いろの程。ありさまな
どいとさくやかにうつくしげにおはします。いみじうなかせ給ておぼつかながらい
かでかとなん。『さは夜ふけぬ。さきに渡らせ給へ。みだり心ちよろしくもなり侍
らばこそはまいりはべらめ。はや〜此御をくりとく〜』と申させ給へば。關白ど
の殿原うちそひてわたしたてまつらせ給ふ。一ぼんの宮の御まへははづかしくてと
もかくも・させたまはざりつれど。よろづおはれにおぼしめされて。人まれずなげか
せ給。よろづにおはれにかなしき御わたりなり。とのばらおはします。むかしの女房
皆さぶらへば。同じやうなれどた〜とところおはしますさぬのみ返々あさましきや。
中納言殿(璣)のう〜(璣)もこのごろ御子うみの事あべければ。三條なるあきの前司

た、原作し、據諸
本改

世の中に、諸本
作この世には五

よしすけが家にわたらせ給にも。やがておぼつかなさにわたらせ給。『よろづいとかな
なくしてなに事もまりきこえぬなり。おろかなるにおぼしそ。いまさるべき物は奉
らん。まろき物どもいるわざをなどおはれに申させ給へば。中納言とのう〜もま
のびわ〜ずなかせ給。いかに〜となく〜かへらせ給ぬ。かゝる程に中宮(璣)出さ
せ給ぬ。『今まで見たてまつらざりける事』といみぢうなかせ給ふ。女院(璣)うへの
御まへ(璣)などは。はじめよりおはします。中宮さへにおはしますさん事といとびん
なき事也。とのわづらひあり。はやうにし殿へわたらせ給ねときこえさせ給ひけれ
ど。た〜かくておはします。との、御前いとくるしうならせ給へば。このたびとおぼ
しめして。年ごろ御手づからか〜せ給ける御さうし二三帖ばかりさぶらひけるを。
女院に奉らせ給とて。殿(璣)。

かせふくとむかしの人のことのはを君がためにぞかきあつめける。
御かへし。女院(璣)。

なぐさめもみだれもしつゝまがふかなことのはにのみかゝる身なれば。
又との。

ことのはもたえぬべきかな世の中にたのむかたなきもみぢばの身は。
かくて日ごろにならせ給へば。ほいひのさまにてこそは。おなじくはとて阿彌隨堂に

わたらせ給。もとの御念誦のまにぞ御志つらひしておはします。高き屏風をひきまはしてたてさせ給。人まいるまじくかまへさせ給へり。となるとなればおきわがらせ給はず。なを『物露きこしめせ』と殿原申させ給へばいみじうむつがらせ給。うち(後二)よりも東宮(後三)よりも。かく今まで見奉らせ給はぬ嘆の御消息しければ『よからん日しておはしまさせ給へかし。只思事はいとなめげにふしながら御覽せん事思なり。さらばよき日して』との給はず。此月廿五日よろしき日なれば。その日行幸の御用意あり。春宮の行啓はちな日あるべけれど。心あはたゞしかるべければ。あなじ月の廿八日とさだめさせ給。さてその日になりて。辰のときばかりに行幸あり。昨日御ぐしなどそらせ給て。御けさころもなど奉らせ給て。世のつねの御有さまにて御腸足をしかりておはします。うへいといみじうあはれにみたてまつらせ給て。せきもとといめずなかせ給ふ。あさましうあらぬひとにほそらせ給へる御ありさま。哀にかなしく心うくみたてまつらせ給。『さてなに事をかおぼしめすこと、てはある』ときこえさせ給へば。『今はこのよにすべて思ふ事候はず。よの中におほやけの御うしろみつかうまつりたるひとへおほかる中に。あがりてもかばかりさいはひあり。すべきことのかぎりつかうまつりたる人さぶらはずはべる。まづはおほやけのおほぢやなどこそはかやうにて候に。またかゝるおりの行幸候はず。ちへ

すら、原作そら、據諸本改

など、諸本元

はず、諸本作事

いちと、諸本作ひとつ

元、諸本

みかど母ぎさきの御事にこそは候めれ。それすらさしもあらぬたぐひ共あまたさぶらふ。まづちかうは三條院六月にくらるにつかせ給て。十月七日冷泉院の御心ちあもらせ給し行幸あるべくおほせられしかど。諸卿のさだめに。なを御ものけのいとあそろしうおはしますよし申侍まかば。行幸候はずなりにき』など。いとさはやかに申つゞけさせ給へば。『此御心地はちからなげさのいみじきにこそあんめれ。御心ちはゆめにかはらせ給はずなし。あはれやめたてまつらばや』とおぼすに。いとかなしうて『覺後一さんまゝの夏後二の給へ』と返々申させ給へば。『すへで思事候はず。世はじまりてのちこの行幸こそはためしに候めれ。これよりほかの事は何事かは。たゞしこの御堂の事つかうまつりつるものこともをなん。いちどの事をせむと思ひたまへつる』と申させ給へば。『いとやすき事』とて。關白殿後三のかみの家司因幡前司後四ちかた後五だをば。よりあきらがかけりの美濃になさせ給。しもの家づかさ左衛門尉後六ためかた後七をば使かけさせ給宣旨くださせ給。また御堂には五百戸の御封よさせ給宣旨。おなじくくだりぬ。との『御まへいみじううれしきおほせ』と。返々なくくよろこび申させ給。うへは又なにごとをもと覺しめさるれど。又申させ給事なきをくちあしうおぼしめさる。女院の御かたにいらせ給へれば。女院いみじくなかせ給て。『とのいみじううれしきとよろこびなき給が。かへすくうれしきこと』とよろ

こび申させ給。『あはれに心うきと見給ふる』といみじうなかせ給。『中宮さておはしませば。おなじさまの御事共こそは。對面などはとみにえあるまじきにこそ』などおはれにかたらひ申させ給。さていとくかへらせ給ぬ。おほやけより此御堂にきぬ三百疋布千段誦經にをこなはせ給なり。殿の御壽命のための御誦經なりけり。そのほどげに世のためしにまつべく。ふりがたうめでたき御ありさまなり。ひとゝ世の御堂供養に。行幸行啓などおぼしおはせられてかへらせ給ぬ。かくて八日に成ぬれば。東宮の行啓あり。同じくとのゝ御まへ一日のやうにさるべきさまにておはしませ給。東宮見奉らせ給に。おはれにあさましきまでなかせたまへば。殿もいみじうなかせ給ふ。あべい事ども申させ給て。いみじうなかせ給ふにも御心のうちに。我よにあはせ給はずなりぬる事を。おはれにくちおしうもあるかな。心のほどみえたてまつらんとおもひつる物をとおぼさるゝに。いとかなしう覺しめさるゝなりけり。いまはかく行幸行啓にまかりあひぬれば。いまなんおぼつかなく心とまる事なくて。極樂にも心きよくまいり侍るべきとてもなかせ給へば。いとゝあはれにいみじうみたてまつらせ給ふ。女院の御かたにいらせ給ても。この御事よりほかのことは何事かわらん。さてもとくかへらせ給。『まばしと思へど。おきね給へるがいとくるしければ』との給はせても又なかせ給。とのゝ御まへ『今はいと心やすし。けふまで世に

僧原作假、據諸本改

はありつるゝ』との給はするにつけても。僧俗そちらの人々なみだをながせど。いみじう忍びやかなり。その後は内にも東宮にも。おぼつかなくおぼしなげかせ給て。おぼしいりたるもおそろしうて御つゝしみもあり。みかどいみじうあそび心おはしませど。この御なやみの後。世をおぼしおめり。あはれなる御けしきにおはします。いづかたよりも御つかひまきりまいりつゝきたり。筑紫みちの國の守をはなちての國のかみ。のこりなくまいりあつまりたり。來年はかはりなるべき國々などは。としも残りなくなりぬるに。いとわりなきことにもへど。いかでかはとてなにをもまらぬさまにのぼりあつまるなんめり。又御堂のゑなどにまいりこみしあまどもは。かすをつくまてたい此御だうのあたりをさらす。よるひるひたいにてをあてゝねんじたてまつりたり。ひさうもおはしませば。いかにあはれと人おれずなげきども、あはれなり。この御堂は三時の念佛つねの事なり。此ごろはさるべき僧綱凡僧どもかはりて。やがて不だんの御念佛なり。さればいみじうたうときもやがてきゝあへるなりけり。三位中將にうだう（傳）『たゝの傳ありこそあらめ。かゝるありにはいかでか』と殿の上せちにきこえさせ給へば。まいり給て御まくらがみにて。念佛たえずすすめ奉らせ給。やまの座主（傳）つねにまいり給て。いみじきと共を申きかせたてまつり給て。ともすればうちひそみなき給。たゞいまはすべてこのよに心とまるべく

ひ、諸本作い

みえさせ給はず。このたてたる御屏風のにしちもてをわけさせ給て。九体の阿彌陀佛をまもらへさせたてまつらせ給へり。いみじき智者もまぬるおりは。みづのおひをこそをこそすなれ。ましてとの御ありさまは。さまぐめてたき御事どもをおぼしはなちたるさま。のちのよはたまるくみえさせ給。女院中宮をだにいまはあひみ奉らせ給事おぼろげに申させ給てぞ。さばとてたはづかなる程にて。はやかへらせ給ねくと申させ給。すべて臨終念佛おぼしつけさせ給。佛の相好にあらざりほかのいろをみんとおぼしめさず。佛法のこゑにあらざりほかのよのこゑをきかむとおぼしめさず。後生のことより外のことをおぼしめさず。御めには彌陀如來の相好を見たてまつらせ給。みくにはたうとき念佛をきこしめし。御心には極樂をおぼしめしやりて。御てにはみだ如來の御てのいとをひかへさせ給て。北まくらにしむきにふさせ給へり。よろづにこの僧どもみたてまつるに。なを権者におはしましけりとみえさせ給。御堂の内に坊してさふらひ給僧だち。御堂どうしにいたるまで。たれ物にあたりて水をあみ。人しれぬかをつき。佛をいりもみたてまつる。御堂ぐの僧などさし集りて。かひひぎをしてそらをあふぎて。『いかて御身に。かゝる物のかずにもあらぬ身をかはり奉らん』と思ひ。なみだをながすもいみじうあはれ也。世中のあまども。あみだ堂のすのこのまたにあつまりて。十方世界

の諸佛の世にいでさせ給て。機縁すてにつくれば。かならず滅度にいり給。ちかく釋迦如來卅三にして佛道なり給へり。八十にして涅槃に入給。佛日すてに涅槃のやまにいり給なば。生死のやみにまどふへし。たゞし是は非生に生をとなへ。非滅に滅をげんじ給しがごとく。まことに滅志給はずばいかにうれしからんや。十二月一日。常よりもいとくるしうせさせ給へば。女院。中宮。上のおまへもいとゆるしう思ひたてまつらせ給て。關白どのにせちに申させ給へば。人ぐいだしてみたてまつらせ給に。あはれにかなしういみじうて。ほとく御聲たてさせ給つべし。さてかへらせ給ぬれば。僧だち近う候て。御念佛をしてきかせ奉る。されどその日をこたらせ給つ。この程内春宮より御つかひいみじかりつ。いまになをよはげにおはしませど。ただこの御念佛のをこたらせ給はぬにのみおはしますちやうにてある。又の日もいまやくと見えさせ給へれど。となくてすぎさせ給ぬ。四日巳時ばかりにぞうせさせ給ひぬるやうなる。されどむねよりかみはまだおなじやうにあたくかにおはします。なを御くちうごかせ給ば。御念佛せさせ給とみえたり。そこらのそうなみだをながして。御念佛のこゑをしまつつかうまつり給。臨終のをりは風火まづさるがゆへに。とうねちして苦おほかり。善根の人は。地水まづさるがゆへに。綾慢してくるしみなしとこそはあんめれ。されば善根者と見えさせ給ふ。あはれに内東宮の御つか

苦、原作苦、據諸本改

ひぞひまなき。日比いみじう志のびさせ給へるとのばら御まへだち。聲もおしませ給はずげにいみじや。御堂のうちのあやしの法師ばらのもの思なげなりつるが。にはのまゝにふしまるぶげにいみじ。せかいのたうとき尼法師さへあつまりて。ほとけのよにいで給てよをわたし給へるねはんのやまにかくれ給ぬ。われらがごときいかにまどはんとすらんなど。いひつゞけなくもいみじうかなし。夜なかつぎてひえはてさせ給ける。御棺はなやみぞめさせ給し日よりつくらせ給へれば。やがて入棺あたまつりつ。いみじう御こゑどもまさなきまでおはしまさふ。又の日陰陽師めしてとはせ給に。七日の夜せさせ給べし。ところはとりべのとさだめ申てまかてぬ。七日になりぬれば。つとめてよりいそぎせさせ給ふ。れいの事どもをしはかるべし。日くれぬれば。御車にかきのせたてまつりておはしますに。その日つとめてより夜まで雪いみじうふる。さるべき人々。れいのさうぞくのうへにあやしの物共きて。雪きえあへずふりかゝりたるも。さまぐに哀にかなし。よろづ事そぎて只かたのやうにとおほせられけれど。事かぎりありて。人のつゞきたちたるほど。十廿丁ばかりありぬべし。いまはいてさせたまふ。無量壽院のみなみの門のわきのみかどよりいでさせ給。かの釋迦入滅のとき。かのくしな城の東門よりいでさせたまひけんたがひたる事なし。九万二千あつまりたりけんにもをとらずあはれなり。このせか

すら、原作そら、
據諸本改
給、諸本元

いのおまども心をつくして参りをくりたてまつれど。そこらある人なればいづれともしりがたし。萬壽四年十二月四日うせさせ給て。ついたち七日の夜御葬送。御年六十二にならせ給けり。儀式ありさまに夜もたゞふけにふけてゆく。所々の念佛僧。奈良。三井寺。ひえ。石藏。仁和寺。横河。法性寺。すべていひもやらずかすをつくしたり。山座主御導師つかまつり給ふ。なをはじめをはりみちびきたてまつるべきにこそ有けれ。さきだちたてまつるやうもあらまほしかはと。まづかなしくなみだをながし給。さてえつかまつりやり給はす。よふけてなりやみいとまづかなるにいひつゞけ給ふこともいとゞしきなみだのもよほしなり。淨飯王入滅度のあした。悉達太子白がぬのひつぎをになひ。摩耶夫人真如にかへり給志ゆふべ五百羅漢くれなるの涙をながしき。不生不滅の佛すらなを愛別離苦無去無來をはなれ給はずなどいつゞけ給て。六道にあひ給はん佛并に申給べきやうなど。一々につゞけ給。此中に十六字あり。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。その處なれの心か有とゞはゞ。すなはち尊靈こたへ給べし。諸行無常は天上にのぼる智慧はしなり。是生滅法は愛欲の河をわたる般若の船なり。生滅々已はつるぎの山をこゆる寶車なり。寂滅爲樂は淨土にまいる八相成道の義果也。無量無數の賢衆きたりて。この所はいづれの經論の文ぞととはいこたへ給ふべし。諸行無常増一阿含經の文なり。是生滅法は般若經

文也。生滅々已は花嚴經文なり。寂滅爲樂は後教涅槃經の文なりとこたへ給ふべき也。此娑婆世界はねがひすむべき所にもあらず。りんわうのくらひさしからず。天上のたのしみも五蘊はやくきたり。ないしいはんや世の人をや。ことゝ願とたがひに樂どゝともなり。かるが故に經にいはいく。いづるいきはいるいきをまたず。いるいきはいづるいきをまたず。只眼の前に樂さり。かなしびきたるのみならず。又命終にのぞむて罪に従ひてくにつ。尊靈かの西方世界にむまれ給なば。樂をうけ給はん時。極もなく人天けふしてあひみる事をえ給。又かぎりなきたのしびをえ給べし。かるが故に。このせかいにつゆの心とまらず。佛の御をしへのごとくにて。さいごの御念佛みたせさ給はざりつ。たのもしきかな。今は極樂の上品上生の御つかひと。たのみたてまつるなどいみじうあはれにかなし。かやうの道の師などは。いみじき御門の君と申せど。たゝことのはじめをこそよむれば。年ごろの御師弟子のちぎりにおはしましつれば。泣く残りなく無常のさほうもさるべき事をも。心の限り申給。せんかたなくたうとくかなし。諸行無常のまゆをば。たゝ涅槃經の偈とのみこそまりたりつれ。おほくの事どもゝたり給へりける物を。うべこそ雪山童子身にもかへけめときく人々のみあり。六道の佛苜の御名ども。なくく皆いひつゝけ給へれど。えきゝとめずなりぬること口おしけれ。扱よろづにかなしくて。あかづきがた

けぶりたえ、集作たきいつき

いと、諸本元

にぞとのばらさべき僧などあつまりて。御骨ひろはせ給てかめにいれて。右中弁のりのぶかけたてまつりて。定き僧都もろとも木幡にゐてたてまつりつ。さべきとし比の人くゝみな参る。さて殿ばらかへらせ給て。御堂にみなおはしましぬ。なにごともおはれにかなしかりつるに。忠命内供といふ人こそとりべのにておぼえけれ。のちにもりきこえたりし。

(後注)

けぶりたえ雪ふりしけるとりべ野はつるのはやしの心ちこそすれ。

となんありける。かの娑羅林の涅槃のほどをよみたるなるべし。なが谷の入道殿(時)はきゝ給て『たきいつきといはまほしき』とぞの給ける。殿原の御堂にて日のすぐるまゝに。あはれなる御事をつきもせず覺しなげきて。またこのほどにあさましうあはれなりつる事は。侍従大納言(時)のおなし日よりあやしうれいならぬかせにやとて。朴をまいりゆゆてなどきて心み給ひけれど。いとくるしうのみおぼされければ。いかなるにかと覺し。殿のうちもよろづに御いのりもさはぎけるに。四日のよさりととの御まへのおはらせ給しおりにこそうせ給にけれ。いとくるしうおぼされければ。姫君とゆきつねのぶつねのきみの御てもとを左みぎにとらへてこそいり給にけれ。あはれにかなしともをろかななり。北の方君だちまどひ給。此との(時)はとし比道心にてをこなひいみじう給つる人なり。法花經念佛かずまらぬに。日々所作に

その、諸本作の

大佛ちやうをこそ七遍よみ給けれ。おぼろげならずば。かならず往生のありさまならんとうたがひなし。そがうちになんぞみ義孝の少將。方便品誦してうせ給て。往生のきにいり給めり。一條攝政(卿)の御すゑあやしう命みじかくおはするに。この殿は五十にあまり給へりかし。されどこの殿は御心のかぎりなくめでたくおはしつればにや。今までおはしましたつ。位も正二位。つかさも大納言ばかりにてはぢなき程なり。おほやけよりはじめ。世の人いみじうおしみ聞ゆ。『いみじき物の上手のうせ給ぬる事』とくちおもしろおもふ人おほかり。さりげもなくさかりにおはしつるとの、思ひがけぬ程の御ありさまこそ。返々おはれにかなしけれ。との、御有様は。されど御としもよりてこゝらのとし比さかへさせ給へりつれば。ことほりに思きこえさす。このとの、御志にこそいとあへなき御事に世人聞ゆ。中納言どの(卿)かゝらぬありならましかばをくりきこえてまし』と口おしう人しれずおはれにぞなげかせ給。此事どもをき給て。なかだにの入道(卿)の御もとより。中宮大夫(卿)にきこえ給ける。

みし人のなくなりゆくをきくまゝにいとみやまぞさびしかりける。
中宮大夫御かへし。

きえのこるかしらのゆきをはらひつゝさびしき山をおもひやるかな。

となんきこえ給ける。御堂に宮へ殿ばらおはれにきこえさせ給に。十日の夜中宮(子殿)の御夢に。いと若くおかしげなる僧のいとあてやかに装束たるが。たてぶみをもてまいりて『これ』と申せば。『いづくよりぞ』とあれば。『殿(卿)の御文』と申せば。喜びて御らんずるに。『下品下生になんある』と侍御消息なれば。宮の御せん』いと思はずにさやは』との給はせければ。此僧』いかでかかうまでも。おぼろげの事にはさぶらはぬ物を』と申すと御覽せければ。とのばら』さは往生させ給へるにこそ』と。
『おはれ此御堂のとをよるひる御いとなみに心にかけさせ給。又念ずのさいごあるべき限りおはしましたつるに。いみじううれしきかな』と。豊しの給はする。三位の入道中將の『念佛をせちにすゝめきこゆ。みづからもせしにねぶりたりしかば。いと心ちよげなる御けしきに。下品といふともたむぬべしといふとを返々とのたまふとみしかば。功德のさうなめりと思て。人にも聞えてやみにしを。この御夢にきゝおはするになん。いとたのもしう成ぬべき』とぞきこえ給ける。又二三日ばかりかねて永昭僧都融禎なんとが御枕がみにて御念佛志ければ。融禎のゆめに。九牀の中たいの御ひだりのかたのわきより。いとうつくしきこゝろのいできて。かうろをもてきてとの、御まへの御まくらがみにをきつとみてさめにけり。そのゆめはまたおはしまし、あり。人々』にみなかたりけり。往生の行などには。人のおほりのありさま夢な

どこそは聞きて往生とさだめたれ。往生させ給へりとみえたり。まづうせ給し有さま。御こしよりかみはあたしませ給て。御念佛きはまりなくせさせ給しに。功德のさうまろくみえさせ給にきかしなどの給。さだめさせたまふ法花經をいみじく歸依したてまつらせ給ければ。現世安穩後生善所とみえさせ給ぞ。世になくめでたきや。御忌の程關白殿法花經一部阿彌陀經あまた經一けをわけさせ給ひてひらかせ給めり。またおはしましあり。はかしく志き御せうぶんもなくてうせさせ給しにかば。このころぞ關白殿せさせ給。さべき帯はかしなむどはかねて御堂にかせ給て。やむごとならんありに。みな御堂にかり申させ給し事なり。御領御庄さるべきかざりは四五所みなよせたてまつらせ給て。のこりの所はうへのおはしまさんかざりは志ろしめして後は。御だうにとぞのたまはせしかば。そのまゝにとおぼしめすを。おさめ殿まさもりがもとにつかひのこさせ給へるつやくぎぬ五六千疋。れいの絹万疋。あやいとわた。さまぐのからあやすべて數志らず。それは關白殿がたへ。女院(璣)。中宮(璣)。一品宮(璣)。高松殿のう(璣)。中納言どの(璣)の北の方などにわかれ奉らせ給て。のこりはみなうへの御ま(璣)にたてまつらせ給つ。又世中の六十餘國の上馬これなむいかなるくたとてまつりあつめたるも。殿ばら受領のくだり僧達などにもわかたせ給て。のこりいみじとおぼしめすをゑりをかせ給へりける

馬。御厩のくはへて百びきばかりぞさぶらひける。皆めしあつめてとのばらにくばり奉らせ給。御忌にこもりさぶらひ給ふ僧だちにみなくばらせ給。殿の御まへの御心をきてにも。關白どのさしすゝみ。あるべきかざりめでたくおはします。おはれうへの御ま(璣)四十よ年といふにわか奉らせ給に。いとみじう覺したり。さきざきの御物思こそおぼされしか。このたびはよろづにつけてさへ覺しなげきまさりたり。此御いみにさぶらふ僧たち。關白殿をはじめたてまつり。この殿ばらこと上達部受領數をつくしてひしせさせ給に。そへ給ものあさましうおとろくし。又七日の御誦經僧達ひとわたりひきわたすばかりの事どもをぞせさせ給。すべていみじかりし御なごりなれば。すゑまでめてたしとみえたり。志はずの廿八日女院極樂淨土かへせ給て。色紙の御經などして申あげさせ給。その御法事ありさまかへず共をしはかるべし。殿の御まへには百鉢の觀音をつくりたてまつらせ給。よるをひるにこそがせ給ふ。やがて御法事に申あげさせ給ふべきなり。千部の法花經おぼしはじめたりしも。いみじういそぎせさせ給。これも此たびおなじうはと覺しいそがせ給。九月よりは。殿原皆皇太后宮の(璣)御うすに「ほ」次にておはしまし。みやづかさなどこまやかなりつるに。くろつるばみにならせ給。世中の十が九はみなにぶみわたりたり。いはく諒闇共いひつへし。おほやけよりの諒闇せよといふ宣言くだりた

ほ、恐行

ればなりけり。かくて万壽五年になりぬ。ことしはわたらし車みえず。さき花やかに
をふ事なく。小舎人童部だにはなやかなるきぬきせたる人なし。女院中宮關白殿な
んど。みなかくておはしませば。よの人みな御堂にこみたり。御法事は正月にせさせ
給べければ。よろをひるによろづいそがせ給。御ほとけは極樂淨土をぬひ佛にせさせ
せ給。御經は金泥。正月廿八日なればいとちかく成ぬといそぎたち給。除日は二月に
あるべきとしなめり。『殿の御まへ(璽)は御なやみありつれど。宮(璽)の御事なくば
いと只今はかくおはしませし』と御堂の事どもをぞ返々關白どのには申させ
給けり。女院嘉陽院殿におはしませせて。關白殿土御門殿にすませ給て。御だうをつ
ねにみさせさせ給。『修理をせさせ給へ』とぞ申させ給ける。又『二品宮の御事(璽)を
なんぢもふ事なる。あなかしこおろかにたれも思ひきこえさする。我ゆいごんたが
ふな』とにぞ返々きこえさせ給ける。まとかの高松殿の中納言殿(璽)のうへは。との
うせ給にし比ぞ御産はありし。關白殿(璽)萬にあつかひきこえさせ給ひける。かく
て廿日になりぬれば。よろづもすりあひたり。おほやけ。東宮。一院。女院。中宮。關
白殿。次ぐの殿ばら。中納言どののうへ。たかまつどのおほかたすべて庭のひまな
し。世中のぬのといふ物すべてけふにつきぬらんとみえたり。僧どものそへもの布
施など。すべてなかくなればかきつくさず。いみじうよにめづらかに侍めりしか。

ひ、或衍

中納言、此下恐
脱大納言三字

その日やがてとのばら宮みなかへらせ給にしかば。御堂かきさましたる様になりし
かば。御堂の上下みななみだをながしてぞ。おはれにことほりにこそみえしか。との
のおまへの御ありさま。世の中にまだわかくておはしませしより。おとなひ人とな
らせ給。おほやけにつきくつかまつらせ給て。唯一無二におはします。出家せさせ
給し所の御ことほりの御ときまでをかきつけきこえさする程に。いまの春宮みか
どのむまれさせ給しより。出家し道をえさせ給。ほうりんをてんじ。涅槃のきはま
で。發心のはじめより實際のおほりまでかきしるす程の。かなしうおはれにみえさせ
給。彼權大納言(璽)の御法事も同日ぞ世尊寺にてし給ける。この僧どもいとまわく
をまちてよるぞせさせ給へる。おはれなる殿の御しにこそ。かくいふ程に口ごろは
すきて。二月廿日の程に除日ありて。との、中納言(璽)に成給ぬ。國々受領さまく
になりあつまりよろこび給。中宮の大夫(璽)は民部卿になり給ぬ。まことや侍従大納
言(璽)は。この民部卿の御もとをおとしいたせ給て。殿のうへのおはしませすいまの
大貳これのりがいふにぞすませ給。よそくなれど。なを此民部卿の御もとにぞな
をかくてしりきこえ給。昔よりこの殿(璽)をば。うへ(璽)の御子にしたてまつらせ給
ひしかば。かう心ほそくおはしませば。同じ所に参りてすみ給ふなりけり。つきく
のありさまども又々あらべし。見聞給らん人もかきつけ給へかし。御堂の百昧の觀

音あみだだうにぞやどりるさせ給める。あはれとのゝおはしまさましければ。こゝら御堂まうけてやすらかにおはしまさまし物を。佛もさべき人にをくれ奉らせ給へば。かくこそは哀にみえさせ給へ。釋尊入滅の後は世間みなやみに成にけり。よのともし火きえさせ給ぬれば。ながきよのやみをたどる人いくそばくかはある。あるじさらせ給へる御だういそがせ給。御はてにやがて供養とぞおぼしめしたる。

榮華物語卷第三十一

殿上花見

入道殿(璣)うせさせ給にしかども。關白殿(璣)。内大臣殿(璣)。女院(璣)。中宮(璣)。あまたの殿ばらおはしませばいとめでたし。かんのとの(璣)。皇太后宮(璣)のおはしまさぬこそはくちおしき事なれど。いかでかはさのみ思ふさまにはおはしまさん。ひかる源氏かくれ給しなごりもかくやとぞさすがに覺えける。めでたきながらおはれにおぼえさせ給。ききいの宮(璣)。右大臣どの(璣)。かほる大將などばかりものし給程のおぼえさせ給なり。さすがすゑになりたる心ちしてあはれなり。女院(璣)は内(璣)。春宮(璣)の御おやにて。おりのみかどの定にておはしまして。御車にての

殿、據小本補

繪、據小本補

なる、據小本補

もよ、諸本作め、或是

め、原作に、據諸本改

さる、原作さき、據小本改

み御堂へわたらせ給。内へもいらせ給などして。なか／＼心やすくめでたき御ありさまなる。御せうとの殿原よりはじめたてまつりて。やんごとなくいみじう思ひたてまつらせ給へり。世の人もなびき申たることとはりたり。いみじくけだかく候人。こゑたかからず。あめやかに心に／＼めでたき院のやうなり。かたちをこのませ給て。いまでもよきわかき人ども参りあつまりて。めでたくあらまほしき御ありさまなり。わかき人いどみかはし。あふぎをさしかくしつゝなみさぶらふ。装束よりはじめて。われもおとらじと思いとみかはしたり。されどきぬのをとかしがましからず。のどやかに心に／＼き院の様なり。皇太后宮(璣)のさまかはり。はなはなどもていで。このましかりしもさるかたにておかしかりしを。殿ばらも思いできこえ給。中宮(璣)たい／＼いまのときのきさきにて。またならぶ人なくたい／＼びとのやうにてさぶらひおはします。いとめでたし。これもさかりの御有様なれば。人々参りあつまり。宮達かずそはせ給て。御めのと参りあつまりていとめでたし。よきわかうと童などまいりて。こゝろ／＼にこのましくめでたき御ありさま。御心ばへよりはじめ。さいはひはさもこそおはしまさめ。いかでかくあかぬところなき御ありさまともなりけん。御せうとの殿ばらもみたてまつらせ給。高松どの(璣)の御腹には。春宮大夫(璣)。中宮権大夫(璣)。権大納言(璣)など申て。おとこ三人おはしますなり。姫君は右衛門督

殿、據小木補

(御)のうへにてものし給。かみのまきに志るしたれば。あたらしくも申たてず。中宮(御)には女宮一人(舞)おはしまして。おとこ宮のおはしまさぬことを。くちあしう内(御)にもみや(舞)にも殿ばらも覺しめす。ひめ宮(舞)は入道殿の御ぶくにて。ひととせは御袴も奉らざりしかば。いつくにて奉る。志はずの十よ日になんありける。みかど(御)后(御)御心にいれさせ給て。おぼしいとなませ給。殿(御)も故殿のおはしまいにかはらず。あたちいとなませたまへばいとめでたし。その日のぎしきありさまなどいへばをろか也。みなくれなるにえびぞめのうはぎ。柳のからぎぬ。いろゆるされたるはふたへ織物。たゞの人々はるがき。ぬひもの志。えもいはずいどみつくしたり。うへわたらせ給て。御こしゆひ奉らせ給。いとめでたくおかしげにおはしませば。かざりなしとみたてまつらせ給ふ。二の宮(舞)又いとうつくしうてさしすがひておはします。こよひはなに事も物さはがしくてすぎぬ。又の日うへわたらせ給て。上達部おまへにめしおれば。みすのとにさぶらひ給。『和歌などあるべし』とおほせ事あれば。權大夫(舞)かはらけとりて。關白どの(舞)にまいり給けるに。『さうくまきにけふのありさますこしかき志るしてあらんむよかるべき』と。御けしきありければ。權大夫なんその日の哥の序題かき志るし給ける。心は祝の心になん。

權大夫能信

が、原作リ、據諸本補

め、原作み、據諸本改

う、原作く、據諸本改。○ぞ、原作す、據諸本改

たがためとなにかたとへんきみが代はよろづよをへてつくる世もなし。

關白殿(通)

ひめまつのことだかくなればうつろはぬ雲のうへこそみどりなりけれ。

内大臣殿(通)

おひそはるゆくすゑとをきひめ松とこだかきかけとむすびつるかな。

大夫齊信

わたつらみのかめのせなかにいるちりのやまとなるべき君がみよかな。

おほかれど。これよりしもはなにかはとてとめつ。御あそびあり。ひとくものかづき給。けふは女房老ろききぬどもにこきうちたる紅梅のから絹うちいでわたしたり。はえわたりおかしうみゆ。又の日は紅梅にもえぎのからぎぬなど。三日の程いみじうくさうぞきつくしたり。うちの御めのと達。大貳の三位。みまさかの三位。かうづけなど皆参りて。うち出さぶらひ給。やがて一品にならせ給て。おとこかうぶり。女かうぶり。つかさなどえさせ給。かくいとめてたくておはしませど。おとこみこのおはしまさぬをくちあしくおぼしめす。うちの大殿(舞)には女みところ(舞)。おとこ四人(舞)ものせさせ給を。おほ姫ぎみ御匣殿ときこゆるを。いと参らせ奉らまほしう覺してぞうせさせ給。内にもさる御心さしありておぼしめしけれど。中宮(舞)

にはいかり申させ給て。さしはへ打いて申させ給はず。宮は「さる事もあらば。かく
 さたすぎ。何事も見ぐるしきありさまにていかてかあらん。こもりるなん」とおぼし
 めしけり。たかつかさ殿のうへ(璣)ことにていひさめきこえさせ給。東宮大夫(璣)
 もいとあまたもち給て。覺しかけざりしかども。大ひめ君は小一條院に高松殿の女
 御うせさせ給ひしにかば。むこどりたてまつらせ給ひて。院のうへとておはします。
 中ひめ君(璣)は前一品の宮(璣)にひとところつれくにておはしませば。むかへたて
 まつらせ給て。いみじくかしつき奉らせ給て。それもうちにと覺しめしたれど。内大
 臣との(璣)の御事だにかくかたければ。いかてかおぼしやらん。一品宮(璣)は一條院
 の皇后宮(璣)の御はらにおはしませば。内の御いもうとにおはします。御ふみかよ
 ひ。女房などもまいりかよひて。院(璣)に行幸あるにもわたりおはせ給て御對面など
 ありけり。春宮大夫殿(璣)のうへは。帥殿(璣)の姫君にもし給へば。一ぼんのみや
 にはいなれさせ給はぬ御中にて。ひめぎみをも御子にたてまつり給へるなるべ
 し。三條宮におはします。御てめてたくかへせ給。とびはひく人くさぶらひて。い
 とおかしくひきおはせおそばせ給。このひめ君もさうの(璣)琴いとおかしくひかせた
 まふ。御かたちもいとあてにおかしげにもし給ふ。一品式部卿宮(璣)のひめ君(璣)
 たひひとところ。とのうへ(璣)の御はらからの中務宮(璣)の中姫君の御はらにもせ

よらん、原作け
ん、據小本改

けり、據小本補

中、原作事、據小
本改
御、原作さ、據諸
本改
の、據小本補

いと、據小本補

人、據小本補

させたまふ。これも内にまいらせ給べしときこゆれど。との中宮(璣)に『さらにな
 おぼしうたがはせ給そ。と人くはありさぶらはず。をのれはさる事はいかてか』と
 申させ給けり。内大臣との(璣)の御くしげ殿(璣)も。てかきうたよみまなをさへかへ
 せ給。御かたちもおかしげに。御ぐしもめてたくなむものせさせ給ける。やむごとな
 き人の御ことは。申もかたはらいたく中くなれど。昔もいまもなにをはへにか。中
 宮(璣)はこの比ぞ卅一二ばかりにおはします。うちきくにはねびさせ給へるやうな
 れど。いとわかくさかりにめてたき御ありさまなり。もの覺しめしき。心ぶかく
 ぞおはしませしける。殿などもおはしませず。我がたさまは何事もさたすぎ。うちとけ
 あやしきめうつしに。はなぐともてかしづき。さるべき人そひ給へらん。わかくさ
 かりにいまさきいつるやうならん人(璣)には。ならびておらじとふかくおぼしめした
 り。内には『あるよりはやん事なくなむ思きこえさすべき。もしこの思ごととりいづ
 る人もやと。思ばかり之』などぞ申させ給ける。おほかたのあり様もてつけ。心にく
 くだちならぶべき人なき御有様なめれど。御心にかくのみ覺しめすなるべし。宮
 だちの日にそへてはめてたくうつくしうおはします。大宮(璣)はもてかしづき聞え
 させ給ながらも。心ゆかずくちおしう思ひきこえさせ給て。心とけずおぼしめした
 り。内のうへは一品宮(璣)をかぎりなきものに思ひきこえさせ給へり。宮(璣)は二の

いと、據小本補

みや(理)をすさまじと人のおもひ申たりしも心ぐるしくて。人志れずゆづるかたなく
 くてあはれと思ひきこえさせ給へり。かく御心すこしづはかたわかせ給へれど。
 上も宮もあらずいづれもいとかなしう志たてまつらせ給。藤つぼのひんがしお
 もては一品宮(理)。にしちもては二のみや(理)の御方にまつらせ給に。一品宮の御
 かたには。殿上人さながら御まつらひ志さはぐ。ひめみやの御かたには。后宮のみや
 づかさながらさぶらひしつらひ。さまぐにおかしくなんみえける。殿上人をう
 へは一品宮ひめ宮の御方にわかたせ給。うちには女房をみやわかたせ給。こゝろ
 ぶゝろに一品宮にまいらんなど。おほかたにもてたがはず申人くありけり。齋院
 はむらかみの十宮(理)あさせ給て。年ひさしくならせ給ぬるが。ありあさせ給ぬれ
 ば。二宮(理)あさせ給べし。みかど后おぼしめしなげかせ給事かぎりなし。ことしぞ
 三にならせ給ける。御ぐしほどよりもながくおはしましけり。さだまらせ給なば。え
 そがせ給まじければ。そぎ奉らせ給。御ぐしいとながくうつくしうおはします。御心
 いとなつかしうて。内をもまたひたてまつらせ給ば。いとあはれに思ひつききこえ
 たまへり。此ことをなげき覺しめす事かぎりなし。まことや侍従大納言(新)などうせ
 給ての比。入道大納言(理)。
 みるまゝに人はけぶりとなりはて、こゝろ火のいゑはあはれなりけり。

、小本作ぬ

との給ける。入道大納言とは四條大納言にものし給。よに心にく、おぼえ給ける人
 人。公任の左衛門督と聞えし也。民部卿(理)。式部卿宮(理)。源宰相(理)。故太政大臣殿
 (理)の實成中將などころはきこえしを。さねなりの中將は。その比右兵衛督にて中納
 言にて物し給。大貳になり給へり。御子はあの子ひとり公成の宰相とて。まげの井
 の兵衛督とて。かたちはいとよくよき上達部にて物し給。女は中宮権大夫(理)のう
 へにてもの志給。いま女一ところ物し給ひまは。顯基中納言とて。故源民部卿(理)の
 子を關白殿(理)の子にせさせ給へるむことり給へりしかど。あの子ひとりうみお
 きてうせたまひにしかば。このごろ十五六ばかりにてすけつな(理)の少將とておはす。
 兵衛督(理)はまげのゐに女君ひと、ころうませ給へりけるは。大夫どの(理)のうへこ
 に志奉らせ給て。いみじくかしづき聞えさせ給。我は中宮の御めのと子に宮の内侍
 とて。かたちなどめやすかりける人をいみじうおぼして。わがもとにひかへなど志
 て物し給ける。きさき(理)の御せうとの權大納言(理)も。うへふた所うせ給ひてのち。
 『世にもあらじ』など覺しの給はせけれど。女院の中將のきみと聞ゆる人をいみじく
 おぼして。おとこぎみあきたうまれたまひにけり。いかなるよのやうにか。關白殿い
 とさりていであらはれてにはあらねど。あまう(理)の御かたにさぶらふ人(理)を志
 のびつ。いみじう覺しめすといふ事いできて。つねにたいならでこなどうみ給と

り、原作も、據諸本改

いふときゆれど。うへの御方におぼしめさん事をつゝませ給ふなるべし。故中務宮(理)の御むすめなどぞきこえさすなりし。齋院(理)ありるさせ給て。御せうとの入道兵部卿のみや(理)にたいめんさせ給て。聞えさせ給ける。

年なかりせば、
集作よはひなら
ずば

無念下 けふぞおもふきみにあはてや、みなましやそぢあまりの年なかりせば。

いみじうこよなき程の年月なりかし。いとわかくて院にならせ給。兵部卿宮かたちことにならせ給にしかば。いかてかはみ奉らせたまはん。御はらからにぞおはしましける。まことや殿上の人々もはなみ。關白殿も御らんじけるに。齋院より。

玉葉下 のこりなくたづぬなれどもしめのうちのはなは花にもあらぬなりけり。

ときこえさせ給へりければ。春宮大夫(理)の御返し。

四 風をいさみまづぞ山邊をたづねつるまめゆふ花にちらじとおもひて。このうたの返しは。かくこそ集には。

のこりなくなりぬる春にちりぬべき花ばかりをばねたまざらん。

と聞えさせ給へり。民部卿(理)關白殿(理)に。

後拾遺下 いにしへの花みし人はたづねしをまひははるにもわすられにけり。

入道殿など。まづさそひきこえさせ給ひけるをばしけるなるべし。これは法住寺のおと(理)の二郎なり。との(理)の御返し。

りけり、集作る
べし

わすれに、集
作しられざり

たづねんとおもふころもいにしへのはるにはあらぬこころこそすれ。

ときこえさせ給へり。かくて長元四年九月廿五日。女院(理)住よし石清水にまうてさせ給。これにさぶらふ人はかひなくまき事にぞ思ひける。むまのときはかりにいてさせ給。さきにみてぐらくことごとくしくてさぶらはず。ことなりぬなどもの見る人入うれしくて。ことごとくなくみる程に。院の人々。

むめなか、恐有
誤

左、原作右、據小
本及補任改

濟政期臣。行任朝臣。章任。頼國。範國。惟任。能通。やすのり。むめなか。のりすけ。よしすけ。なりすけ。これならぬもいとほくさぶらふ。たれもくまばゆきまで装束たり。殿上人隆國の頭中將。經輔の左中弁。實基の中將。さねやすの右京大夫。師良の兵部大輔。行經の少將。經季の藏人少將。上達部春宮大夫。頼宗。權大納言。長家。左衛門督。師房。右衛門督。經道。右兵衛督朝任。三位中將。兼朝。あるは直衣うえのきぬ。あまたはかりぎぬ装束いひやるかたなきに。をり物うちもの。にしきぬひものなど。心づくにめでたくおかしくみゆる程に。讃岐守頼國朝臣のつかうまつりたる御車に奉りておはします。左右のそばにかいみの月をいだしてゑがき。いみじき事をつくしたり。蘇芳のかり衣はかま。おなじいろのあこめきたるめしつぎと云もの十人つきたり。車副あをいろのかりぎぬばかまに。やまぶきのあこめをきてさぶらふ。いだし車みつ。東宮の大夫(理)權大納言(理)左衛門督(理)奉り給へり。思ひくくなるはじと

三位、諸本元

み車のすきとをりたるなり。一の車にはあま四人。弁尼。弁命婦。左近命。少將あまぎみ。二車には侍従すけ。悉ちごのべんのめのと。たいふ。べい少將。むさし。三の車には江宰相。みの小弁。兵衛内侍。御車のしりには宣旨。三位ぞさぶらひける。宣旨は源大納言(輔)の御むすめ。三位は内の御めのとの大貳の三位なり。あふよりの名はかうことのほかにてぞありける。されど御くるまのちりにもさぶらひ給。それによりてあしきことにもあらずなむ。尼はうすにび。さての人はみなくれなるをなむきたりし。ひごとにぞかへさせ給。このいだしぐるまの後に。かりぎぬすがたのいとあほからて。殿(輔)からぐるまにのりてさぶらはせ給。内大臣殿(輔)うちついき同じさまにてまいらせ給。賀茂河老りといふ所にて御ふねにたてまつる。船は丹波守章任がつかうまつらせたりける。唐やかたのふねに。こまがたをたて。かみちんしたんなどを。さまくおかしきさまにつくしたり。船さす人八人。ろうさうのかりぎぬばかまに。かねして繪をかきたるに。蘇芳のあこめをきたり。つぎく女房のふね。あたりくにおとらじといどみたれば。ころくみえていとおかし。水のうへはさらぬだにあるに。いとめてたくおかしうみゆ。いぬるのときはかりに。山崎といふところにつかせ給て。ものなど参らせてのちに。いはし水にのぼらせ給。とりゐる程にて御車にたてまつりて。殿上人てごとに火をともして。御くるまにそひたるほ

き、原作ち、據小
本改〇と、原作
し、據諸本改
御、據小木補

かげどもの山がくれいとあかしうみゆ。まづ御はらへ。つぎにみてぐら奉らせ給。つぎに舞がく物のねどもつねよりもけにきこゆ。あかづきかたに御經供養したてまつり給。めいぞむ僧都御導師にてさぶらふ。そのうちふねにかへらせ給。廿六日になりて。こぎくだらせ給程に。人々のすがたども思ひくにかへて。水のおもところなくうきたるほどに。ふねにことくなるたなといふものおかしくつくりて。やはたの別當。元命といふもの。御くだものすゑてまいらせたり。悉さへあかしくみゆ。みしまえといふ所すぎさせ給ほどに。内(輔)の御つかひにすけふさの中將。東宮の御つかひよしよりの少將まいりあひたり。此程に御ふねとめて。ものなど参らせてのちに。御返事給てまいる。いつかたにつけてもめてたし。心のみ水にうつりて。かゝることをまだみしまえの浪にうちあふ事はあらしかした。おかしくみゆる程に。よしよりの少將は御かへりなしとて。やがて御ともに参る。くだらせ給ほどに。えぐちといふ所になりて。あそびどもかさし月をいだし。らでんまき繪さまくにおとらじまけじとしてまいりたり。こゑどもあしべ打よする浪のこゑも。江ぐちのいふべきかたなくこそみえしが。廿七日のつくにつかせ給て。やがてくま河につかせ給。みちのはしべの石の。おもひくにそむきたるもおかしう。廿八日のつとめてすみよしにつかせ給。殿内の大殿など。みな御馬にてえもいはぬ御装束たてまつりさぶ

殿、據諸本補

道、據諸本補

らはせ給。御はらへやしるにまうてさせ給程。左右にものゝねどもふきたてたる。まつ風きんをしらべたる心ちしておかし。きのかみよしむね。えもいはぬ御かりやを設けてさぶらはす。御てぐらたてまつらせ給ふ程に。内の御つかひにさだよしの少將。このへをいで、河舟のさほさしてまいりけん心ち。道とをみの草のまくらもおかしうぞ思ひやらる。この程に御經供養させたまふ。定基僧都ぞ講師にさぶらひける。ことはて、これよりやがて天王寺に参らせ給。人々のすがたありさまみやこはなれて人めもつゝまぬたびのすがたなれば。いとえもいはずみゆ。むまのけしきども。波のみぎはうちふむむことにみゆ。國の人々あつまり。ところもなくみる。ありくかゝるものみるみやこの人だにところなかりしに。ましてとはりにみゆる程に。うちまじりてきけば。年おひたる人なみだうちのごひて。『みちのくにとほちのさとなどにすまひせましかば。かゝるみゆきにあはまじや。この年ごろはなにはのうらのなにもおぼえず。ながらの橋のながらへても。なにかはと思ひしに。けふこそさはとし比をくりしあしのやどり。しばのとびらもげにすみよしにつくりてけりとうれし。つなでのめでたきことのためしには。さはこれをこそひかめ』とおもひいふをきくも。おかしげにとおぼゆ。きしのまにくなみたてるまつも。ちとせまでかゝる事を。なみ風まづかに吹つたへ奉らなむとおぼゆ。とりのときはか

この、據小本補

せ、原作れ、據小本改

りに。天王寺の西の大門に御くるまといめて。なみのきはなきにし日のいりゆくおりしもおがませ給。なにの契りにか残りてとめてたくこそ。つぎに御經供養させたまふ。教圓僧都講師つかうまつりけり。この程に東宮(紫)の御つかひに大進たかすけまいりたり。廿九日にかへらせ給つるでに。かめるの水のもとによらせ給て御覽する程におぼしめしける。

(新古今和歌)にこりなきかめるのみづをむすびあげてこゝろのちりをすゝぎつるかな。

とおほせられたりけんも。げにいとあかくこそ。かへらせ給はまみちに。おもひおもひに競馬などするさへおかし。難波といふ所にて御はらへあり。判官代むねなか御つかひ。御船にたてまつりて河尻につかせ給て。十月一日午の時ばかりに。雨ふりてかみなれば。神のよろこばせ給といふ人々。あまたあり。二日あまの河と云所にとまらせ給て。あそびどもめしてものどもたまはず。人々みな物ぬぎなとす。日うちくるほどに哥よませ給ふ。すみよしの道に述懐といふ心を。左衛門督師房。

母儀仙院巡禮住吉靈社。關白左相府以下卿士大夫之祇候者濟々焉。或棹花船而取水路。或脂金車而備陸行。蓋屬四海之无爲。展多年之舊思也。于時秋云暮矣。日漸斜焉。向難波二分忘歸。舊夙留頌。過長柄二分催興。古橋傳

屬、據小本補○
爲、原作杏、據同
上改
云、原作之、據小
本改○号、原作

号、據諸本改、
下同

名。遂枝ニ酣醉。各發ニ詠哥。其詞云。

すみよしのきしのひめまついろにいで、きみがちよともみゆるけふかな。

關 白 殿(通)

(新拾遺) 君が代はながらのはしのはじめより神さびにけるすみよしの松。

内 大 臣 殿(通)

いのりこしことばひとつを住よしのみちにはこころちいにありけり。

おほかれどとめつ。紅葉重の薄様にかきて。

伊 勢 大 輔

(新拾遺) ながらへん世にもわすれじすみの江のきしに波たつあきのまつかぜ。

お・な・じ・人

うちなびくあしのうらははにとひみばやかゝるみゆきはいつかみしま江。

弁 乳 母

あしわけてけふやこゝにもくらさばやうちすぎがたきみしま江のなみ。

まづみればかへらむかたもわすられてまことなりけりすみよしのきし。

小 弁

みやこにはまちどをなりとおもふらんながらへぬべきたびのみちかな。

あきのまつ、集
作まつのあき

なみ、繪本作名
に

すみよしのきしみえぬまでなみよれるみやこのかたもわすれぬるかな。
すみよしにまづもみゆきはありけめどこはめづらしきみしま江のうら。

弁のめのと

橋ばしらのこらざりせばつのかのまらずながらやすぎはてなまし。

小 弁

をとにのみきしもさるくすみの江のなみたちかへることぞものうき。

む さ し

とまるべきうらにもあらぬをいかなればあしわけぶねのこぎかへらん。

伊 勢 大 輔

(後拾遺) みやこいで、秋よりふゆになりぬればひさしきたびのこゝちこそすれ。

兵 衛 内 侍

なみだかききみがみゆきぞすみよしのうらめづらしきためしなりけり。

弁 内 侍

ながめつゝみまくぞほしきすみの江のまつもむべこそとしのへにけれ。

弁 命 婦

あさせゆくつなでのなはもめづらしききみがみゆきをためしにはひけ。

これもすこしをかくなり。うしるときばかりに。御ふねよりありさせ給ひてのぼら
 せ給へば。みやこには曉方におはしましつかせ給へば。人の家どもにおどろきて。は
 じめのなごりを日比わすれがたくおもひければ。かどわけさはぎみしあかつきのあ
 さがほ。よるのころもなかへさまなどにてけがてある人などありしこそ。あかし
 かりしか。日比のありさま。浪のうへあしまをわけしほどを思いてつ。わかき人な
 どはこひあへり。この程は。これにて世中すぎぬ。齋院につるにひめ宮(璿)さだまら
 せ給ぬれば。みかど(繼)后(璿)おぼしさがせ給事かぎりなし。此ごろはことごとくな
 く。ふたところの御中におはします。十月に御はかまきせ奉らせ給。女房きくもみぢ
 をちりつくしたり。その日になりては。うへの御つぼねにてふたところ御涙もと
 めさせたまはず。ゆゝしくなむみえける。日ぐらしふたところの御ふところにおは
 しまさせ給。御めのは。ままさみちの丹波中將のむすめの權中納言のきみ。あふみの
 中納言(璿)のむすめ。中納言の内侍のすけ。兵衛督(璿)の北の方になりたる宮の内侍
 也。年比候ける侍従のきみとて。かたちなどいよくて。内侍なるぞさぶらひける。
 御車に奉る程。侍従のないしにいだかれさせ給て。これはのらんとてありさせ給は
 ざりければ。いかにはせむとて。宮の御からの御ぞをたまはせて。いろゆるさせ給て
 のせさせ給。ほどくにつけては。さいはひ有けりといはれけり。中納言のすけたは

み、原作に、據諸
本改

り、原作る、據諸
本改

こと、原作、ころ、
據小本改、或當
作一つ〇ぬる、
小本作ける、
れ、原作る、據小
本改

の中將の君のさぶらふべきにてありつるを。かれば中納言すけぞ御はかしなどと
 りてのり給。こと御めのとだちはこと車にてぞまいり給ひぬる。みつにはおはしま
 せど御ぐしながく。れいのむつばかりのこともにておはします。このほどなかせ給
 て。えちりさせ給はぬこそ。ちごにはにさせ給へりけれ。宮の内侍は兵衛督むかへた
 まひつ。さらにまいらせたまはず。かくてうちの御めのとの大貳の三位と聞ゆる
 は。とのうへたかづかさ殿の御めのととなり。その人のこにたんばのかみのりた
 うといふ人の家の三條なるにいてさせ給へり。さかきなどさす程。たいのとはか
 はりておかしくみゆれど。内にも宮にもおぼしめしりて。御つかひ隙もなくたて
 まつれり。御有さまもゆかしういみじく思きこえさせ給へれば。殿上人上達部我も
 我もとまづまいりてのちになんうちには参りける。上達部も殿上人も参りたる人
 に。『院にや参りたりつる』と、はせ給に。『さも候はず』と申はすさまじく。『まいり
 たり』と申人には『たれにかあひたりつる。何事かおはしましける』などとはせ給に。
 たれもくいかでかはまづまいらんと思はざらん。左衛門督(璿)ときこゆるは。故
 右中務宮(璿)の御子なり。春宮權大夫かけ給へる齋院(璿)の別當になり給へり。長官
 には藏人源弁つねなが。帥中納言ときこゆるみちかたのこ也。六條左大臣殿(璿)の御
 むまごなり。四月には御けいの日やがて大せんにいらせ給。うちぢかくて女房など

く、據小本補

ま、據諸本補

まいりかよふ。さぶらひなどぐして。つゆけきみちをわけまいるもあかし。御けいの女房の装束など思やるべし。あふぎなど殿上人心くにつくしむべし。内よりはあぼつかなきことをのみ覺しめす。八月卅日に中宮(璣)行啓あり。蘇芳のこくうすきにほひなどに。くさのかうの御ぞなどたてまつる。いとあかしうなまめかしくみてたき御有さま也。月比の程に。こよなくをとなびさせ給にけるを。おはれにみたてまつらせ給。ふつかばかりおはしましてかへらせ給を。いとあかずくちあしうあぼしめさる。うちの御つかひの霧をわけてまいるも。いとあかしうあぼしめさる。十月ころもがへ。五節臨時の祭などいひて。こころのどかならでずぎぬ。一品宮(璣)は。あけくれめかれずかしづき奉らせ給て。御對面などあるべしとあれど。一品にならせ給ぬるはかたじけなし。御みづらなどゆはせ給ふて。のぼらせたまはんとてといまりぬ。なべてならずいみじくもてかしづき聞えさせ給。殿上人朝夕にまいりまかて。まりけに「小弓いなどあかしくわそびあへり。子の日にやますげをてまさぐりにして。權亮かねふた。」

あぼつかなけふはねの目をやますげのひきたがへてもいのりつるかな。といへば。出羽弁。

に、諸本元、當衍

いさよりはまづをもあきてやますげのながきためしにひきやくらべん。

などのひかはすほどもあかし。殿上人などまいりて小弓いなどするに。たいふ。

けふよりはねの日の松とあつさゆみもろやにちよをかけてひかなむ。

かへしわすれにけり。としかへりぬ。れいのことさはがしくてすぎぬ。春深くなるまに。齋院わたらせ給べきとしにて。心ことにあぼしめしいそがせ給。内にはえどころつくも所にて。女房のもからぎぬにえがき。つくりえなどいみじくせさせ給。宮にはみやづかさうけ給て。そめ殿うちとのにつかはし覺しいとなませ給。御禊にはやへ山ぶきをひねりかさねて。やへくのへだてには青きひとへをかさねつ。いくへともあらずかさねてをしいだされたり。まことのはなのさきたるゆふはへとみえていみじくあかし。まつりの日はうらうへのいろと。こきふたり。うすき。ふたり。やがてあなじ色のうはぎからぎぬなり。くれなるのこきうすき。むらさき山ぶき。あをき蘇芳など皆ふたりづなり。かへさにはむらごにて。はかまうはぎも。も唐ぎぬも。うす物にて。もんにはかねをしぬい物どもをし。心々にえなどかきたれば。すいしげになまめかしうあかし。上達部もとの内の大殿をはじめ奉りておはしませば。いみじうめでたし。上達部殿上人のこるなし。日ごとにいみじききものにてなむありける。このほどすぎぬれば。のどやかにて。うちわたりもつれくにおぼしめさるれば。女院いらせ給へり。うへの御つぼねにおはしまして。女房ぞ弘徽殿につぼねして

か、原作う、據諸本改
本改〇う、原作
そ、據諸本改

ありのぼりける。めづらしきほろ殿ずみもあかし。春宮(嵯峨)の一宮(嵯峨)は。此院(嵯峨)におはしませばいらせ給て。春宮の御方におはします。一品宮(嵯峨)はこの宮の今ひとつが御おとうにおはしませば。世の人「まだきよりいみじくよき御あはひ」と。聞えさするもげにさもやあはしませさん。女院の御方に一品宮わたらせ給。おさなくおはしませばひるも渡らせ給。志もの御局より。關白殿などぐし奉らせ給てのぼらせ奉らせ給。なてしこのをり物のひとへがさね。さうぶの小袢たてまつりたる。はなばなとさかりに櫻のさきこぼれたる心ちして。けだかく匂ひらうくしく。今めかしうあかしげなる御ありさまたぐひなし。としぞ九にならせ給ける。いみじくめでたしとみたてまつらせ給。院(嵯峨)もかゝる御ありさまをば。まだ御覽じならはせ給はず。あとこ宮をのみならひ申させ給へるに。あはれにめづらまうつくしと見奉らせ給。齋院(嵯峨)は又なつかしうあかしげに。らうたげにほひやかに。なてしこの花をみる心ちぞせさせ給へる。みまさかの三位などまた「よき人あまたみたてまつれど。このあまへ達のやうなるはおはしませいりき。一條院の女二宮。故女院(嵯峨)におはしませし、かばみたてまつりし。それぞいとあかしげにおはしませし、か共。此ふたところの御やうにはえおはしませし」など。けちえんにほめ申給さま。ほこりかにおひぎやうづき給へり。大宮よさりのぼらせ給て。中の戸あけて御たいめんある

と、原作こと、
據諸本改

と、據小本補

と、據諸本補

ほど。いとやすらかにうとからず。めてたき御あはひなり。よき人の御あはひは。はぢかはし申させ給て。つゆけはひももらさじとつゝみ。女房なども心したり。内東宮わたりおはしますも。いとめてたし共あるか也。一月ばかりおはしませしていでさせ給ぬ。春宮には一品宮(嵯峨)の御はらに。ひめみや二所(嵯峨)おはしませども。それはうとくて。みたてまつらせ給ことなし。ことしも十月に齋院(嵯峨)に行啓あり。このたびは五六日ばかりおはします。十月廿日庚申なるに。上達部殿上人まゐり。あそびのかたの人も。ふみの道の人々もめしあつめ。のこるなくまいりて歌よみあそびなどあり。げらうもそのみちの人はまじりたり。權大納言(嵯峨)。

と、小本作は

よろづ代にいろもかはらぬさかきばのちるもみぢ葉にゆふやかけまし。
いろさむみえだにもはにも霜ふりてありわけの月をてらすしら菊。

左衛門 督師房

こよひしもくまなくてらす月かげはのこりのきくをみよとなるべし。
おほかれどかゝず。女房。

月かげにてりわたりたるしらぎくはみがきてうへしふるしなりけり。
おほかれどといめつ。月あかくあかしき夜。權大夫(嵯峨)口ずさびに。
さかきのみこそことにみえけれ。

と、據諸本補

との給へば。女房。

神がきは月もみぢもありけれど。

などきこえさせかはしけり。心のどかにもおけしますすべけれど。あかてかへらせ給も。かゝる御有様」に「はくるしげなりやとぞ。

に、諸本元、當行

榮華物語卷第三十二

歌合

たかづかさ殿のうへ(瑞)七十賀せさせ給ふ。女院(瑞)中宮(瑞)などれいのわたらせ給。院(瑞)は曉に渡らせ給ぬ。宮はひる内より出させ給。ぎしき有さまま(瑞)ふりにし事な(瑞)ど。なをいとめてたし。御興よせてたてまつる程など。うちのごせん。うへの御つぼねの志とみとりのけて御覽す。弘徽殿藤壺のはさまのいとせばきに。上達部殿上人たちこみ。近衛づかさやなくひおひてたちやすらひたり。なだいめん(瑞)の程などいとめてたし。内大臣殿(瑞)まいらせ給て。御むかへにまいれとさぶらひつるなり。おと(瑞)はかしこの事どもみくちいれさぶらふ。』としげくて』など申させ給。いとものくしくきらゝかなる御ありさまなり。東宮大夫(瑞)權大夫(瑞)權大納言(瑞)な

ま、原作き、據小本改、據小本補

なれ、據小本補

ど。御せうとの殿ばらみなまいり奉へり。宮(瑞)はさくらもえぎのいつへの御ぞを。みなをり物にて。五ばかり奉りて。あかいろのかうの御ぞ。ちずりの御裳たてまつりてめてたき御ありさまにて。御もてなしよういなど。おもりにかはづかしげにおはします。三十五六にならせ給へば。思やりはおとなびておぼえさせ給へど。廿ばかりとぞみえさせ給。げらうなどだに。よき人はねびてみゆることもなし。ましてさたすぎなどせさせ給べきにはあらず。御ぐしは御ぞに五六寸計たらせたまはて。いろにけうらにたをくとしてひまなくかゝらせ給へり。女房はかねてれいのちんにいてねにけり。みまさか三位御ぐしおげたてまつり給て。やがて御こしにさぶらひ給。女房はふたつ色のこきうすき。えびぞめのおりものうはぎ。こうばいのりうもんのからぎぬ。もえぎのものごし也。れいのこと(瑞)な(瑞)れ(瑞)ば。うねむまのりなどぎしきありさま。さま(瑞)のちなじ事なり。いらせ給程のらんじやうなど。めなれたる事もなくめてたくいみじきは。たかづかさどの(瑞)う(瑞)は。さばかり御覽じつくして。まかとも又けふも御なみだこぼれさせ給。御堂供養に四所(瑞)わたりあはせ給。行幸行啓ありしおりになすらふべくもおもはくはあらねども。ぎしき有さまかはる事なくめてたければ。かくおぼしめすにこそ。むかしの御更をもおぼしめしいづべし。舞はとの(瑞)のわかぎみ(瑞)せさせ給べしとありしかど。さもあらで諸大夫のこども

き、據小本補

ぞまひける。その日のぎしきありさま。女のゑるす事ならねはゑるさず。るん(璣)の女房は。みなうす色にむらさきのからぎぬぞきせさせ給へる。あまの御装束させ給へるも。いとあはれにめてたくみえさせ給。よさりは皆さま／＼にかへらせ給ひぬ。さま／＼の御をくりものなごいとめてたし。まことやまたの日は昨日のありさまざしきを。せいりやうてんのひんがしおもてにてせさせて御らんず。一品宮(璣)のところせかりなんとて。いでさせ給はずなりにしかば。御覽せさせ給はんとてせさせ給なるべし。樂など同じくせさせて御らんず。春宮(璣)もわたりて御らんず。中宮(璣)の女房。うへの御つばねのしとみなが／＼とあけわたして。をしいでつゝるなみたる前より。春宮のぼらせ給。いともの／＼しくめてたき御有様之。中宮(璣)一品宮(璣)は二間にて御らんず。けふはくれなゐどもにえびぞめのをりものたてまつりたるいとめてたし。一品宮は。紅梅のほひに。こきうちたるむめのありものうはぎ。もえぎの小掛などたてまつりたる。はな／＼とけだかくうつくしう。いはんかたなき御ありさまなり。内の覺しめしたる御けしきをろかならず。との(璣)よりはじめてまいらせ給へり。きのふははるかなるにはにて。さやかに御らんせざりしを。けふはあまへたぢかくてまひのありさま。物のねなどもまさりてなむありける。夜ふけてぞ春宮もかへらせ給ける。事はて、皆人々まかて給。中宮はやがてうへの

くる、集作たつ

御局におはします。としものこりなくて。御佛名やなにやとものさはがしうてすぎぬ。まよや御賀の哥は輔親。赤染。いでは。經任。頭弁のは(璣)にてものし給。佐理の大貳のむすめぞかき給ける。赤染。正月朔日臨時客きたるところ。
(後拾遺集上)
 むらさきのそでをつらねてきたるかな春くることはこれぞうれしき。
 七月七日。

輔 親

あたらしき春のはじめにくる人はみとせのともとおもふなるべし。
 子の日。

としごとのはるのはじめにひくまつのつもれるかずは君ぞかぞへん。
 かず／＼にはうるさきやうなれば。なにかはととめつ。としかへりぬれば。ついたちのありさまなごれの事なり。院には行幸行啓など。いとめてたくまちつけたまつらせ給て。まづ御こしよせぬ程も。くもりなきあまへに。なが／＼とぢむひきて。中門に御こしよせて。わたどのよりいらせ給ほどいとめてたし。頭御はかしとりて内侍につたふ。内の女房かねてまいりて。おもものまいりなごれのぎしきなり。拜したてまつらせ給程など。みる人つねの事なれど。なみだこぼれてめてたくいみ

に、原作に、據小本改

の、據小本補
十八、據小本補

じ。女房をいはずさうずきて。をしこりてさぶらふ。うちいづることはなし。中宮には大饗ありて。拜禮などいとめでたし。正月廿日の程に内宴あるべければ。ことごとなく藏人^のありさまかたちの事を。人にすぐれてとおぼしめす。御まかなひは。齋院の御めのとの中納言のすけつかまつり給べし。藏人^{十人}を内に四人。院春宮中宮二人づゝいださせ給。院にはかたちよき人おほくて。内春宮にも二人づゝたてまつらんとおぼしけれど。わづらうよし申て参らざりければ。さしもおぼしめさざりけるおどりの人をぞせさせ給ける。仁壽殿に御まつらひせさせ給て。院中宮の御つぼね志て参らせ給へり。けふもうちいでなどはせず。こなたかなたのみじくさうずきてさぶらふ。藏人は院のはからあやを泥こんじやうして。もんをとめてよつにしきのうはぎなり。中宮のは色く^のふたへもん^に。ひとへはうちて。それもあか地のからびしなるにしきのうはぎなり。あふぎくたいひれなど。いみじく心をつくして。あたり給へる人いどみ給へり。院のは權大納言^の。中宮のは左衛門督^のに給へる。上達部などけふはみなあをいろき給へり。ぎしきありさまなど。いとめづらしうあかしき事のさまなり。三月には又のりゆみあれば。まへ方うしろがたとこともわきて。まへがたは賀茂にまいり。いまひとかたは北野にまうづ。その比の頭は故民部卿^のの御子隆國の頭中將。今ひとり小野宮^のの御むまご經任弁。齊信

哥、諸本无、當衍

の民部卿の御子にま給。さえなどありてうるはしくぞものま給ける。ふみつくりうたよみなど。いにしへの人にぞものしたまひける。のりゆみにもみやのほどせさせ給。權大納言^の左衛門督^のなどのいたまふ程は。かたぐ^にこころよせの人ねんじけり。かけ物は中宮せさせ給。權大納言顯基の宰相中將は。一ぼんの宮の別當。左衛門督^のきん^の宰相は。齋院^のの別當にもし給けり。されば一品宮の女房も齋院のも。ねんじきこゆるに。まへ方かちたれば。人く^かもにまうて。かへさに齋院にまいりて。あそびなどしていつるほどに。おいてくるまに「哥」。

ひきつれてかへるをみればあづさ弓もろやはいとらうれしかりける。
隆國の頭中將。

うれしきはもろやのみかはあづさゆみきみもかひなくこころありけり。
かへりまいり。うちにておにの間の方にさぶらへば。御前にめしてありさまなどとはせ給に。『かへさに院にまいりてさぶらひつれば。めてたきてきて。かく書てなんさぶらひつる』とそうす。かへり事などへはせ給て。おかしとおぼしめしたりけり。三月卅日、がたに。いとしなひながく花おもしろきふぢを奉らせ給て。鷹司殿^のより。ふぢつぼのはなはことほりあたらじとみなもとさへもひらけたるかな。
御かへし。宮^の。

か、原作る、據諸本改

ふぢのはなかみさびにけるみなもとにほひおとれるすゑぞありうき。
からのかみに。いといまめかしくおかしくかへせ給へりければ。殿のうへいみじく
めでたてまつらせ給けり。あまたおはしまし、が。御かたち御ぐしいづれともなく
うつくし。御ても一ところわろきおはしまさうりけるが。さきの世のさるべきにて
おはしましけるにこそ。三月つごもり方に。藤壺の藤の花。えもいはずおもしらく。
へいにさきかゝりて。みかは水をやり水にほりわけてながさせ給へるに。さきかゝ
りたるいとおかし。この花の宴させ給。上達部殿上人参りて御あそびあり。すけみ
ちの弁琵琶。左衛門佐のりすゑ和琴などひきあはせ給。大夫(源)權大夫(藤)などもの
すむじ。哥うたひなどあそび給。女房。

むらさきの雲たちまがふふぢのはないかにおらましいろもわかれず。
夏にだにちぎりをかけぬ花ならばいかにかせまし春のくるゝを。

女房殿上人などおほかれどといめつ。四月まつりなど物さはがしくてすぎぬ。祭の
車を小一條院の下部うちたりなどいふ事ありて。院の人せめられさせ給て。檢非違
使どもるなみて。人もやすくもあらず。いみじき事どもに世人申思へり。日比ふれ
どるなどふたぎて。いとみじくかたじけなきこと、世人も申おもへり。院の下部
のしりたりけるげすの。いだし車につきたりけるを。たはぶれてうちたりけるを。車

させ、據諸本補
なり、大本作な
る〇ける瑠璃、
據諸本補

うちたりときこまめしたりけるとぞ。小一條院には。故左大臣殿(源)の女御(藤)の御
はらに。男二人(源)女一ところを。一宮(源)は中務濟政のはりまの守のむこにてもの
し給。二宮(源)は三井寺に大僧正かしづき聞え給事かぎりなし。高松殿の御はらの若
宮(源)はうせ給て。女宮一ところ(源)ぞおはしますは。たかまつどのうへ(源)の御か
たはらはなたずかしづききこえさせ給。東宮大夫どの(源)のひめ君の御はらにも。お
とこ(源)女あまたおはします。高松殿にさぶらひける人をおぼしめして。かたときも
御覽せではえおはします。にしの院といふ所にすゑさせ給て。おとこ女あまたむ
ませさせたまへりける。まもつけの守(源)なりける人のむすめなりける。瑠璃女御
と世人きこゆめり。童名なるべし。むかしも今も。かゝるさいはひ人たえ給はぬにこ
そ。五月十日ばかりにぞ。いかにおぼしめしたることほりなり。内大臣殿はこの院の御
くだりける。院は世中うしとおぼしめしたることほりなり。内大臣殿はこの院の御
いもうとの女二宮をぞうへにておはします。御心よせありて。いとおしくこの程も
覺しなげかせ給けり。御むすめまいらせ奉らんとは覺しのためへど。中宮にも御け
しきよくて参らせ給て。宮達をもてあそびきこえさせ給。院のかやうるん殿にわた
らせ給ておはします殿のうへに御對面などあり。との、御せんはいかならん。けう
らをつくしても御覽せさせむとおぼしめしたり。いづみのうへのわたどのに四條中

納言(職)まいり給へるに。出羽弁對面きたるに。殿うちより御ひとりもちておはしまして。そらだき物せさせ給てそひおはします。なか／＼いとつゝましくものきこえ給も。うちいでにく／＼おぼえけり。まにかきたる心ちす。そのころいよの中納言の君。龍のをとをきして。

わきかへりいはまをわくるたきのいとのみだれてをつるをとたかきかな。

出はの弁

とくれどもおはにもあらぬたきのいとをつねによりてもみまほしきかな。

などはかなきことをいひつゝあかしくらすも。おかしくなむありける。八月つごも

りに。殿上の人々さがのに花見にいきたるに。中宮(職)の大盤所に。をみなべしのち

ひさき枝を。あふぎのつまをひきやりて。さしたるにかきつけ侍る。東宮權大夫(職)。

(玉手杖上)ひとえだの花のにほひもあるものを野へのにしきをおもひやらなむ。

返し。ごぜんのなてしことをありて。源少將(職)。

も／＼しきの花やちとれるきりわけてたちまじるらんへのにしきに。

まむじやうるの日。雨のふりくらすに。

日かげもみえずくもるけふかな。

源少將

が江侍い

夫、原作宮、據諸本改

あまてらすとよのあかりとちもへども。

といへりけり。一條院の一品宮(職)をは。入道一品宮と申す。皇太后宮(職)のをば東宮

(職)の一品宮(職)と聞えさす。當代(職)の三人おはします。齋院(職)は二品におは

しませど。つかさかうぶり給はらせ給。東宮の一のみや(職)は内(職)に御子もおは

しませねば。うたがひなきまうけのきみと思ひ申たり。あちどのべんは。此宮の御め

のとにてさぶらふ。三月にとう民部卿(職)うせ給ぬ。くちあしきことにおほやけより

はじめておぼしめす。大納言に左衛門督(職)なり給ぬ。源大納言ときこゆる。内大

臣どの(職)の太郎三位中將。二郎のぶもと。三郎のぶな(職)かときこゆる。ふた所ながら

侍從にて物したまふ。四郎(職)は法師にて。ながたにの僧都にたてまつり給へれば。

いみじきものにかしづききこえ給。殿(職)には御子のおはしまさぬことを。口おしな

どもよのつねなり。うへの御せうとの源大納言(職)。内大臣殿の中將(職)をぞ。ここにま

たてまつらせ給ける。若君(職)ひと／＼ころこそ十ばかりにておはしますめれ。鷹司ど

のうへをぐしたてまつらせ給へる。御かたちうつくしうあいぎやうづき。ふくら

かに匂はせ給へり。故式部卿の宮(職)の左兵衛督(職)のむすめのはらなりけり。殿に

二所さぶらひけるを。あね君はのりまさの但馬守のめにておはす。ひと／＼はわか

かぎみうみたてまつり給ひてければやがて参り給はず。故中務宮(職)の御もの、け

る、諸本元、當行

いとこはくて。さまたげきこえさせ給へば。おはしますことはたえたり。まことや女院は無量壽院のかたはらに御堂たてさせ給へり。ついぢつきわたしこめて。いみじくめてたくつくらせ給へり。沈まらんをかうらんにし。蒔繪らてんくしのはこなどのやうにせさせたまへり。柱繪などもよのつねならず。くさうつ所には。瑠璃をくぎのかたにふせなどよろづをつくしたり。としごとの九月には。御念佛せさせ給。女房えもいはずさうずきてうちいてたり。僧の装束やがてせさせ給てたまはず。ちいさき僧共のめぐるもいとつくし。上達部殿上人残るなくまいり給。おりくどくつくらせ給。いとめてたき御ありさま也。長元八年五月。卅講はて、關白どの哥合せさせ給。殿上の人々わかたせ給。左方は。藏人頭經輔。濟政。資業。良頼。春宮亮良經の左馬頭。行經少將。中宮大進義通。經季少將。經長弁。經成少納言。信長侍從。範國。資任。憲房。經尹。實綱。藏人は俊經。季通。貞章なり。右がたは。實經朝臣。兼房中宮亮。資通の弁。俊家の中將。通基の四位侍從。師經内藏頭。行任。舉周。爲善。國成。良宗の右衛門佐。資綱少將。經家少納言。經季左衛門佐。三河守經信。定季信濃權守。藏人は茂清。家任。頼家とかへせ給て。題はことどころもとむべきならず。たゞこのまぢかくみゆることをこそはとて。月。五月雨。池水。菖蒲。螢火。罹麥。郭公。照射。これのみやほかの思やる夏はあらめとて。祝戀とかへせ給て。各々かた

や、諸本作なり

ぬ、據諸本補

に左には經輔頭弁。右には良宗藏人。右衛門佐にぞめしてたまはせたりし。頭弁は民部卿の服にて。こもり給へればなるべし。さまぐにいとみたる程に。おなじ月の九日に。殿上のわらはをかきわかたせ給へり。左には殿のわか君。行任が子。のりくにが子。のりたうが子。右にはいゑつねが子。のりなが子。よりくにが子。わかたせ給へり。これは御賀にまひせし人のこなり。右すこしことたがひたるやうなり。十二日になりて。上達部のさるべくわかやかなるをわかたせ給たり。左には兼頼の宰相中將。公成の右兵衛督。みぎには顯基の宰相中將。隆國の右兵衛督との給はず。いづまかいかとと思ひ申。さるるときはかりに。左のかたの人々色々のうすものをやかたにはりて。かねのとこなつのはなをまたる船ふたつにのりて。ふえけしきはかりふきすさびて。伊勢の海うたひて。いけの心にまかせてさをさしてまいるをみれば。ふたあるのなをしさしぬきに。くれなるのうちたるまろきひとへをぞきたる。藏人はあり物のさしぬき。あをいろの水にうつりたるかげおかし。いけのうへのそりはしにふねをよする程に。上達部二人たちてむかひあひて。さるべき人々すこしばかりをぐしてまいりたる。のちに藏人俊經。ふたあるのうつくしきとりて。ひろげしくをみれば。むらさきのふせんれうに。青きざうがんをつけて。伊勢海と云さいばらをあし手にぬひたり。かゞみの水かねのすなどしたるすはまを。すへみち

據諸本補

さだおきらとりて。うちしきのうへにふす。かねのすにはこをほり物にまたるかねの机にすゑたり。かすさしのは。かねのすはまに沉のいしたて。かゝみのみづなどまたるうへに。をのへの松をうへうつすをかすにまたり。わらはかすさしとおぼしくてゐたり。かゝる程に。右人まぢかくなるほどに。車のおとついけ。さきをま[こ]とに山河のたきつせのをとよりもけにのゝまりてまいる。ことさらにするときこえておかし。おとらずせんと思ひしことのがひぬるが。くちあしきなるべし。まづさるべき人々は。俊家の中将。とこなつのいだしうちぎ。ふたあゐのなをし。あをいろのをりものゝさしぬき。通基の四位侍従。ふたあゐのなをし。あをいろの織物のさしぬき。こきうちぎぬ。實綱の少將。ふたあゐの直衣さしぬきに。あをきちりものゝひとへ。藏人二人。をり物のさしぬき青色にて。かねのすはまに沉のませゆひたる。かねのとこなつのくさむらをかきたり。哥はなにゝかきたるぞなど心にくきほどに。はやう花にてふのいみじうおかまきが。とをばかりるたるなりけり。かすさしぬきの物はうちのおまへとおぼしくて。たけのだいよりぬきいてたるを。かすにはしたり。かゝみの水沉の石たてゝ。さまざまのくさをまたぐさにて。色くのさいくしてつくりたるも。ことさらとみなせばおかし。かくて藏人とりてかすさしにはゐたり。左右いどみてかたわきける程に。とのゝ若君左により給にければ。いどまんも中

實、一本作資の、原作を、據小本改

く、原作で、據諸本改

資、原作季、據諸本及辨官補任改

に、據小本補

中なりとて。右はたゝおひらかなり。左の講師左の中弁つねなが。右のかうし右中弁資通参りてゐたり。三位すけちかをぞこの哥のかちまけ定むべき人にてめしたる。哥のよしあしはいかゞさだむらん。神さびてゐたるをもゝちけしき。ゑにかきたる心ちして。これよりほかはたれをかはと見えたり。くらうなれば火などもまて。左行經の少將よりて。すき箱をあけて。ほり物のほねにざうがんのかみをはりて。題の心をさまざまにかきたる扇をひとつづとりて。かうしつねながのべんにとらす。哥は内の御めのと宰相の内侍のすけかきたり。右には兼房の右衛門佐。蝶ゐるとこなつのえだをありてすけみちにとらす。かた人ちかくまいりよりてゐたり。左は北。右はみなみにぞありける。かうする程かぎりなくおかし。夜やうくふけて。月のすみのぼりたるほど。いけのこゝろきよさも。哥の題の心さへ[こ]かなひておかし。とのゝ女房の装束は。うすものをなでしこにて。色くにてひねりかさねたり。うたはうるさきやうに人の思へれど。かくいひくゝてかゝざらんもほいなければなむ。

一番左勝

月

夏(後拾遺)

右

四位少將行經權大納言長家

赤染衛門

ける、集作けり

に、集作は
茂、一本作競

(金葉歌)
やどからぞ月のひかりもまさりけるよのくもりなくすめばなりけり。

二番左勝

相 摸

五月雨

(後拾遺歌)
さみだれに水のみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞおもふ。

右

東宮學士茂忠朝臣

五月雨のそらをながむるのどけさはちよをかねたるこちこそすれ。

三番左

池

式部大輔資業朝臣

千代をへてすむべきみづをせきれつ池のころにまかせたるかな。

右

少納言經家

(新撰拾遺歌)
としを経てすむべき君がやどなればいけの水さへにむらざりけり。

せきるゝわろしとて右勝

四番左

菖蒲

右馬良頼朝臣

あやめ草たづねてぞひくまこもかるよどのわたりのふかきぬまゝて。

右

東宮大夫頼宗

右馬良頼朝臣、
古本押紙作頼朝

中、原作大、據小
本及補任改
おもふ、集作み
る

むかしよりつきせぬものはあやめ草ふかきよどのにひけばなりけり。

五番左勝

瞿麥

四條中納言定頼

(後拾遺歌)
とこなつのにほへるには、からくに、おれるにしきもまかじとぞおもふ。

右

赤 染

にはのおもにからのにしきをしく物はなをとこなつの花にざりける。

猶床なつといふことわろしとて。右まけぬ。

六番左持

郭公

茂忠朝臣

(後拾遺歌)
なかぬよもなくにもさらほとゝぎすまつとてやすきいやはねらるゝ。

右

赤 染

夜もすがらまちつるものをほとゝぎす又ともなかですぎぬなるかな。

七番左勝

螢火

右馬良經朝臣

(後拾遺歌)
さは水にそらなるほしのうつるかとみゆるはよはのほたるなりけり。

右

赤 染

名にたてる五月のやみもなかりけりさはの螢のまがふひかりに。

八番左勝

昭射

式部少輔公資

五月やみあまつほしだにみえぬよにともしのみこそやまにみえけれ。

右

赤 染

さつきやみほぐしにかくるともまびのうしろめたくやまかはみるらん。

右哥よしとて。輔親そなたに心ある程に。左人々ともしびとは。れいの人のやどにともすそこそいへ。さらにかゝらずと申に。ふるき哥にともす火はとよみたり。さらねどほぐしにかくといひつれば。ことともま火をさ云やうなしと申せば。輔親もまことに哥は心ばへありおかしけれど。かばかりにてもしかいはれぬればとて。右まぐるになす。

九番左

祝

能因法師

きみが世はまら雲かゝるつくばねのみねのついきの海となるまで。

右勝

すけふさの少將

おもひやれやそうぢ人のきみがためひとつころにいのりのりを。

左うた山の海となり。うみの山となりけるもあいなし。海はうみ。山はやまにてあらんこそよからめとて。

十番左

戀

能因法師

くろかみのいろもかはらぬこひすとてつれなき人にわれぞあいなぬ。

右勝

春宮大夫頼宗

あふまでとせめていのちのおしければこひこそ人のいのりなりけれ。

いのり、集作い
れて、原作はぐ、
據諸本改

夜いみじくふけゆき。月のかげすしく。物のどやかにみなされて。今もむかしもかかるたぐひあらんやとおほゆるほどに。これかれさるべきうたども詠じて。御あそびあるに。ふえたけのよふくる程もいとあかしきに。左がたかちわざと覺しくて。沈またんのかひずり。かゝみのみづやりなど志たるわりご共参らせたり。すけちかには。装束ひとぐかつけさせ給。つぎに上達部のいて給ふ程に。内大臣殿大納言三人に御むまたてまつらせ給。つねのとなれど。こよひはつねよりもまさりておかしくみゆるに。ことこのありさま。ちよをもそへまほしかりし。夜のおけゆきしこそ。あかざわりなかりしか。との(鯛)のわかぎみ(鯛)十一にて御元服させ給ふ。いみじうふくらかにあいきやうづき。にほひやかなる御ありさまなり。ほどもなく少將にならせ

に、據小本補

給て。臨時祭の舞人せさせ給。内大臣殿(職)の三郎兵衛佐(職)ときこえさせ給とまはせ給。いとつくしうものせさせ給。春宮大夫殿(職)には。太郎兼頼の宰相中將。二郎俊家の中將。三郎能長の侍従など。いとあまたこと御はらにもものし給。但馬守もとさだとてもものし給。十六なるをたちまち(に)なさせたまへるなりけり。としかへりぬれば。少將どの(職)かすがのつかひせさせ給。殿上人われもくとのこるなく。えもいはぬかりぎぬすがた。おとらじといどもさうずきたり。いとめてたくてわたらせたまふを。との(職)はかぎりなしと覺しめしたり。殿ばらもいみじくうつくしがり。めできこえさせ給たりつる。御との(職)う(職)いとかなしうまたてまつらせ給。つねに中宮(職)にうへはまいらせ給。七十にあまらせ給へど。御ぐしはゆらくとふさやかに(て)おはしますも。いとめてたくおはしましける御ぐしなればなるべし。うち一品宮(職)の御もぎの事おぼしめしいそがせ給ふ。御てうどは。くら人よしきよにもほせ事たまはせて。いみじくなべてならずとおぼしめしたり。御屏風のゑ。このからの繪どころに。繪師めしていみじくせさせ給。ねうばうの装束も。からぎぬうはぎ。童の装束など。人々(あ)あたり三日(か)ほど。おとな三十人。童六人が装束を。いろく(さ)ま(く)に。なべてならずとおぼしめす。あくればまづわたらせ給。御調度めして。かつ御覽じ。その事かの事など。ことくなくおぼしいそがせ給。あてにけ

が、據小本補

めし、據小本補

て、據小本補

めす、據小本補
させ、據小本補

だかくおはします御ころにも。このみちはかぎりなき御事にこそ。經任の弁宰相になりて。とし(職)の中將頭になり給ぬ。御心におぼしめしけるは。東宮(職)にかぎりあるくらゐなりとも。このころ讓きこえて。一品のみや(職)をやがてまいらせたまつりたまはんとおぼしめす。世人はわかみや(職)にぞまいらせたまつり給はんと思ひ申しかど。いかに覺しめすにか。東宮にとおぼしめす。さりとしてさきの一品宮(職)をろかにおもひまいらせ(させ)給ふべきにあらず。たゞみるよにいますことしうできなくみたてまつらんと思ふなりなど。人まれず御ふみかよひけり。かゝれどうちには。内大臣どの(職)の御くしげどの(職)参らせ給べしと申は。『いかなるにか。内には水きこしめし。おもやせさせ給な』とぞ人々(あ)申める。いかなる御とにか。おぼしなげかせたまふに。三月つごもりよりは。わざとくるしうせさせたまへば。中宮(職)ものぼらせ給ひて。うへの御つぼねにおはします。御もぎものびぬれば。いとくちおしきことを覺しめす。さるべき人々(あ)は。いかなるにかと。人しれずおもひなげき給ふ。女院(職)もいらせ給ぬ。四月ついたちになれば。わざとくるしうせさせたまへば。御修法あまたはじめさせ給。御いのりのこることなし。とのばらもまかてさせ給ちりなくさぶらはせ給。御もの(く)けどもうつりての(あ)まるさまいとあそろし。れいのほりかは左大臣殿(職)女御どの(職)ぐし給ひておはし。さらぬもの

さまぐのり。いとくるしき御心ちこそへても。一品宮(孫)の御裳ぎのとまりぬるをくちちしくおぼしめして。七日いとくるしくせさせ給て。『我後一けふかくてあるべきものと思けんや』とおぼせらるは。御もたてまつらましものをなど。覺しめすなるべし。ことしぞ廿九にならせ給へば。まだいとさかりにおしき御ほどなど。院(孫)も中宮(孫)も。いかにくとおぼしめす。殿(孫)内大臣どの(孫)。さらぬ殿ばらも。かたとさまかて給事なくさぶらひ給。御いのり世中ゆすりみちたり。いかにおはしまさんと。いとこそおそろしけれ。

榮華物語卷第三十三

きるはわびしと歎女房

内(孫)の御なやみ日をへておもらせ給て。四月十五日ばかりより日ごとになえいらせ給。女院(孫)中宮(孫)涙にくれておはします。三位(孫)だちもいとむつまじき人なれば。ひとつにておはします。うるに四月十七日のゆふがたうせさせ給ぬれば。ふた所なから院も宮も。おなじさまにておはしませば。きこえさせわづらひて。かくてのみはいかてかとして。御せうとの殿ばらそのしもの御つぼねに。御ぞにをしく

ふた、な、據諸本補、據小木補の

なり、據諸本補

ど、據諸本補

こ、據諸本補、御、據諸本補

い、原作く、據諸本改

くみて。ゐておろしたてまつらせ給。いままばしだに。のどかに見たてまつらせ給べきを。御心にもあらずいみじうおぼしまどはせ給。御こそもり聞をついみじ。世中ゆすりみちたるこちするに。たしかに聞えさする人もなければ。一品宮(孫)のおさなげにかなかせ給も。いみじうあはれなり。いつのまにか。東宮(孫)の御かたには除目ありて。頭五位藏人。六位藏人などなり。よろづに皆師子こまいぬひのみづ志御はかしなど。わたりひきかへたるありさま。夢の心ちなむまける。れいのさほうに。御めのとごどものりたふのいよのかみ。さねつな。のりふさ。よしみちなどつかうまつる。心ちども思やるべし。かね所ふさの中宮の亮。いひつゞけてなく聲のおどろおどろきもあはれ。むかしは。かく位にてうせさせ給は。まさなき事おほくとこそせかりけれど。今のよは。さるきびしき事もなし。關白殿(孫)もおなじ殿におはしまし。いまのう(孫)もいかにかはなさけなくもおはしません。院もみやもたいなき人にておはします。廿一日のゆふさ。京極殿の東對におはしまして。そこにて御念佛などあるべければ。あかつきに中宮(孫)一品宮(孫)も。北の政所(孫)のおはします。鷹司殿にいでさせ給。位ながらの御ありさまは。ところせくいみじかるべければ。ちりのみかどになしたてまつらせ給てけり。殿はいまの内の御事共をこなはせ給へば。内大殿(孫)こと殿ばらぞひたてまつらせ給。いでさせ給あかつきの月の

くまなきに。ものおぼえぬ心のうちにおぼえける。出羽弁。

めぐりあはれたのみもなくていつべしとおもひかけきやありわけの月。

前院(瑞)も京極殿にいでさせ給ぬ。院も宮もおはしますやうにもなく。まづみいら

せ給へり。應司(上)どのうへ(瑞)は。まぢつけ聞えさせ給て。よろづになぐさめ聞えさせ給へど。『(古今集上)あはすて』にのみぞ書つくすべくもあらず。關白殿。内大殿。とのばらよ

りはじめ。なきこひきこえたまはぬ人なし。とのうちには「じめて」世の光をとり

いでさせ給しよりはじめ。御心はへのめでたくおはしまして。御年の程。をしくいみ

じく夢かどおぼしまどふ。女院の御心(瑞)のうちにむまれさせ給し程。殿のおぼしよろ

こびしより。けふいまの御心など。よろづをば申すべきにもあらず。たゞこひし

うかなしう。いみじうおぼしめしまどはせ給。中宮(瑞)も。露の御ゆをだにきこしめ

さて。日比にならせ給ぬるを。又いかにと女房などはもてさせ給きこえさす。御葬送

の程ちかくなるにも。かなしながらもおはしますほどはさてもあるを。いまはとき

きまいらせんこそいみじう。いとくなどの給はせて。せじのきみ。

いつかまたむなしきからのからだにものこりなくともならんとすらむ。

出 羽 弁

まらぬかなきみがけぶりを見るまでにかずならぬみもあらんものとは。

も、據諸本補

ど、原作は、據諸本補
じて、恐行

の、據小本補

め、原作は、據諸本改

な、諸本作に

こ、據諸本補

に、據諸本補

又。

いまはとてけぶりとならん夕べこそかなしきことのかぎりなるらめ。

一品宮(瑞)などのおはしますべきつちのとのつくるををきいて。いづも。

いつしかもみつばよつばとおもひしをおもひもかけぬとのづくりかな。

かへし。

なか／＼にさだめなきよはあすか河たまづくりなるやど／＼ならじや。

女院の御だうおこなはせ給けるに。やなぎのつくりたるを。内に参らせ給へりけれ

ば。えだはまことにてありければ。清涼殿のつぼにうへさせ給へりけるが。おひい

でたりけるをき給て。

宮のせじ

うきふしと思ひながらもおひいでんやなぎのいともあはれなるかな。

いづも

かたみにとおもひよるよりあをやぎのめのいとなくやかなしかるらん。

など志のびつゝ。なみだの際にはいひかはしける。顯基の中納言。人よりはことに

などやおぼしめしけん。法師になり給にけり。よにあはれなることにいひのゝある。

女院より御消息つかはしたりけるに。

世をすて、やどをいでにしこゝろにもなをこひしきはむかしなりけり。
と申給へりければ。侍従の内侍

ときのみもこひしきことのなぐさまは世にふたたびもそむかなましを。
おほせごともきてありけるなるべし。内よりとて御使の参り。御ふみなどまいらせ
させ給へるにも。まづかきくらししてのみ覺しめしまどはせ給。御さうそうの夜。

かけまくも思ひそめてしきみなればいまもくも井をあふぎてぞみる
中宮亮かねふさがもとに。入道一品宮(璣)のさがみ。

ほどふればなぐさむかたもあるべきをたえぬなみだのあめはいかにぞ。
齋院(璣)のちりさせ給ける夜の有様などの。いみじう哀なりけるを。ある人。
かけてだに思はざりけんこそこのけふかつらぎ山にあとたえんとは。

四條中納言定頼

世の中のあはれなるにはおほぞらの雲もなみだををしまざりけり。
などぞ聞ゆなりし。御めのとの内侍のすけ。あからさまにまかて、あまになりけ
り。この縫殿助といひける法師に成にけり。
おほかたのよその雨とやちもふらんこふるなみだのふると志らずや。

とまのまも云々、概世繼作つかのまもこひしきこと、なぐさまばふた、いび世なもそむかざりまし、○た、原作さ、據諸木改

かひなき、集作かなしき

をくれじともふこゝろにそむけどもこのよにとまるほどぞかひなき。
など。ものおほえぬ心のうちに覺え給けり。

少將のななし

いまでも世にありへんとおもはぬをそむくみちにもをくれぬるかな。
女院に僧の装束せさせ給て。御いみにこもれる僧にたまはせんとて。故院(璣)の御
方の女房にぬはせさせ給へば。

けさみればなげきあかせるなみだにはみぎのたもとぞあらはれにける。
御ぶくになる夜。女院の兵衛内侍。

かたみとてきればなみだのふぢごろもまほりもあへずそてのみぞひづ。
御葬送の又のつとめて。いみじう雨のふりければ。

のぼりにしけぶりはくもにまがひつゝ、まのびもあへぬあめのをとかな。
これも女院の女房。

こふるまにいやとをさがるわかれにはとめんかたもなきぞかなしき。
ごせちの君月のあかき夜。

さやかなる月もなみだにくもりつゝむかしみし夜のこゝちやはする。

兵衛内侍

せ、原作を、據諸本改